女性から見た「会」

●女性から見た住民運動ということで前会長夫人の丹羽あや子さんと、近藤正子さんに話をしていただきました。

ああ、このアユが——

司会　女性の立場から見た「きれいにする会」のことを話していただいて、ひとつの教訓にしたいと思います。

近藤　私が朝日生命に勤めていた時に、生命保険の関係で丹羽さんがお客さんだったんです。丹羽さんたちがそろわれて会が発足して、ちょっと経った頃に丹羽さんの家におじゃまをして「会」の話をうかがい参加させていただきました。

丹羽　その頃の女性の会員はこの近所で何人かいました。鈴木さん、古川さん、それから古川さんのおばあちゃんが熱心にみえたんだけど亡くなられました。あと何人かみえたりみえなかったりしました。

近藤　入会してしばらくしてからアユを放流なさったことがありました。土岐の漁協の方がみえて、この川で放流をなさいました。雨の日でしたが、土岐の組合員の方と私どもが、アユを流すと同時に「迎えてあげてください」と言ってみなさんと握手をしました。その時に「ああ、このアユがどんなに育つのかなぁ、こんな川でどうかな」というふうに思ったんです。そのことがとても印象的で「放流されたアユがどんなになって育つのかな」という心配と期待とですごい想いでした。あの時の私はすごく燃えていたんですね。魚のことだけじゃなくて「川自体がどんなになっていくのかな」という想いで、感動というか、何とも言えない想いがありました。

丹羽　「食えない魚釣り大会」というのがあったんだけれども、その時は、私はよう食べられなかったんです。子どもさんたちや田中美智子さんは、みんな一生懸命食べてみえたけどね。食べられないお魚だというのに、田中さんはいつでも食べてみえるのね。私はここの魚はいやだったの。

ついて行って——

私はフナの味噌煮が好きだったの。市場にあるとたまに買って食べたんだわね。おいしいと思って食べたんだわね。だけど、ある時、夜に宮田明美ちゃんについて庄内橋の下の段になっている所で、ウナギの子どものシラスが上がるのを懐中電灯をつけて見に行ったのね。その時、よその人が投網をうっていて、大きなバケツに二杯くらいきっちり入っているのを見たわけ。それで「これを売りに行くんだ」と思って、それからフナは食べられなくなって、もういっぺんも買わなくなったの。市場に出てしまえば、どこの川の物かわからないでしょ。あれを見てから、もういやになっちゃって、どこの魚かわからないのでフナの味噌煮が出ても「もういや」と思っちゃうのね。

丹羽あや子さん

私は、主人とふたりで宮川の方に釣りに行ったことがあります。私も釣りをやるんです。あの川はきれいな水ですよ。そこで私は、釣りはじめは三匹か五匹パッパッと釣るんだわ。そうするとあとは絶対に釣れないの。で、もういやになっちゃうの。主人はずっと釣っているのね。

泊りがけで行くこともありました。私がなぜ行くのかと言うと、川にきれいな花が咲いているからなんです。石にはりついているツツジなんかを眺めるのが好きなので、つい

て行くんです。いちばん感動したのはユリ。山ユリがビッシリと咲いているし、あんなにいい香のユリははじめてだったんだわね。

それが旅館の玄関を入った所に一輪差してあるんだわね。それがプーンと匂って「うわぁすばらしい、いい香り」と思ったんだわね。部屋に案内されたら部屋にも差してあるんだわ。「山に行ってみれば、いっぱい咲いていますよ」って言われて、私は魚釣りじゃなくて、ユリを取りに行ったのね。そしていっぱい持ってきたら、旅館の人が水に入れてくれて、きれいないのだけをしばって新聞紙できちっと包んでくれたの。それをかかえて電車に乗ってきたのね。名古屋駅に下りたら、きれいで香りがいいので、まわりの人が「うわー」って言ってびっくりしてみえたの。

山ユリが咲き出してきれいなのは六月か七月ね。でも、道路が広くなっちゃって、あの辺もユリの数がどんどん減っていっちゃうわね。それから、下呂の方へバスで行く途中で、そのユリの匂いで運転手さんが頭が痛くなってみえたことがあったんですよ。

近藤　私は保険の仕事をしていますので、お客さんの所へ行っては「私こういう会に入っているんだけれども、すばらしい会ですよ　」って言って、いろんな方にちょっちょっと話してみるわけです。「見に来てみない」とか「釣り大会に来てみない」とか言ってね。そうしているうちに、会社を経営していらっしゃったり、自分で事業をしていらっしゃる方たちが、忙しいだろうに「じゃあいっぺん参加してみようか」と言われて、今もまだずっと続けてみえますね。水野さんとか高橋さんとかね。そういう、この地域とは全然ちがう所の人なのに、しかも社長さんでお仕事がいっぱいある人でいらっしゃるのにね。

近藤正子さん

この「会」に入って、そういうれしいことがわりと多かったですね。

私は仕事で必ず橋を渡って行くんですが、最初は丹羽さんに言われても「こんな川がほんとにきれいになるのかな」「いつになったらきれいになるのかな」「田舎で見たような、あんなにきれいな川はもうもどってこないのかな」と思っていました。川上の方から王子製紙の臭いがプーンとしますしね。そんな想いで川をながめてきて、会合の時にいろんな話をしました時にも「本当に、みなさんのおっしゃるようにきれいになるのかな」ということはよく思っていました。「王子製紙が川を汚したんだよ」と言われた時は「大企業というのは、こんなにやりたい放題で世の中を渡れるのかな。こんなことをして市民のみなさんの間でまかりとおるのかな」ということで、非常に頭にきました。

丹羽　私はあまり話を聞いているわけじゃなくて、影の人間でバタバタしていたんだわね。

釣り大会やボート下りの時に、子どもさんなどからの電話の問い合わせが朝からたくさんあってね。私は早く出られないんだわね。「雨が降っているけど、どうしたらいい」とか、新聞社の方が「どこでやっていますか」って言ってね。主人は朝早くから現地に行っているから、みんな私が出ることになるんだわね。電話番ということなんだね。それがおちついてから、やっと近藤さんと現地へ行って、お手伝いしたりお茶を沸かしたりするんだわね。

司会　活動をされている男性やご主人を女性の目から見て最初どんな気持ちで、そして今はどんな気持ちになっていらっしゃいますか。

奥さんは大変だな

丹羽　そんなにうれしくはなかったね。（大笑い）　女性はいい顔はしていなかったと思うよ。いろんなことがあって、だんだん心の中が変になってくるじゃない。

近藤　私もわきから見ていて「奥さんは大変だな」と思っていましたものね。

丹羽　それがね、たとえば、私はテキパキとやれればいいんだけれども、受け答えなんかもうまくできないんです。主人はみなさんと

はベラベラしゃべるけど、私と二人になるとお互いあまりしゃべらないのね。主人はテレビにかじりついて、私は家事でしょ。だから、よくわからないことがあるんです。だから、問い合わせがきても、はっきりと受け答えができないことがあるんです。そういう時は、そりゃ腹がたちます。「まあ、あんた事務員おかないかんわ」って言ってやるんです。私も、そんなに電話番できないから、いやみだわね。

近藤　事務局長をやってみえた宮田さんの場合は、お二人が意気投合してみえるので、丹羽さんの奥さんとはまた立場が違うのね。二人がいっしょに一生懸命「会」のことをやってみえるのを見ますので、同じ考えでピッタリしているんですね。「ああ立派だな」と思って見ていました。丹羽さんとことは状況が違うからでしょうが。

司会　この前、小川さんの所へ行く機会がありました。小川さんもこの会のブレインで、丹羽さんの片腕でずっとこの「会」をきりもりされているんです。小川さんの奥さんが「丹羽さんの所から電話がくると、旦那さんがいそいそと行っちゃう。どうして行くんだろう」と言っていましたね。その時に「女の立場から嫉妬するのはおかしいけれども、丹羽さんって、どういう魅力のある人だろう。うちの旦那をとっちゃって」という言い方でおっしゃっていました。それだけ丹羽さんは魅力があるんですね。

そういうふうに男性がどんどん外へ出ていくと、いろいろなトラブルというか、行き違いがあると思いますが。

丹羽　川下りがあってから、小川さんの奥さんも「主人の気持ちがよくわかった」と言ってみえましたわね。

近藤　話したいことがあって「きょうは家にいてほしい」と思ってもパッと出てしまわれますものね。

市長さんへのお願いの時も

丹羽　小川さんは写真をたくさん撮っていらっしゃるし絵も描かれるのね。植物の名前なんかよく知ってみえるのね。

近藤　私が丹羽さんといっしょに市役所に行った時に、小川さんもみえまして、その時に市役所の喫茶室から名古屋城が見えたんです。私はただ漠然とながめていただけなんですが、小川さんは「あの名古屋城には、徳川さんが植えたという薬草がいっぱい生やしてあるんだよ」とおっしゃいましたね。そしてドクダミの話をなさいました。ドクダミにも種類があるそうで、そのことをくわしく教えていただいて、「ああこの方は本当にいろんなことを細かく研究していらっしゃるんだなぁ」とびっくりしました。

司会　近藤さんは、そういう市長交渉などにも参加されたわけですね。

近藤　参加というより、お供でついて行ったんです。たびたびではなかったけれどもね。本山さんが市長をやってみえるころでした。

丹羽さんや「名古屋港を考える会」から若いお母さんたちが、子どもをおんぶして市長さんとお会いしたことがあります。その時は住民運動への参加に対しての市長さんへのお願をしたと思います。

司会　本山市長は『住民参加』ということを公約にあげられて、「住民参加ということは、いったいなんだろう」ということで「きれいにする会」ができまして、市政に対する直接的な意見を丹羽元会長が述べられたと思うんです。その時から参加されて市長にお会いになっていたわけですね。

これまで「きれいにする会」を十三年やってきたわけですが、女性の目から見て、この「会」をどういうふうに発展させていったらいいか考えてみたいのですが。

丹羽　私は交渉とかいうところへはあまり出ていなくて、家にとじこもっているだけでした。主人が外へ出るので、私が家のことをやらなくてはいけなかったんですね。主人は「会」のことは好きで、そればかりになって、親戚なんかのつきあいは私ばかりになっているのね。

司会　丹羽さんがおっしゃっていたんですが、「親戚関係というのは自動的にできちゃうけど、自分の友だちは自分が生きてきた間につくってきた財産だ。どっちを重要視する

かと言ったら、やっぱり自分の財産だ。そういう友だちというのは大事にしたい」と。

丹羽　親戚は、ほっておいても親戚なのね。だからどうなってもいいんだわね。友だちというのは、いちど不義理をすればそれで終ってしまうからね。

司会　言葉のやりとりひとつで次の日からは口も聞かないということもありますからね。そういう意味では、生き方というか、人生観の中からひとつひとつの行動を選ばれているんじゃないのかなということで、ぼくは感心しているんですけれどもね。

　近藤さんは「会」の運動の中での子どもたちの様子をどうごらんになりましたか。

運動の中での子どもたち

近藤　川を時々見ていますと、日曜日なんかに親子づれで釣りに来てみえるのをよく見かけるようになりました。両側の土手を竿を自転車にくっつけて走って行ったりしているところを見ますと「子どもさんもだんだんと川に関心をもってみえたな」と思います。そういうことが、この「会」に参加した当時よりもめだつようになりました。

司会　ここに写真があるんですが、この前の「釣り大会」の時の写真です。川上さんの上の子です。いちばんはじめにヘラブナを釣って、すごくうれしそうな顔をしていたんですよね。二十何センチかありましたね。

丹羽　この子たちは、いつもはうまく釣れない子たちだよ。何べんやってもね。はじめて釣れたんだね。

近藤　私が思ったのは、子どもさんがこういうことをなさったら「ああいいなあ。子どもさんが変わるだろうな」ということです。

　よく「子どもは魚ばなれをしているので困る」ということが言われますでしょう。それから魚と同時にタンパク質とかカルシウムも食べられなくなりますね。だけど、ここへ来て焼いたりなんかしてみなさんにさしあげたりしていますと、「おれ食べたことないわ」と言いながら、友だちが食べていると「ちょっと食べてみようか」と言って食べてみたりして「ああ、おいしいおいしい」「ああ、意外とおいしい」と言って子どもさんが食べてみえるんです。そういうところを見まして「ああ、これは確かに子どもさんにとってはいいことだったなあ」と思いました。

川上くん

司会　子どもが川に興味をもつとか、釣り人が来て、今まで見捨てられていた川が生活のひとつの部分に入ってきたということはいいことですね。

近藤　完全に入ったということですね。「いらっしゃい」ということを言わなくても、日曜日になると行かれるところをよく見ますからね。これが「会」の十三年の本当の成果なんですね。

　最初十三人ががんばられ、今は二五〇人ぐらいになって、それとともに「会」とは別にも庄内川や矢田川にどんどん釣りに行って、川を見ていく人たちがたくさんいるということですね。そして「ああ、きれいになったな」と、ひとつの話題になってきたんですね。

丹羽　はじめの頃は、子どもさんたちもなかなか食べないからジュースをあげて、それを餌に食べさせていたんですよ。（笑い）「食べたから」と言ってジュースをもらいにくる子もいてね。そんなこともはじめの頃はありました。

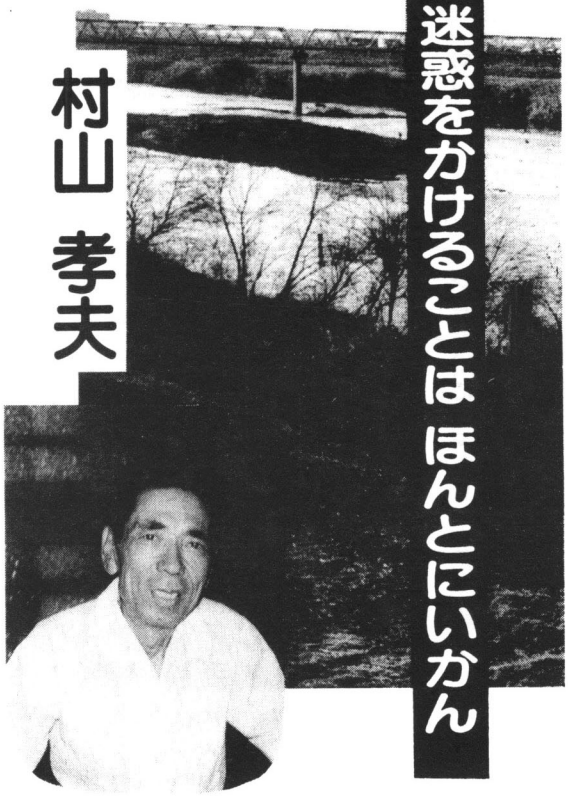
　私は主人がやることには、あまり反対はしないように考えてやってきました。反対したって、やりたいことはやる人ということもありましたからね。

司会　むしろ、うしろから援助した方が家庭内のトラブルはさけられますわね。また、それだけに男性からすれば「一生懸命やってくれるから、ちょっとは時間をつくって、家のこともやらなきゃいけない」というふうに思うんじゃないでしょうか。

　きょうは、いろいろありがとうございました。

迷惑をかけることは ほんとにいかん

村山 孝夫



信州の長野市から四キロぐらい山奥に入った所で生まれました。

子どもの頃は五分くらいの所にある川で、ふんどしで飛びこんで遊んだ記憶があるんです。小学校三年生ぐらいから長野市に出ていまして、そこにも十分くらいの所に川があって、犀川と合流する小さな川で、すそばら川というとこで魚釣りやらして遊んでました。そこでは「はえ」とか「ふな」とかをよく釣ったですね。みみずのかけ針で流しながらやったですね。

●その当時、家族の方はどんなお仕事をしていらっしゃったんですか。

土木関係の仕事で市の役所へ勤めとったですね。そのおやじが戦争中に軍属で北海道の千島のほうに引っぱられて飛行場作りをやっていて、戦争が危なくなってきた二十年に引揚船で潜水艦に船もろとも沈められて亡くなっちゃったんです。そんなことで、おふくろひとりで子ども五人を育てたんです。私も徴兵の一番最後の年代だったもんで半年ほど戦争に行ってきたんですけどね。父親は一人もかたづけずに行っちゃったもんで、私の兄弟っていうのは頼るもんがなくて、結婚も何もかも全部自分でやってきたんだけどね。私は兵隊から帰ってきてから、長野で駐留軍の軍政部に勤めて占領軍の自動車関係の整備をやったりしてね。だけど、それも占領軍がだんだん引き揚げてっちゃうもんだから縮小されて仕事もないし、就職難で二十五年につてを頼って名古屋へはみ出してきたということだね。二十四才の頃でまだ一人者だったです。タクシー運転手になり結婚しました。南区のアパートに住んでいた三十何年かに、ここが守山市の時代に土地をなんとか手に入れてね。三十年代の後半からこの土地におるということだね。

子どもは二人で、一人は嫁いでいったです。今は定年後に嘱託で大型金庫の会社に勤めて銀行関係の保守をやってるんですけどね。

ここに住んだ頃は子どもをつれて川に行ったんですけど、なにせ白い水でね。丹羽さんがよくしゃべってることなんだけれども、ヘドロやらが臭くてね、くさいし魚が死んでるし、夜は風の関係で匂ってくるしでね。三十年の後半の高度成長のはじめの頃でね。橋の辺へ行くとなんとも言えんような臭いで、ほんとに何とかならんかなっていう思いをもっとったんで、ほんとに「死の川」だったですね。

その頃たまたまそこに下水処理場を作る話があって、その頃はどこでもむき出しの臭ってくるような処理場があちこちにあった時代だもんで、そんな物を作られたらかなわんということで、まず丹羽さんの呼びかけだとかでまず丹羽さんとの出会いがはじまるわけです。

何回か会議やって話するうちにあの人の話に興味をもって、わしらの思ってることをズバズバ言ってくれる行動

力のある人なので、処理場の監視委員会をつくり監視運動にも参加してくということでね、これが「きれいにする会」のはじまりなんですよ。私も最初の一人でね、手作りの看板をそこらに立てたりしてたんです。

●今でこそマスコミや行政から脚光をあびて「矢田・庄内川の会」というのは評価されているんだけれども、最初四人の時はどうだったですか。

はじめのころは

ほりゃまあ全然で、何を言っとるってなもんでね。だけどまず第一回の「食べられない釣り大会」でクローズアップされてきたと思う。

●村山さんはその間に丹羽さんとともに住民運動をはじめられて「矢田・庄内川の会」の発起人という四人か五人の中心メンバーになってやられると、家族の中で「またお父さんどっか行っちゃう」とか、子どもといっしょに遊んでくれないとかいろんなことはありませんでしたか。

どちらかというとついてまわるもんで、家庭的な無理はせずに仕事を休んでまでというふうでなくて、そういう方は丹羽さんたちがやってくれて、できる範囲で行動しとったもんでそう問題はなかったね。ただ、わしは生まれが信州だもんでわりかた正義感が強いもんで、どうしても自分の心に許せんという部分があるわけね。だから丹羽さんとともに今日までやってこれたんだと思うんだけどね。

そして現実にだんだんと川の水もきれいになってきたし、匂いもなくなってきたでしょ。

●そうですね。ただ完全になくなってきたわけじゃないでしょうけど、この前も調査した時に十二、三種類の魚類が捕獲できましたね。「あゆ」がいたり「しらはえ」とかいるとかね。

でね、魚の名前を聞かれると非常に困るのは、こういう運動をしていながら今は私は釣りをやらないんだね。そういう会員も少ないだろうけど、私は釣りの方から入ったわけじゃなくて、ただきれいにしようという運動をはじめるうちに、きれいにっていうことはやっぱり魚が住むということで、今だに釣りはやってないんですよ。そのために魚の名前はよくわかりません。丹羽さんたちといっしょに釣りに行ったこともないんです。子どもの頃は田舎では釣ったけどね。

実際に魚が来ると思われるのは、水鳥がよく来るようになってね。よく堤防を散歩するんだけど、非常に増えてきたもんでね。「鵜」とか「鴨」とか「しららぎ」、最初あんな鳥は見なかったもんね。ああ、こういう運動でやっぱり魚が住める水になって水鳥のエサがある川になったと思いますね。

●村山さんは信州の方から引っ越しなされて、いろいろ職を変えたり、いろんなことを見てみえたわけですが、その中ではどんなことがありましたか。

川をきれいにすることとは関係ないけれども、タクシーをやっとる頃、雨の夜七時頃、子どもづれの奥さんを浄心の方から乗して、ちょうど庄内川の橋の上で降りると言ったんですよ。雨で増水してるし、こんなに雨が降ってるのにおかしいなあと思うけど、まあ橋のたもとで降ろしたんだけども、それから三〇分から一時間くらいたってから川へ人が飛びこんだと川で材木拾いやってる人が言ってる話を営業所で聞いて、ちょっと問題だと思って

警察に飛んでったんだけど。次の日新聞を見ると、母親が子どもと心中なんだろうね。おとっつぁんがギャンブル狂で、子どもを川に二人ほうりこんで母も飛びこんじゃったんだね。それがわしが乗したままの格好だったね。それでギャンブルっていうものは周囲の人はよくやっとって、わしも引っぱられてやったことはあるけど、ほんとにいかんという教訓にもなったわね。運転手っていうのは暇があるもんだでギャンブルをやる人が多いもんだでね。その後でも誘われたけどギャンブルにはのめりこまずにこれたと思っとるね。

●村山さんの経験から言っておきたいことは。

人に迷惑をかけない

特に痛感することは、人に迷惑をかけることはほんとにいかんと。これは親の教訓でも何でもなく自然と身に付いたように思うんだけどね。いま一番それがないと思うんだわ。

勉強勉強でね。勉強より何よりもまず一番は、人に迷惑をかけるようなことはやってはいかんと。そしたらもっと世の中が良くなると思うんだわね。そういう教育をした上にたって勉強がないといかん。成績がいっくら良くても、頭を悪い方に使っちゃうんだもん。それがわしの一番言いたいことやね。簡単な事なんだけど、まずそういう教育ができていないんだわ。今新聞なんかを見ると、車に乗って橋とか山とかにゴミを捨てるとかで、生まれた時からそういうマナー、教育がなってないもんね。みんな競争競争という時代だからでしょうか。

●竹内さんとお話しした時も、戦後生まれが一番だめだと。

そりゃやっぱり敗戦後から生まれた者で、敗戦後というのは人のことをかまってたら生きていけなんだものね。

敗戦後のわしらは青春ってなもんはなかったね。仕事はない食料はないで生きてくために一生懸命だったね。仕事は食料の買い出し、金もうけには長野からりんごをりんごリュックにいっぱい持って東京に売りに行くとかで、何としても生きていかなかったら死ぬからね。その頃は正直にやった人は生き残れなかったわね。配給だけでは生きてけなんだもんね。みんなヤミで何か買ったりしたもんでみんな生きてこられたんだわね。配給だけでやっとった裁判官が栄養失調で死んだっちゅう話もあったしね。

ほんとにあの頃の年代は青春はつまらなかったっちゅうか、戦前の教育では男女の間で話ができるようには育っとらんしね。だから女友だちというのはあるわけでもないし、女にはようものいわんもんでね。戦前なんていうのは女と一緒に歩くなんていうのは許されない時代でしたから。

●今だったら「おんな」って言うこと自体が女性蔑視だってしかられちゃいますからね。

学校でも、いじめることはしてもいっしょに帰ることはできない時代に育ったもんで、恋愛とかそんなもんはない青春時代だわね。

●そうすると子どもや孫に残してやりたいことは、やっぱり平和であるということですか。

そりゃもうね、その通りですよ。さっきの話にもどるとね、そういう時代だったので、教育なんてものは二の次で生きていけなかったでしょ。そういう人がいま親になってるもんで子どもに教育ができない。そういうことが今現われているんじゃないかと思いますけどね。だから、こういういまの時代を考え直して、また、人に迷惑をかけない教育をまずして、その上に立った勉強をする必要があるんじゃないかと思いますね。

思うだけで、新聞や何かに投書するような行動力はまだないけど、一度書

きたいなと思うことはいつもありますしね。不満だらけだわね。人間教育がなっとらんということでね。ただ全部が全部というわけではないけど、全般的に見るとそういうことが多いということだね。

車に乗っとっても、たばこだってそのままぽいでしょ。灰皿はみんな付いとるのにね。悪気はないんだけれど、ゴミでも車ん中に袋を置いて捨てればいいのにポイポイとほかってくでしょ。子どもがおる親がそういう事をやっとるもんね。親も戦後の教育を受けられん時代に生きてきとるもんでね。

戦後の生きてくことが精一杯だったもんでそういう勉強ができんでね、そんなとこから高度成長時代でどんどん金もうけしないかんということで王子製紙のたれ流しとか悪い物を川へ流すとかいうことにつながってきたんだろうね。

●簡単にゴミとかを捨てますからね。人が見てなきゃぱっと捨てちゃいますからね。

そんな時代でこのままいくと将来が怖いわね。だから丹羽さんが言ってる「きれいな川とあたたかい社会を青少年に残そう」という言葉になっとるわけね。私が一番言いたいのは、こういう運動は右とか左とか関係なく川をきれいにするなんていうことはあたりまえのことで、自民党も共産党も何党も関係なくね。だから、今までにもいろいろな人が入ったんだわね。そういう運動じゃなくちゃ意味ないと思うんだわね。

運動が続いた力

●誰もが言う事なんだけれども、今のところ矢田・庄内川を考えている住民運動というのは、企業とも協力して行政とも協力して住民も力を出してみんなでやるんだというのが原則なんですね。それがいろいろなところでは、汚した人間や企業を孤立させておっぱらうとかいう運動をされているところもありますね。われわれにはないんですね。

ほんとに自分の奉仕だもんね。自分たちが会費を出してこういう運動をしとるんだもんね。何も求めるものはなくて、ただ未来にきれいなものを残してやりたいという事だけだもんね。水が飲めた川だったんだもんね。

●そうらしいですね。伏流水を取る前はきれいな水が飲めてたのが、王子が伏流水を取るようになってからはあの川そのものが非常に汚なくなった。で、伏流水を取るだけだったらいいけど、使って汚なくなった水をまた川に流すから余計汚なくなっちゃうわけですね。

五つのとりくみ —その②—

鮎の楽園

アユはきれいな水に棲む魚です。庄内川では水分橋付近にも昔は生息し有名な産卵場もありました。高度経済成長によって川は汚され、鮎をはじめいろいろな魚が姿を消してゆきました。「もう黙っちゃおれぬ」と49年12月「会」を結成。庄内川に魚が、アユが戻るまでを運動の目的とし、いろいろな活動を実践してきました。51年6月14日、愛知県によって稚アユの試験放流が行なわれ、追跡調査を開始し、庄内橋にて天然アユの発見となる。「会」発足の49年頃には、フナ、コイなど数えるほどだった魚種も今では、アユ、オイカワ、ウグイ、ニゴイ、カマツカなど約30種ほどにすることができました。しかし「会」発生の地、水分橋付近では今もアユは生息できません。王子製紙工場の廃液などによって水質がいっきに悪くなるからです。この問題をぬきにして庄内川の浄化はできません。「鮎の楽園」づくりは庄内川の水質の向上と水量が充分あることと主食であるケイソウ藻類のあることが条件です。水質の向上には環境基準のランク上げをおいて他にありません。そのためには王子製紙などの工場廃液と上流部にある陶器工場・陶土、源流の水源問題をはじめ、流域の都市化による生活排水、合成洗剤など庄内川の原点から受け皿の港、伊勢湾までを一本の川として行政の力べをなくし、「住民と行政と企業」が一体となって解決しなければなりません。「鮎の楽園」づくりを新しい目標として。

アユの一生

アユは川の水温と海の水温がいっしょになる13℃～16℃の春先に遡上をはじめます。この頃は水性昆虫を食べています。中流域についたアユは石についているケイソウなど藻類を主食としアユ特有の縄張りを持つようになります。上流、中流で生活したアユは秋になると川を下りはじめ、増水した夜などに移動し産卵に適した場所で産卵行動をはじめます。産卵をした親は雄雌とも死んでしまいます。生みだされた卵は石などに付着し、2～3週間でふ化します。稚魚はふ化するとすぐに海や湖に下り、翌年の春まで岸近くで浮遊物を食べて生活をし、春先に遡上をはじめます。

そういうことでこれはもう大変な問題なんですよね。それを誘致した県も市も、それを許してしまった住民も被害者と同時に加害者というような考え方で、もういっぺん見直そうじゃないかという運動が原点だと思うわけです。そこをふみはずすと、「矢田・庄内川」の原則が守られないということになるんでしょうね。

そういうことだね。それが全国に先だって「矢田・庄内川」がここまで続いてきた力なんだね。これが政党に片よったりなんかしたらだめだね。一部にはそういうふうに見ている人もあるようだけれどね。わしらもそういう目で見られたこともあるわね。誰だって丹羽さんだって支持している政党というのはあるわね。

●どういうふうに人が見ようと、今のような内容の話をすれば、まあ一〇〇人のうち九九人は理解してくれるんじゃないでしょうかね。でなかったら十三年というのはとても続かなくて、一年か二年カンパニア活動をやってそれで終わりということですよね。

そういうことで丹羽前会長なんかの力で今度、臭くない処理場ができたしね。みんなの集会場もできたし、あの人の行動力にほれとるんだわね。私利私欲もないしね。それだからあの人についてこれたんです。もうそんなになったんかなって思うけど、あの人には今だに敬服しとるね。

●そういう方が多いですね。

処理場を作るために、自腹を切って下見に行ったり、住民の力だけで対市交渉して、何十項目かを出して立派な処理場を作ったんですね。普及率は愛知県でも名古屋市を除いちゃうと三五%ぐらいで非常に悪いんですよね。ちょっとした小さな市町村だと一戸あたり五〇〇万円とか六〇〇万円とか出してもできるかどうかわからないんですからね。

それを住民運動とタイアップしてやるというのは非常に大きな課題だと思います。それをやりきったから、ほんとにりっぱですね。

なんと言っても、丹羽さんがおったからできたんだね。あの人の行動力と手腕（しゅわん）というかね。役所へ行ってもポイントを知ってるもんだからね。

●それを支えた村山さんとか小川さんとか、今の会長の宮田さんとか、そういう人がいたから丹羽さんも思いきってできたんじゃないかという気がするんですが。

どうですか、十三年間やってみえた中で、思い出になるお話がいろいろあると思うんですけれど、運動全体を見て村山さん自身が感じたことは。

お義理では続かない

会計をやっとって、いずれにしても金は十分ないんだわね。それが釣り大会なんかやると金がトントンかちょっとプラスになるぐらいでなってくるね。会員からは年間一二〇〇円しかもらっとらんもんで、そんな金だけではとてもたらんのだけれども、金が少ない中でよくやってこれたとは思うね。そりゃ景品にしても何にしても金がかからんような物を丹羽さんたちが集めてきてくれるしね。

行事の最初なんか六時からはじめる

というと、もう五時前から起きて準備した苦労はあるけどね。今は「山彦会」がやってくれとるけどその頃は人がおらんもんで数少ない人数でテントを張るとか道具を堤防から運ぶとかね。

●最初の頃はどのくらい集まったんですか。

子どもが多いけど五〇〇人くらい集まったかね。

●そういう子どもたちは今どういうふうになっているんでしょうね。最初参加された子はもう十三年があがっちゃってるんだから。

そういう子も時々来ますか。

高校生も来るでね。やっぱり心の中には残っていると思うね。だんだんきれいになってだんだんちっちゃい子どもがやるようになってるでね。大きな「こい」やなんかが釣れたり、名前はわからんけどいろんなのが釣れたりするでね。

●そういうことを聞くことが村山さんのひとつの喜びとなってきたわけですね。

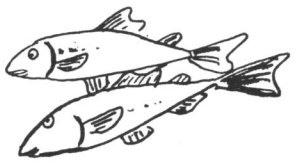
そういうことですね。魚が住む川になってきたというひとつの励みね。実際に釣りをしないけれども、川をきれいにするということだけで今だに参加してるんだね。

十三年と言ってもそんなに長くやってきたような気がしないんだけどね。

●楽しい会だったわけですね。

自分の考え方にもピッタリとあって、お義理で出かける運動でもないし。

お義理では続かんわね。だで、やめていく人もあるけどね。川をきれいにするということは当然の当り前のことだもんで、これは子孫に残しとかないかんわね。そういう考えだけで、そんなに苦労をしたというふうには思っとらんし、当り前のことをしてきたんだね。



●村山さんが後に続く子どもとか孫とか子孫に残しておきたいお考えや言葉がありましたら。

子どもを中心として

先ほども言ったように、まず人に迷惑をかけないということが根本精神になり、すべてに最優先されなくてはいかんわね。そのことによって、もっともっと住み良い町、住み良い場所になるということです。それを実現するための政治をしなくてはいけない。今は教育がくるってると思うんだわね。金でみんな解決しようとしている教育を根本的に考え直していかないといかん時期にきていると思うんだわね。

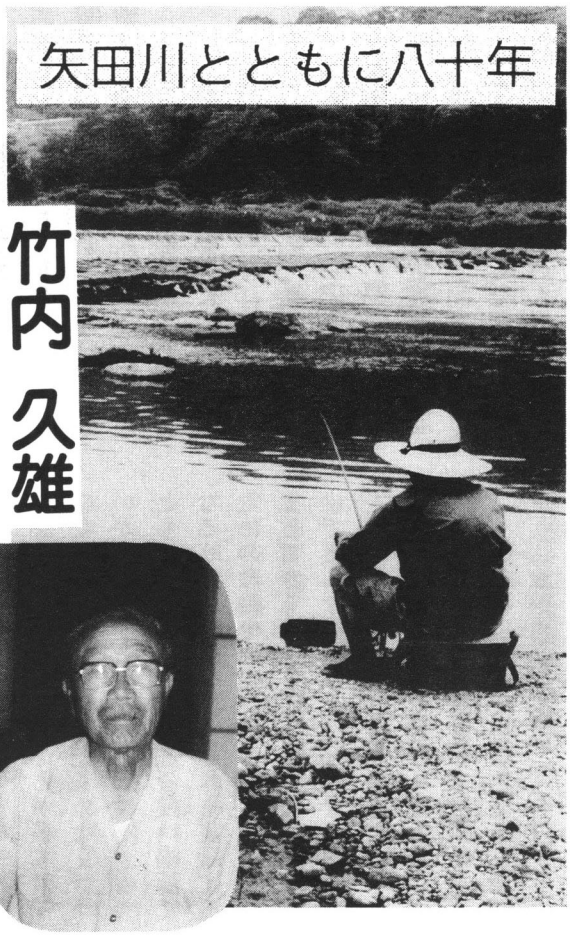
●みんなで自分たちの故郷をきれいにしようということで十三年前に本山革新市政が生まれ、そのときに住民参加という本山さんのキャッチフレーズにいち早く応えたのがこの「矢田・庄内川をきれいにする会」になると思うんです。そのときの理念というのは、さっきも言ったように企業も行政も住民もいっしょになってどうしたら自分の故郷がきれいになっていくのか、きれいな心が保てるのかということで運動をずっとすすめて、その時の立役者が丹羽さんや村山さんたちだったと。

若い人がどんどん入ってきてこの運動を受け継いでどんどん続けていかなきゃいかんとは思うね。子どもを中心とした川をきれいにする運動をね。

●どうもありがとうございました。

矢田川とともに八十年

竹内 久雄



私は明治四十年に矢田川の矢田橋の守山側橋爪で生まれ、六才ころ父親と死別しましたが、幼覚えに父親が近所の網漁友だちと矢田川の流れ中一面に「張りきり網」漁を秋頃の下り鰻、鯉、鮒などを一網打尽のように漁をしていたことを、朧気に覚えております。このように魚種多数棲息しておりました。

小学校在学中、友だちと「四ツ手網」や釣りを覚え、庄内川へも行きました。また、青竹を割り、「竹ヘラ」で水面をたたき「シラハエ」「小ボラ」「鮎」などを浅瀬に追い出し、手づかみにして取りました。これはなかなか熟練を要します。また、深淵では鯉、鮒などがよく釣れ、秋祭りは馳走用に母親に頼まれ、漁に出かけました。

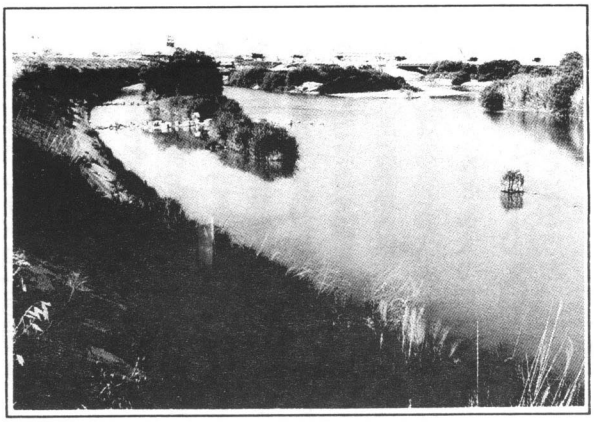
十九才で大手建設会社に就職。広島県呉海軍工しょう建設工事従事中および四国新居浜市に転勤したころ、休日を利用し、海釣りを覚えました。特に呉工しょう在勤四年間に年二、三回、艦隊入港の時、艦隊よりの捨て残飯などを餌に追いかけて港に入ってくる各種大小魚の海釣りへの格別の興味が忘れられない。瀬戸内海の各所での釣りの楽しさもあわせ、思い出になっております。戦後、名古屋および岐阜県へ転勤しまして、各清流、渓流釣りを覚え、特に鮎の友釣りは毎年季節には欠かさず釣行を楽しんでおります。

定年退職後は小規模ながら釣具店を開店しまして、当時、「矢田・庄内川をきれいにする会」を知り、主旨に賛同入会し、丹羽会長の賛意をえて釣りクラブ「山彦会」を組織し、毎月会員とともに一回の清流釣行を楽しんでおります。

ところが、どこの川に行きましても、官民一体で川をきれいにする運動がされているにもかかわらず、心なき釣人などの川汚しは絶えません。

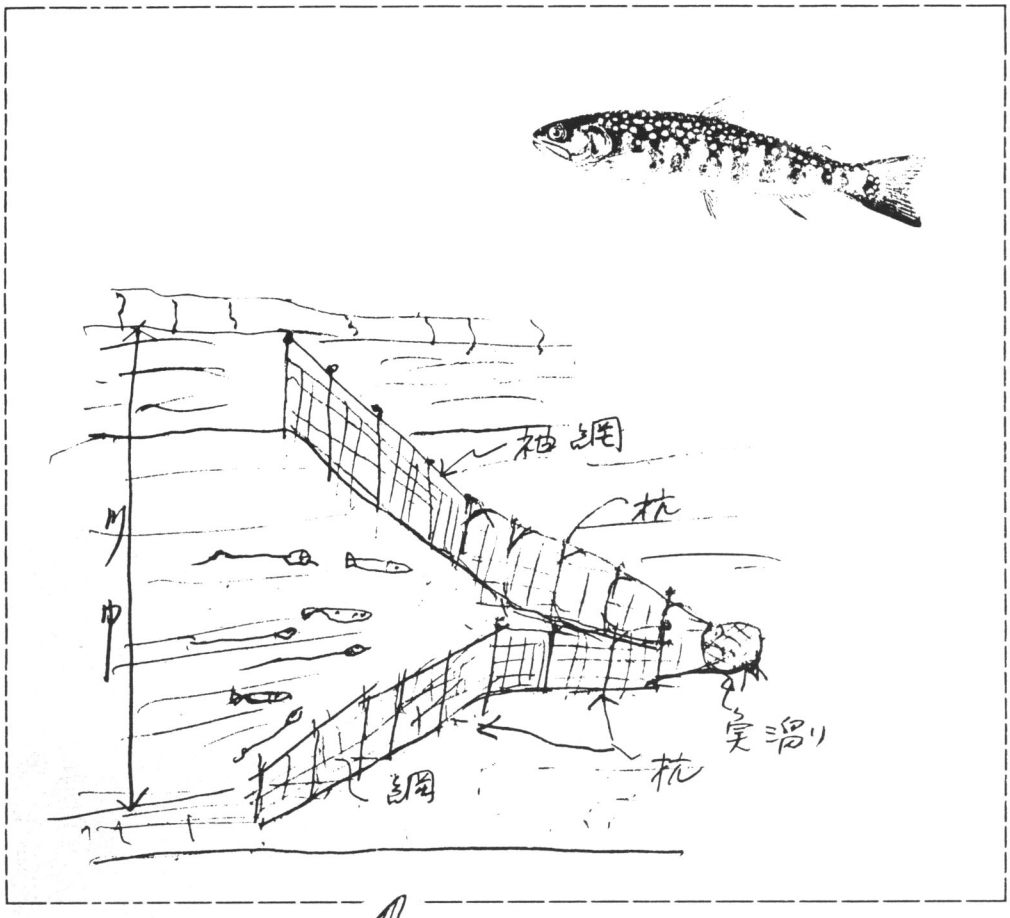
また、各学校などの夏季休暇中に指導者同伴のラジオ体操などを河川、公園および神社境内を利用されますが、子ども、生徒、父兄がゴミなどのあとかたづけがされないのが実に残念に思います。

ついている指導者の一考を願います。また、河川ぞいの道路利用する自家用自動車などから大小のゴミの投げ捨て行為もあり、立札の注意事項は無視さ



れ、その上、立札器物をこわす不心得者や横着者も多くいます。子どもたちがその横着者のその行為を見て覚えてまねをしたら将来いかなる事態が起こるか、憂慮に耐えません。政治を行なう者および教育者の指導の重大さを深く感じます。

■張りきり網（秋）



■竹たたき（春・初冬）

下校時より夕方頃まで川へ行って、イナコ（十～十二センチ）やシラハエなどを、竹へらでたたき、浅瀬へ追いあげ、失神させて手づかみにして取った。

清流の時は、赤なまず（十センチくらい）の毒針で手をさしてしまって痛みが強かった。

その他大・小のなまず、うなぎ、コボ（イナの十センチくらいのもので、春先に海から上がってくる）、シラハエ、鯉、ひ鯉（大雨の時、養魚池から逃げ出てきたもので、大量の時もあった）、せんぺら（七センチくらいの小型の美魚）、鮒（大・小大量に取れた）が取れた。

道具としては、投網、釣り、四ッ網を使った。

この辺は葦がいっぱいだった

宮田 巌

丹羽郡大口村で生まれたんです。わしらは昭和六年に田舎から小僧に出て丁稚奉公に来たんだわね。名古屋の鍋屋町で七年おった（いた）んだわ。その時二十一才で兵隊検査を受けて、兵士で合格だったね。その年に結婚して新所（世帯）をもって土居下というところにおったんだわね。

家内の姑が大反対で、一緒になるなら勘当だというこっちゃわ（ことだ）。おれの息子や娘に、家のないもんはひとりもないっちゅうこったわ。かけおち同然の結婚だったわね。わしも男だで（だから）「なにくそ」と、「今はこれでもそのうちにはな」と思って仕事をやったんだわね。われわれは年が若いので一人前のお金は取れんのに新所（世帯）もったもんで、共働きみたいに、わしも働くおっかも働くと、もう必死だった。必死で新所もったんだわね。

その当時家内は戦争が始まる前だったもんで、上等兵とか二等兵とかいう勲章のボタン付けや金筋付けの内職をやっとったんだわね。わしは日雇をやったりして、いちんち（一日）もうけてきて、いちんち食うという生活をしたんだわ。わしは「これではいかん」と思いながらやってたの。それはどうぞして（どうにかして）、何でもええ（いいから）ひとつ杖がほしいと思って、一心不乱にやったんだわ。もう食わんがためにだよ。その当時いちんちの手当が一円二十銭だったわね。家賃は七円五十銭でね。

それはどうふうだ（どんなふうか）と言うと、わしらは何にもないんだから、たばこと酒はぜんぜん飲まん（飲まない）ということなどをして、自分がこらえて（ガマンして）人より一生懸命やって銭（お金）を使わんかんこう（工夫）して一歩でも前に出たいという考えでずっとくれえて（暮して）きたの。それで子どもが四人できたの。何にもなかったけれども、そうやって子どもも苦労したんだろうと思います。今もお酒もたばこも飲まん

伊藤孝平

で、わしはずうっと通いとる（通しているん）んだわね。

ほで（それから）確か二十二ぐらいで長女がいた時だったと思うが、戦争がはじまって、「こりゃあ（これは）日雇をやっとたらいかん、どうぞして（どうにかして）旋盤とかを習って軍需工場にでも入りたいと思って、今の別院のほうの流川に履歴書を出して、習いで雇うというところを捜いて（捜して）歩いて、そで（それで）習ったわけ。はじめは歩兵こうしょうだったわね。そしたところが、鍛鉱というかねをやかめて（焼いて）練るやつでね。熱てもたん（熱くてもたない）だわ。ほで、やめたの。そで、三菱に大工ということで入ったの。土居下におる時分（いる時）に、松坂屋やなんでか（何か）の装飾の下ごしらえ（土台作り）に入ったことがあったのでね。三菱ではターレット工をやっとったわね。請け負い仕事だって、ひと班一五〇人の中で三番と下ったことはないくらいに一生懸命やってね。ものをでかす（作る）というのは、あれも要領だでね。いかにくずをでかさんか、ほで数をよけ（たくさん）やるというこったわ（ことです）。

そうやって三菱に行きがてら（ながら）昭和十五年の九月にこちらに移ってきたんだわ。ここいら守山瀬古あたりは荒れ地だったの。昔からの地付の人は、「べっとう地」というみんなこんな土地はいらんというとこだったの。売るも何もできせん（できない）もんだで、名古屋とか地方の人に売れるだけ売ってしまったわけだわ。買った人は値上りを待って金だけ出して登記しとるんだわ。だけれども戦争がはじまったもんだで（なので）、何ともならなんで（どうしようもなく）ほおってまった（放置してしまった）わけだわ。

何もなかった所から

わしがここへ越て来た時には、この辺は葦がいっぱいで先が見えれせん（見えない）わね。ほら（それは）夜通るにはほんとにおそがかった（恐かった）わね。そこには借家が三軒だけ建っとたんだわね。あとはもう何にもなかったもんで、庄内橋も矢田橋もずうっと見えよったわね。

そこを三菱兵器に行きながら掘りおこいて、畑や田んぼを作ったんだわ。土地を買ったわけじゃないが、その当時は「道でもええ（いい）から起こいて（起こして）作れ」という食料増産の国策があったでね（あったからです）。「空いとる（空いている）とこだったらどこでも起こせ」とね。三間の道路でも両脇一間ずつには食料が作ったったわ。その当時、米が尊いから、わしゃ米が作りたいと思って、前に田んぼだって葦が生えとる所をスコップで開墾したんだわ。機械なんてありゃせんで（ないので）、全部手だわね。いつも目が真っ赤っかで兎の目だったよ。いちんちに二時間しか寝とらんでね。

今考えやあ（考えれば）親はおれをええ（良い）体に育いてくだれた（育ててくれた）と思うわね。何にもなても（なくても）、何にもやってくれんでも、ありがたいと思っとるもん。わしはね、一切全部自分でやったんだわね。家を建てるのもなんも全部自分でやって、もらったやつはひとつもないよ。

戦争が終ってからは、その当時に一反以上耕作して戦争中の時にある程度供出をしとった者は、実績があるとして農地法で買ったんだわね。今も耕作してるんだわね。

●その当時の川の状況はどうだったんですか。

川の水を飲んでもうまい

川はね、きれーだったわ。とにかく橋の上から見ても石の数が見えたの。魚がおよいどりよった（泳いでいた）のが見えよったの。とにかくきれいな

もんだったよ。わしは、大黒みみずを取って筒状になった「さかいげ」というのでうなぎを取っとったね。川が流れてうねってぶつかるふちの方に五つも六つも入れとくんだわ。取ってきたうなぎを家で食べたんだわね。ほりゃあ（それは）天然うなぎだで話んならん（ならない）ぐらいうみゃあ（おいしい）わね。今のうなぎとは問題にならんね。

●子どもたちはどんな遊びをしていましたか。

子どもんたあ（子どもたち）は川あび（水泳）をしとったわ。しょっちゅうね。昔はきれいだって、飲めよったわ。あの水を飲んでもうまかったわ。

●いつごろから汚くなったんですか。

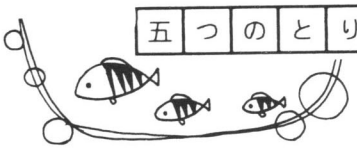
汚れるの一途

わしが川でざり（砂利）をあげるようになってからだわ。終戦後に家内がわずらって二か月ばかり入院して、そのときに四人子どもがいて、高校へ二人行っとったかなぁ。そりゃあ一番えらかった（大変だった）時期だったわね。

この庄内川で砂利をあげとったから一番よう（よく）わかるが、この庄内川がいちばん悪なってきた元祖は、王子ができて、ほして（そうして）お茶みたいな汚れた水が流れるようになってからだわね。はじまりは、鯉がフラフラになって浮いてきたときで、それをすくって食べたもんだよ。それからだんだん「いかんいかん（だめだだめだ）」ということになってきたわけだわ。ほで、わしらはずっと砂利をあげとっても、下にヘドロが付くようになったの。水洗いはするんだけれども、それでもヘドロが付いとるの。

その後はもう汚れるの一途で、砂利をあげることもやれん（やれない）ようになったんだわ。わしは百姓もあるもんだで、切替えてできるわけだわね。にわとりも飼っとったしよ。

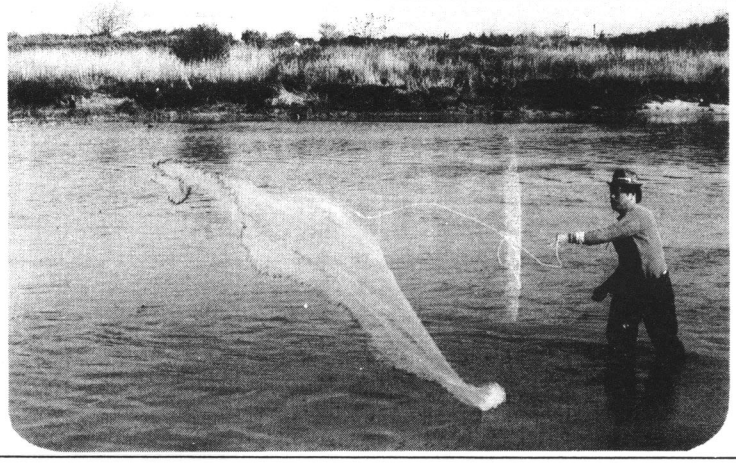
●十三年前に「矢田・庄内川をきれいにする会」ができて、今では息子さんが会長をやっていらっしゃるわけなんですが、その間



五つのとりくみ —その③—

「堀川浄化」

「堀川をきれいに」は名古屋市民の願いです。名古屋市も市政百年行事にあわせていろいろな計画を発表しております。それは「イベント的発想」で先に一人歩きをしているとしか言えません。川の浄化は川本来の姿をとりもどすことからはじめなければなりません。堀川は市民の「生活の川」でした。高度経済成長政策によって、だれにも近よれない「ドブ川」となってしまったのです。見すごしてきた私たち市民にも責任があるといえます。汚した堀川を私たち市民の手で、そんな考えから予算１パーセントを要求し続けています。地道な息の長いとりくみでなければ、きれいな水を木曽川から導水しても解決にはなりません。もともと歴史的にも堀川は庄内川の水によって開かれた川です。庄内川をきれいにし、自浄作用を引き上げることにより、新しい水を作り出すことができます。その水を導水してこそ堀川本来の「庶民の川」「生活の川」となると確信しています。一朝一夕にはなかなか解決ができないと思います。今後もこの基本を大事にしながら慎重な取り組みを進めなければならないと思っています。



ずっとごらんになっていて、何か気がつかれたこととかがありましたら。

はじめはたわけだと思ったが

とにかくね、水分橋の上に行けばプーンと、そりゃあ（それは）何とも言えんにおいがせよったんだで（したんだから）ね。結局この運動ができてからは、きれいになってきたわけ。はっきりしとるわ。お茶みたいな色の水がうすう（薄く）なってきたっちゅう（という）のがよう（よく）なったっちゅうこったわ（ということです）。

瀬戸の方から流れてくる白いのはあんまり気にならんかったわね。昔はあんなふうに白う（白く）はなかったよ。

●この瀬古地域の人たちが一生懸命になってやってる運動が、全国でもそういくつもないりっぱな運動になっているということについては、この地域の人たちが協力していて、それが名古屋市とか県とか全国の模範になっているわけですね。

この運動というのは、お金があれへん（ない）もんだで（だから）ね。全然無報酬だわね。だからかえってきれいだから続くんだわね。ちょっともうけようという人は、こんなことはやれんわ。

最初の頃はこの運動をやっとる息子を見とって、はっきり言ってたわけ（ばか）だと思ったわ。子もありゃせんで（なくて）、そのくらいのことをやってなんか残すのもええわと、わしは思っとったがね。なんぞか（何か）人間は人のためになること、人のよろこばっせる（喜ばれる）ことやればええわ、人に攻撃されたりせな（しなければ）ええわということなんだわ。うみゃあ（うまい）こと言ってちょろまかいて（だまして）もうけたり、そんなことは絶対いかん（だめ）。喜んで払ってもらえる金が一番ええと思ってるでよ。強欲出いて人を泣かしてまでねじあげるなんていうことはいかんね。

●それとは逆に、全然お金はもらわずに、自分はアパートに住んでいろいろ苦労しながら運動をやってる息子さんを見られて、お父さんは最初のうちどういうふうに思われましたか。

てめえの思ったことはやる

わしもはだか一貫からやった人間だから、がきもそのくりゃあ（そのくらい）のことやるだろうと、目をつぶって見とったわけ。

はっきり言って、おれとおんなじ（同じ）ことはようやらんなと思ったわ。おれは、自分のため子どものためと思ってやってきたわ。これ（息子）は子がないもんだでやれるわな。おれは、これがやっているようなことをやっていたらあがってまうわ（生活していけない）そいだけん（それだけ）の違いだわ。

●この後こういう運動というのは、全国的にも広がってきて、「矢田・庄内川」の十三年の歩みというのはいったい何だろうということで、もっとくわしいのをほしいという声が、学者とか地域の運動の方からありますが、そういうすごくスケールが大きくなったところで息子さんをどう見ておられますか。

これもよ、一本筋だで、てめぇ（自分）の思ったことはやるだろうと思う。

●ぼくらも、宮田会長の言っていることにはついていけるし、名古屋市内だけでなしにいろんな所からいろんな注目をあびていますので誇りに思っています。

釣りクラブ 山彦会

■釣りクラブ山彦会は「矢田・庄内川をきれいにする会」の会員の中で、釣の好きな人によって結成された釣り同好会です。「会」がおこなう諸行業に協力されて裏方としてがんばってみえました。

山彦会前会長の鈴木敏さんと前会計の能勢美良さんに苦労話を語っていただきました。

司会　「矢田・庄内川をきれいにする会」を結成して十三年をふりかえってなつかしいことや「会」の裏方を続けてきての思い出のお話しを聞かせていただきたいと思います。能勢さんも同じ古い仲間ですからぜひ聞かせてください。

鈴木　大勢の人があっちこっちへ行ってたんだけども、交通事故がなかったっちゅうことが一番よかったな。

司会　一回が三〇人としても年間にのべで三六〇人。それが十何年と続いてきてのべで五〇〇〇人ぐらいの人たちが車に乗って何百キロも何千キロも動きまわったんですね。

能勢　しかも毎月きちんと開いてきたということです。一回もやめたことがなく、一月から十二月まで一ヶ月も欠けたことがなく、雨が降っても雪が降っても山奥へ行く時にはチェーンをまいてでもみんな喜んで釣りに行くんだね。収穫もあれば賞品もあるのでみんなは喜んで次の釣りを楽しみにするんだね。しかもこの「会」は年間をトータルにして年間の賞品を出すということもあるしね。それをみんなは目的にしてわきあいあいと、けどやはり欲も出してやってきたんだわね。

司会　それでも鈴木さんや能勢さんは役員として自分の釣りも大切でしょうが、みんなの安全だとかどうやろうかという工夫をいろいろと考えられて自分の釣りにならなかったことも多いと思います。

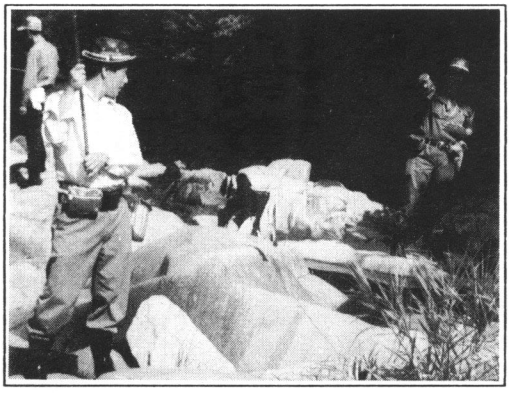
わきあいあい

能勢　一番の思い出は、三重県の串田(くしだ)なんかに何台か車を連ねて行った時ですね。道を知らない者が多いんだけれども地図を見な

がらでも現場に行かなければならない時もあるんだわね。そんな時に先着者が現場に着いてもみんなが着くまで竿も出さずに待っていてくれたりしてね。そういう釣り人気質というものをもちあわせた人が多いわけだわ。

今は矢田・庄内川をきれいにする会の名誉会長になられている丹羽さんもマナーがものすごくいいんだわね。感心するぐらいいいわけ。「山彦会」の会員になると名誉職をぬきにして、わしらといっしょに同じポイントで苦労して釣ってたまに賞品をもらうんだわね。大人の社会なので普通だったらエゴが重なるのに、それがなくて、こういう和気あいあいということが十三年続いてきたもとだったんだね。

能勢　そういう釣りなんかに準じて「庄内川まつり」というのにも仕事の都合を付けて人員送り込みの手配をしてきたんだわね。



鈴木　今では会場設営準備などは当日にやるんですが、前は土曜日に用意してそして日曜日の朝を迎えたんですよ。そういうことをやってみえたのが鈴木さんだとか能勢さんだとか、特にこの瀬古地域にみえた方がほとんど骨折ってみえるわけなんです。当然あとかたづけも。そういうことでほんとに裏方として表に出ることなくね。「きれいにする会」の釣り会では表彰状をわたすことはあってももらうことはないわけです。

ゴミ袋

能勢　「会」は今日で終わるなんていうことはないのでこの先もまたやっていくわけだわね。ぼくらも十年前と比べて年もとってしまって力仕事なんかもできないことはあるんだけども、「きれいにする会」をやっている以上は道具を片付けたりもするんだわね。

「山彦会」は「きれいにする会」の中にある部なのでそこのところがよそのクラブと違うところなんだね。

鈴木　「山彦会」という一つの釣りクラブなんですが、釣りクラブの中に「きれいにする会」の精神が流れつつの釣りクラブということでよそとちょっと趣を異にするわけなんですね。

能勢　ゴミ袋を持って行って人が散らかしたものを袋に入れて川のゴミを収拾する所へ持って行くというのがこの会の趣旨なんだね。だから「山彦会」も現場へ行って楽しんだあとかたづけて、釣った魚もやたらに殺すわけじゃなくて食べたい人がみんな持って、いらない魚は放流して帰ってくるということをやっているんだわね。

司会　一番初めに「釣り大会」をやった時に、『食べられない釣り大会』ということでやったんですね。

鈴木　臭かったし庄内川そのものが魚の種類も少なかったね。食べれる以前に臭いので川ふちに立っていても臭いんだからね。奇形の魚もいたしでね。

能勢　庄内川でも今は底の石が見えるんだけれども当時は見えなかったでしょ。しかもつるつるでね。今は見えるくらいにきれいに澄んでいるんだわね。

「山彦会」の会費から少しずつお金を貯めて、額は少ないけれども上流の土岐に「あまご」の稚魚を買って土岐市の漁業

組合と協力して放流したね。それ以来土岐漁業組合とも兄弟分みたいになったね。

鈴木　そういうふうに世間は広がったね。だいぶ前になりますが、「しらはえ」（オイカワ）を庄内川で釣って矢田川に持っていったことがあったね。何百匹もだったね。だけど一匹もおらんようになったね。結局庄内川の方がまだよかったということですね。

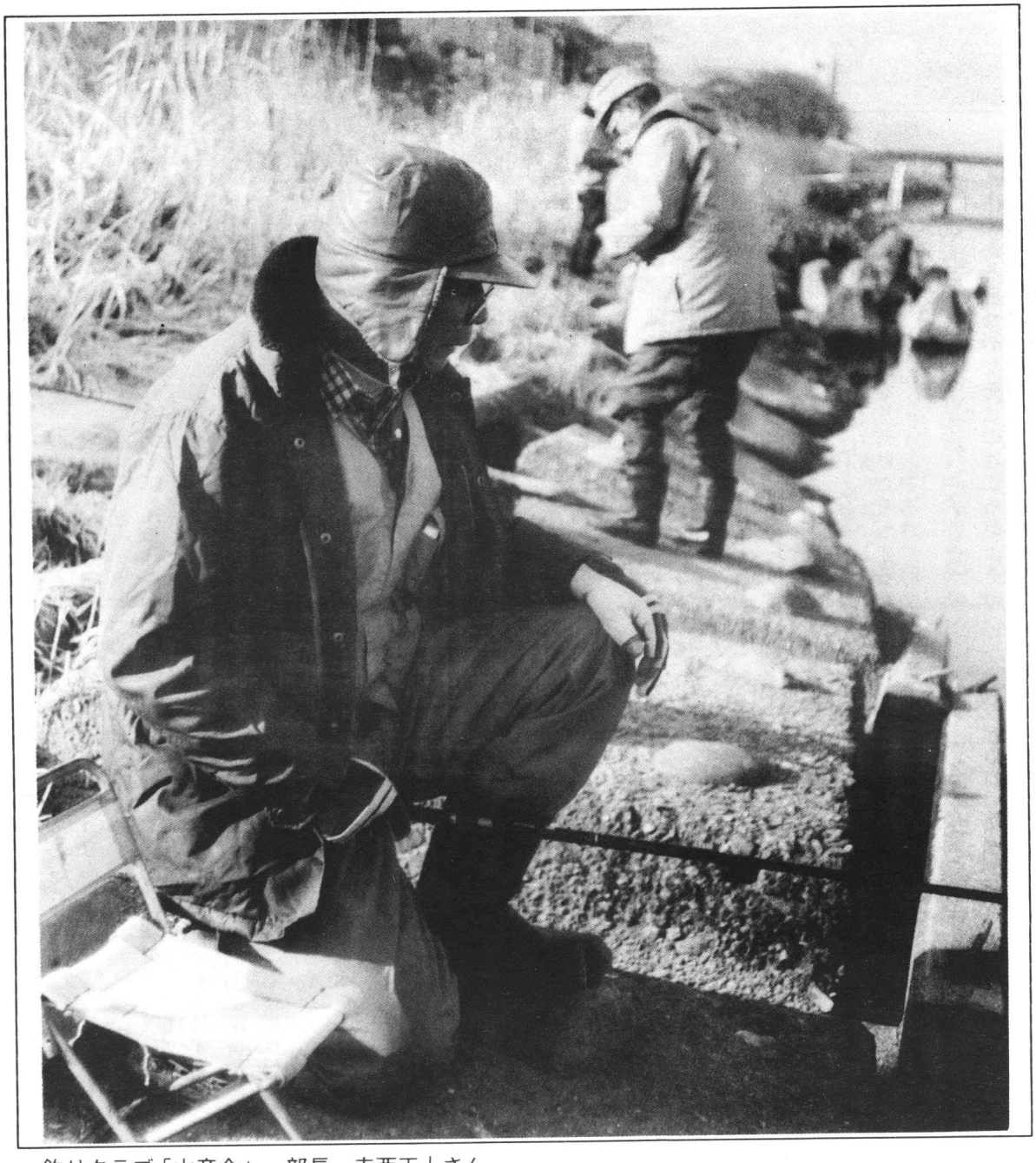
司会　そういう努力をしながら川をきれいにするという運動の前線でがんばったという「山彦会」の誇りある活動がたくさんあるわけですね。

鈴木　何も求めないから楽なんですよね。

能勢　みんなが釣りが好きなんだわね。だけど最近、若い人が少なくなったね。きらいなのかな。入ってくる新人が少なくなったんだね。

司会　それと先ほど会長がおっしゃられた事故がなかったということなんですね。これが部の運営の精神のような気がしますね。

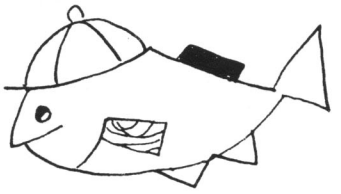
鈴木　みんなが同じ気持ちになってやってくれるもんでいいわけだね。朝から夕方までやってくれる。それが「会」の一番いいところなんだわね。



釣りクラブ「山彦会」　部長　寺西正人さん

司会　鈴木さんにはこの後もそういうような会を続けていただいて、矢田・庄内川をきれいにするためにがんばってご支援いただきたいと思います。

短い時間でしたが、きょうはどうもありがとうございました。

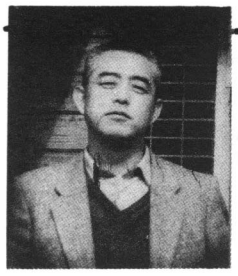


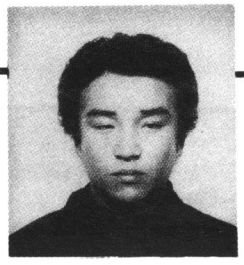
「矢田・庄内川をきれいにする会」の主旨に賛同しつくられた「会」(部)を長く続けていきたいと思います。

矢田川・庄内川の状況を他の河川と比較するために、今後も調査活動とあわせ、楽しい釣会にしていきたいと思います。

釣りクラブ「山彦会」
部長　寺西　正人

座談会





埜嵜　秀也
丹羽　年彌
水野　達彦
山崎　勝一

司会　ごくろうさまです。『矢田・庄内川をきれいにしよう』というテーマで、今日は二、三時間の懇談会に入りたいと思います。では、会長から一言お願いします。

宮田　十三年前の四十九年十二月二十七日に会が発足したんですが、その当時の会の考え方としては、庄内川と矢田川が非常に汚れていて何とかしようということで、この川西の有志が集まって「会」を起こして今までやってきたんです。その時に「会」はつくっても何をどうしていいかわからない人たちが考えて進めたこととして、とにかく闘争はしないで話し合いをしていくということで始まったんです。

そういう意味では実績のあがった点もあるし、いろんな反省もあったと思うんですが、この会に途中から入られたりしてきたみなさんの意見とかも聞かせていただきながら、今後どういうように「会」を進めるのが一番ベストか、というようなことをみなさんと話し合っていきたいというふうに思っています。

埜嵜　会長は、なんで（なぜ）川の汚れで胸が痛くなったのですか。

昔のきれいな川をぼくは知らない

宮田　やっぱりここは生まれて育った所だから、川で、泳ぎやら魚を取ることやら、何もかもこの庄内川や矢田川で覚えたことで、ガキ大将でこの中を走りまくっとったからね。そういう意味で胸が痛くなるということですね。

埜嵜　私は幼い頃庄内川のずっと下に住んでいて、戦後ぐらいまでは水を引く水道がなかったそうです。その地域はお茶のものすごく盛んなとこだったの。その頃は、庄内川の水がおいしく、井戸水ではお茶が飲めない。庄内川の水を汲んでたてたお茶がうまいということでした。

水野　実際、何年頃前までそんなにきれいだったの？

僕が小さい頃はすでに濁っていたからね。

宮田　庄内川の水分橋付近は特にだけれども、景観がものすごく変わったんだわね。それはなぜかと言うと、今はちょっとした中洲みたいなものがあるけれど、あれがもっと大きな中洲だって、トロッコが通ってて、そのトロッコの橋を渡って行かなければ中洲に行けなかった。それ以外で中洲に行こうと思うと、泳いで行くかしないといけないくらいの深みがあったんだわね。それともうひとつは、浅瀬なんかの場合、夏になると鮎が上がっていくのが見えたからね。だから今のきれいさとはまた違うんだね。

ただ、このあたりは庄内川の中流域にあたるので、あの当時の「きれいだ」というのは木曾川で言えば今で言う笠松や犬山だとかぐらいの所の感覚で「きれいだった」ということで、上流域のようにものすごくきれいだったということではないんたけどね。

埜嵜　結局、今とは透明度が違うということだね。ぼくらの子どもの頃だって、上から見えるわけじゃなくて、ある程度もぐっていかなきゃ取れないわけだからね。

宮田　もちろん、ぼくらよりもっと前の人の頃はもっときれいだったと思うよ。で、ぼくらの頃までが、ある程度川に入ってなんとか遊びができた。そして、できた当時とできない頃を知っている世代ということだね。

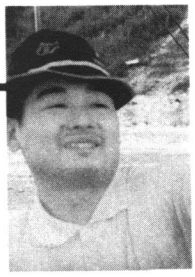
村山　わしは三十年代の後半に来たもんで、きれいな川を知らんだわね。とにかく白い川であり、臭い匂いがする川で、子どもを連れて川に行ってみたんだが、臭くって、すみっこの方に白い腹出して浮いとる魚を見て、こんな川にも住む魚がおったのかと思って、ひどいことになっとるなあという思いが心の中にいつもあったんだわね。ここに住んでいるもんでね。

その頃、たまたま下水処理場なんかができて宮田さんとの出会いがあって、こういう運動に参加するようになったんだけれども、ここに住んでおってこの臭い川があったということがまずここに参加できたきっかけだと思う。

どうして今日までこんなに続いてきたかと言うと、だれでも参加できるように『川の汚

《座談会に出席された方》　宮田　照由（会長）
村山　孝夫
宮田　明美
司会
三宅隆夫（会事務局長）

高橋　正昭（副会長）



川上　郁郎（副会長）

れは心の汚れ』というテーマがピッタリしていたことで本当に住民運動だったからだと思うね。これがもし政党とか思想にかたよっていたり、選挙のための運動であったり、一部の売名的な運動だったらついていけなかったと思うね。それで、まにあわないながらも少しでも何かをやろうという気持ちで今日まできました。

（年）

丹羽　「きれいにする会」のある川西地区と庄内川をはさんだ味鋺に住んでいます。出身は滋賀県の琵琶湖の近くです。川といえば川底が見えるというイメージがあるんですよね。こちらに移ってきたのが昭和二十八年ですが、少しの間、西区の庄内川の近くにも住んでいました。高度成長の課程で庄内川はひどく汚れていました。そのころは水野川の合流点では、土岐川の水の青と瀬戸の白とがはっきりと目で確認できました。ぼくの高校がたまたま瀬戸だったんです。そのころは瀬戸川の汚れが瀬戸の繁栄だと瀬戸の人たちは思っていました。

たまたま新聞で「会」のことを知り、微力ですが参加しました。小さな力も多くの人たちによって大河になる。そんな想いで活動を続けています。ぼくが入って十年。瀬戸川も少しずつきれいになり、住民の人たちの意識も違ってきたと肌で感じられます。上流・中流・下流、そして海、地元だけでなく地域の連携が必要だと思います。でも、あまり広げすぎると、また、まとまらなくなるし、結局はひとつひとつの川をきれいにすることが伊勢湾をきれいにすることになると思います。そういう点で行政も「川はひとつ」の考えをもって積極的にすすめていただきたい。わたしも何かの役に立てばと思います。とにかく庄内川に根をおろした運動をずっと続けていく必要があると思います。

山崎　昔のきれいな川をぼくは知らないんですけれども、ぼくが生まれて川遊びをするようになった時には今の汚ない川であったんです。そこで魚釣りもやったし、泳ぎもやったんですが、確かに鼻に残るような匂いがあって、魚捕りをやった時でもお風呂に入らないと取れないような匂いが付きました。魚の網に腐ったような物が付いたりします。ほんとに魚がかわいそうな水の色をしているんです。

「きれいにする会」に入って、ずっと活動してきたんですけれども、中流はきれいになってきました。だけど、こないだもボート下りをやって庄内橋の下流の方をずっと見てきたんですが、まだまだ汚ないんです。汚水のタレ流しで魚の死骸もあった。魚が浮いた事件が二、三回ありました。

王子製紙だけでなく他の企業、住民の排水、その他もろもろで川が汚れていると思う。一番簡単に言うと、みなさんが協力しあって川をきれいにするという目的があって、ひとりでも欠けるとできないと思います。

竺寄　矢田・庄内川と言うけれども、名古屋市民にとっては関係ないんです。水は木曾川なんです。だから矢田川か庄内川で水をせき止めてそれをみなさん飲んでくださいとして、これを浄水場に引きますよ、としたらこれは考えますよ。

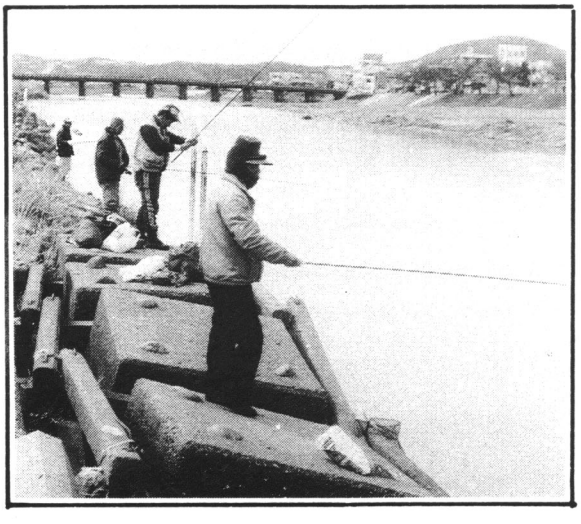
だけど関係ないんですよ。合成洗剤も王子製紙も関係ないんです。あの近所に住んでいる人たちだけが臭いだけなんです。ぼくは泳ぎに行かないで、行く時は木曾川なんです。飲むのも木曾川なんです。木曾川がきれいならガマンできるんです。

というような認識を名古屋市民の全部がもっているんです。だから庄内川の水分橋で水を止めて通し抗を作って名古屋まで引いていって「北区の方は今日からみんな庄内川の水ですよ」って言ったら、みんな飲まないですよ、たぶん。それだけの気持ちの薄さがどうしてもあると思うんだね。そこまで引いてきた水なのかそこでくんできた水なのか関係なく飲んでいるんですよ。だから矢田川や庄内川の水を飲めばいいんですよ。だけど飲めないんですよね、実際には。そうするとみんな認識を変えると思うんですよ。

現実には無理な話だし、やる必要もないことだけどね。

三宅さん、子ども連れて王子製紙の下で泳ぐ？

三宅　泳ぐには泳ぎますよ。王子製紙の上でね。（みんな大笑い）



埜寄　ぼくはそこにあると思うんだわね。だから今上流で瀬戸の川がきれいになったね。だけどこれは不幸なことで、瀬戸も土岐も景気が悪いからなんです。こないだ丹羽さんと宮田さんとで行った時ほたるがわいていて、あれはうれしかったね。ただ、それを知った人たちが捕っちゃって一匹もいなくなっちゃったけどね。

水分橋付近には、

宮田　以前に二〇匹くらい確認されたという時があったんです。それはないしょにしていたんです。それから一度護岸工事がやられてちょっと音さたがなかったんだね。そしたら去年大量発生をして、それが新聞に載ったために一夜にしていなくなった。知った人たちがみんな捕っちゃったんだね。ところが、今のそのほたるは「ひめぼたる」といって水がきれいだということには関係のないほたるだったから、ぼくらの方もあまり重要視はしていないけれども、ただ堤防の環境が自然に適しているという面で言えば喜ばしいことだね。

「川の汚れは心の汚れ」のあのセンス

水野　ぼくはこの会はまだ六年生です。丹羽さんに紹介されて入ったんです。昔から川の近くで生活しているということじゃないですが、川をきれいにしようという趣旨だもんで、白濁した矢田川が清流とまではいかないまでもきれいな水になれば遊びに行けるし魚も釣りに行けるから、その趣旨に賛同して入ったわけなんだね。

年に何回か会合に出てくるだけなんですが、会そのものが新幹線の問題のように訴訟したりするということがないというところがいいですね。

もうひとつ、これは個人的な意見なんですが『川の汚れは心の汚れ』というあのセンスがすごいと思ったね。というのは、何か標語というと「ごみを捨てるな」とか「排水をたれ流すな」とかいう何か押しつけがましいところがあるんですね。『川の汚れは心の汚れ』というのは、それ以上のことは何も言っていないんだね。問題意識をもってもらうということでこれはなかなかのものだと思いました。

これは本で読んだんですが、交通事故が多くなってきて愛知県警にしても事故撲滅というと最初に標語とかタレ幕とかに金を使うわけですね。その標語が「飲んだらのるな、のるなら飲むな」とか「そのスピードが死をまねく」とかいう直接的なやつなんだね。その標語の中に「人・車、整然と行く美しさ」という標語があったそうです。その標語は何も言っていないわけで、あとは人に勝手に想像させているということに感心したんだね。それがたまたまここで『川の汚れは心の汚れ』に出会ってなかなかと思いましたね。

参加してきたきっかけはその辺にあります。それと、名誉会長が昔から言うように自分の商売が一番で、そっちが忙しい時に「会」の方に没頭しとってはいかんというようなことも長続きする原因だと思いますね。

高橋　ぼくは生まれが岐阜で川の上流だったもんですから、すごくきれいな川でした。四十年頃に北区の安井という所に出てきて、近くの川を見たら極端に汚かったですから「何だこれは」と思いました。守山の松川橋のところに移って子どもを連れてよく魚を捕ったり泳がしたりしたんです。でもやっぱりこれじゃあいかんということでいたんですが、たまたま丹羽さんと知り合って入りました。商売の方が忙しいもんでたまにしか来れないんですが、『川の汚れは心の汚れ』という感じが好きで、私も少しでも良くしようと思っています。みんながわきあいあいとやっているので少しでも出る機会をもつようにしているんですが、これからもみなさんと一緒にお互いにゆうずうしあってやっていけると思うんです。

川上　ぼくが「矢田・庄内川」に関係するようになったのは丹羽さんとの関係で、ぼくは丹羽さんの息子さんと友だちだったんです。あっちゃんというんですが、がんで亡くなったもんですから、御参りに来たりなんかしている関係で入ったんです。守山へ引っ越して来まして、急に親しい身近な間柄になりまし

た。

生まれは宮崎なんですが、海も山も非常にきれいな環境にいたもんですから、川でもえびが釣れるんですね。えびは鮎が住むよりももっときれいじゃないと住まないんですよね。そういうわけで小さい頃から魚釣りやきのこ取りをやったり、海なんかはしょっちゅう行ったりで夏休みになると毎日泳いでいるというような自然の中で生活をしてきていますので、田舎に対するノスタルジーみたいなものがありました。たまたますぐそばが庄内川だもんですから、丹羽さんから運動の話なんかを聞いたりして、川というのはやっぱり田舎で見てきたような川がほんとでもっときれいであるべきじゃないかと思って運動の仲間に入ることになったわけです。

仕事が忙しいということを盾にみなさんに甘えっぱなしで、あまり良い会員じゃないもんですからもうしわけないですが、できる範囲でできることを手伝おうという考えでやってます。自分の考え方をもって、いろんなはたらきかけができるような会員になっていきたいなと思ってますが、現状ではやはり生活が中心になっていますので、もっと身近なところで、洗剤の問題とか浄化槽の問題とかをどんどんやっていきたいと思います。

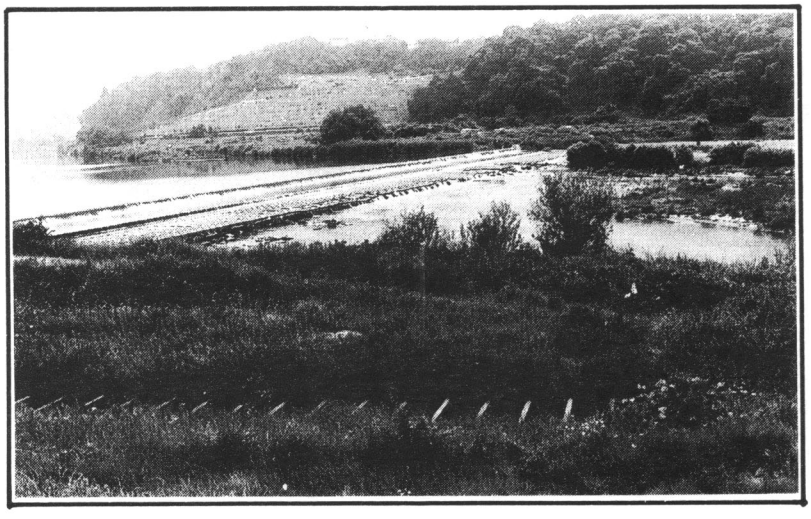
「きれいな川にしてね」

守山にはまだたくさん浄化槽があるんですよね。岐阜のかなり田舎の方に行ったんですが、浄化槽でみんなやってるんですよ。大きな池があって浄化槽のたれ流しそこにはいっているんだと言って鯉の大きなやつが釣れるんですが、だれも食わないんです。守山でもありますけど池に大きな鯉がいてもだれも食わないんです。自分たちの汚物が入っているもんですからね。以前はくんで畑にまいたりしたと思うんですが、農業が減ってタレ流しの人が増えて、廃棄に困って途中でバクテリアによる浄化槽ができたと思うんです。どうしたらいいかをみんなと一緒に共に考えて、もっと水が浄化するようにしなくてはいけないと思います。

仕事の現場で浄化槽でこした水がある所で鯉が捕れたりするんですが、そこへ入ると足の毛穴のところにぱーっとよごれがつくんです。いくらすきとおった水でもちょっと臭いにおいもするんです。

宮田明美　私は矢作川の源流のある長野県で生まれたもんだから、川はすごくきれいだったの。十五の時に名古屋に出てきて初めて矢田川を見た時には、都会の川はそれでしかたがない、きれいな川なんてありえないと思っていたの。それから主人(会長)と一緒になってから、主人がこの「きれいにする会」を始めると言った時には、もともと汚いんだからきれいになるわけがないと思ったの。だけど「やる」って言うからふんって思ったんだけどねえ。

さっきも話に出たんだけど、景気の悪い時だと川がきれいだなんてことがあるけれど、主人の友だちに言ったら、川をきれいにしようと思うと企業がつぶれるって言われたの。そうなのかなとひとつ疑問にも思っていたこともあるけれど、何もつぶれなくたって、企業がきれいな水を使ったんだからきれいな水にして返せば汚れるはずもないんだけれど、してないから汚れてしまったんだろうけれどね。



もうひとつこの運動をやめられないなと思ったのは、子どもたちからの手紙がいろいろ来て、その中に「きれいな川にしてね」っていうことがいっぱい書いてあったの。その子たちは「きれいにする会」の準会員なんだけれども、その子どもたちの願いを見た時に中途半端ではやめられないなと思いながら今日まできたの。私のできることといえば、主人が精一杯運動できるように、仕事の面でもできるだけ協力してあげたり、家のことはできるだけ自分でやったり、そういうことは一生懸命しないと運動しようとしている主人の足を引っぱってしまうもんだからできるだけ

やるんだけど、でも、ちょっと体が弱いもんだから時々入院したりして足を引っぱったりしててまうこともあるのね。私の父に言わせると、名古屋は水が悪いから病気になったんだと言うの。だから、ほんとうにきれいな水になると私の病気もきれいになってしまうのかもしれないんだけれど、飲んでる水は庄内川の水とか矢田川の水じゃないからそれとは関係のない話なんだけどね。

梶寄　そうだよね。企業も自分のできることだけをやってくれればいいんだよね。要するに、現代の科学技術からすればできないことって少ないんだよね。ただ、もちろんコストもあるんだけど。ちょっと意識を変えるとできるんだけどね。

水野　たとえば、川をきれいにするということとひとつを考える場合に、実際にきれいにしようという時に、下水処理場を作ったりという行政によるものというハードな面と、一方で実際われわれ市民も汚している意識をもちたいね。もうひとつ、企業もわれわれみたいな意識をちょこっとでももっていれば、たとえば排水処理施設に一億かけていたところに一億五千万かけるようになるとか、そういうようなことでも少しずつ改善されると思うからそういう意識はもってもらいたいと思うね。

そして、何をするか、知恵をしぼりながら

梶寄　結局、木曽川の水を飲むでしょ、だけど、たとえばある大企業でも自分とこの外に流しているわけなのであんまり苦にならんのだよね。自分の庭に流されると腹が立つんだろうけど。

三宅　ただ、私の家庭でもそうですけれど、きれいにすることは奥さんとか子どもにやらせて自分は掃除するわけじゃない。川もそうですね。きれいな川は好きなんだけれども、きれいな川にするために自分がどうするかということが弱い。だから、きれいにするために自分ではどういうことができるのかということを考えなければいけないんですね。

丹羽名誉会長が、

「『矢田・庄内川をきれいにする会』というのは、全国的にもまれだ。住民自身が豊富な知恵をしぼりながらむつかしい問題をやっている。ほとんどのきれいにする会は、企業のひ護を受けたり行政の指導を受けたり労働組合のひ護を受けたりしているんですけれど、全国を見てもこういう会は『矢田・庄内川』ひとつじゃないか」

と言ってみえました。学者とか文化人とそういう話をするんですが、「矢田・庄内川」というのは本当にすばらしい会だと、こういうのはいろんな意味で協力しなければいけないといろいろな諸先生方からお聞きしました。

次は「会」の現在と将来のことについてお話しください。

村山　この席では一番年長者です。いま一番感心していることは、いま言われたようにほんとにこの運動というのは全国でもめずらしいと思うんだよね。何の主義のために要求しているんじゃなくて『次代の青少年にきれいな水とあたたかい社会をつくろう』という、ことで、ほんとに立派な人じゃないとできないと思うんですよね。そういうことで若い人が芽生えて、こういう話し合いをもってこういう運動を続けていくということは非常にすばらしいことだと思います。その意味で、ぜひ今後いつまでも続けていただくことをお願いしたいね。

わしらが参加した頃は、何と言っても王子製紙が加害者ということははっきりしていたんだけど、現在はわれわれ自身も加害者のひとりだということで、加害者であり被害者であるという常識がうまれてきているので、そういう考えで運動をしていかないといけない。

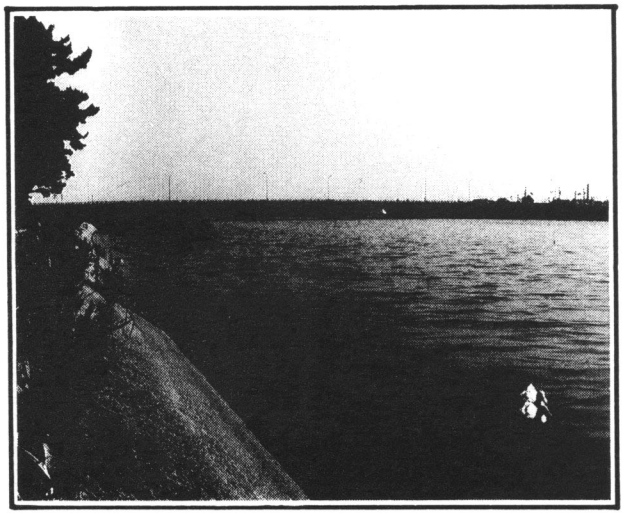
ここに住んでいて、川だけをきれいにすればいいかなと思っていたんだけど、名古屋港へ行ってみてびっくりしたんだけど、子どもが川の色を赤く描いたとか黒く描いたとかのように、ぜんぜん青い色がないんだわね。まあ醤油色というか、あれを見てびっくりして、やっぱり「名古屋港を考える会」とも一緒に活動するようになったけれど川の水のことだけでは小さいなと痛感したんだけどね。この近くに住んでいる人以外も、ひとつひとつの川をきれいにすることがわかっていくことが大事だと思うね。この意味で若い人の芽生えも大切に活動をすすめたいと思うんだね。

自分さえよければ

川上　ぼくは海に魚を釣りに行くんですが、大きなのが釣れたと引き上げると、プラスチック、ビニール、農協の農薬や肥料の入ったビニール袋や何かがものすごく多いのね。もぐるともうプラスチックだらけで、将来どうなるんだろうね。ああいう物は腐らないので、海の底はもうそればっかり。ゴルフの打

ちっぱなしのボールなんかを船員が漁船やタンカーや商船の甲板から海に向かってポンポコポンポコ打ってるんですよね。一般常識みたいになって、ロストボールというのを何万個と買って持って行くんですから、一般で一日に軽く一〇〇〇個ぐらい打ってるんですよ。キズが付いたりしたロストボールはごみ箱にいかないでみんな海にいくんです。

水野　ぼくはそういうことを体験していないんだけれども、ほんとうに太平洋の真中に行ってずっと海だらけだと、多少汚してもどうってことはないというような気分にはなるんだろうね。あれだけのとてつもない水量があれば自分ひとりが少しぐらい汚してもまったく無に近いような意識があるんじゃないかな。だから自分がゴルフボールを打ったぐらいでどうなるという、その時点では考えていないんだろうね。



埜嵜　われわれの運動というのは、どこに何をせよ、ああしてくださいということじゃないんだから、自分たちでこうした方がいいんじゃないかなということが目的なんだから、たばこの吸殻ひとつでも窓から捨てるということが捨てにくいというふうになっていくという運動だろうと思います。

だから車ひとつの割りこみにしても、まあやめとこうということがひとつずつ輪が広がればひとつのモラルの向上につながるし、ぼくらがやっているのは、やっぱしモラルの向上だけしかないわけです。たとえば企業に対して何を求めていくのかとか、どういう数字で追求していくのかというものじゃないわけです。

川上　時間から時間へとせかされるように社会全体がそういうふうになって生活のリズムが作られているものだから、スピード違反でよく捕まるんですよ。中に五〇キロと書いてあるのに四〇キロくらいでノタノタ走られると、もうイライラして精神状態が非常に悪いわけです。まわりもピーピーやって、あまりにも生活リズムが狂ったような形になっていて、ぼくらも非常に困るわけなんです。

埜嵜　それは川上さんのリズムであって、四〇キロで走っている方のリズムではないわけなんですよね。そこまでは求めないというのがぼくらの考え方で、「矢田・庄内川をきれいにする会」というのは企業に対しても企業のハートの中に食いこんでいくことなんですよ。

水野　たまたま自動車の話が出たんだけれども、まったく同じ気持ちです。結局は「自分さえよけりゃ」という考えがあって、これは川の問題にしろ交通の問題にしろあらゆる問題の根源はそこだね。そうすると、そこまでの意識を変えていくということは、かなりむつかしいことなんだね。そのことを教育のところへもっていくとかにしてもこれから二〇年三〇年かかる問題だけど、はたらきかけていくというか、運動を波及していきたいという気持ちはありますね。全体的な「自分さえよければ」という意識を少し変えるようなね。

埜嵜　「自分さえよければ」という意識をもつことも、川を汚したと同じように変えられたというか、変えてきたことだと思うんですよ。昔は個人においてももう少し違ったと思うんですよ。「自分さえよければ」という考え方が最優先じゃなかったと思うんですね。向こう三軒両隣がなかよくやっていたんですよね。ところが個人主義が発達しすぎて個人の要求がかなりきつくなって、権利は権利だが義務は知らんというふうにわずか四〇年間になったんですよ。四〇年間だから変えるのもたいしたことはないかもしれないが、ぼくらが墓場にいき自分の子供も墓場にきた頃によくなっているかもしれないけどね。それくらいの気持ちでやっていかないけないと思うね。

住民運動というのは、いったいなんだろう

宮田明美　今までのここの住民運動とよその住民運動を見てると、保証を求める運動の方が多いでしょう。でも、うちの会はどこからも保証を求めないんだよね。保証を求めるの

は訴訟であって、運動というのはそういうものじゃないんだよね。

三宅　ここの会のユニークなところは、カンパニア運動というか、住民の心を変えるというところなんですね。将来住民運動の本流になるのかどうかはわかりませんけれども、今では非常に少ないわけなんです。ところが一般的に言われる住民運動というのは、いまおっしゃった訴訟とか権利侵害に対して行政とか企業とかを包囲してさせないようにする運動なんですね。そこの違いがこの「会」の特徴で、企業と行政と住民がみんな出せる力をあわせて心をあわせ住みよい郷土をつくる、名古屋をつくる、守山をつくるという運動になっているということですね。そういう認識をまず押える必要があると思います。

これからのお話の中で「住民運動というのはいったい何だろう」ということを発言いただきたいと思うんですが。ひとつの定義をこの「会」から出していくこともいいんじゃないかと思います。

(年)
丹羽　さきほど浄化槽の話が出ましたが、実はうちも浄化槽を使っていて側溝から庄内川に流れていくんでしょうね。そこで、「心」ということはわかるんですが、現実的な問題をどうしたらいいかということが気になりますね。確かに「川の汚れは心の汚れ」ということはわかるんですけれども、現実的な問題となると近くに下水処理場がないところもたくさんあるわけですね。そういうこととかかわりがないと、心だけでは進んでいかないような気がするんですよね。それは保証ということではなくて、そういう設備を作らないと川もきれいにならないんですよね。

矢田川なんか橋を渡った所に小さなせきがあるんですが、風の強い日なんかはそこの汚水に含まれている洗剤の泡がたっているんです。こちら側から風が吹くと泡が水面をあがっていくんです。まだあそこはいい方で、上の大森橋の方では泡がもっとすごく出ているんです。表面的には水はきれいになっているけれども、水質を考えてみるとかならずしもそうではない。だからその人たちは合成洗剤を使わないということにはならない。使う人たちは水をどうするのかということになると、浄化する設備を作らないといくらぼくらが唱えてもきれいにはならないような気がします。

水野　それにしても設備を作ったりするというハードな面では、たとえば行政とかの問題になるんですが、計画的に十年ぐらいで作りましょうということが一般市民の意識が高まって早くやってほしいとか、そういう問題になれば十年が九年になるかもしれないということはあるかもしれない。ハードな面でのそういうことを後押しするような意識を高めていくようなことにもっていけたらいいなと思います。

(年)
丹羽　そうは思うけれども、ぼくは「川の汚れは心の汚れ」と口では言っているけれど、実際に会員がそういうことを言っても下水処理場はできないんじゃないでしょうか。

宮田明美　そういうことはもっと企業や行政にアピールしていかなければならないとこなんだわね。

水野　行政に対する圧力みたいなものが住民の意識の高揚からつながってくるんじゃないかな。

(年)
丹羽　でもやっぱり、それが流れて川を汚しているということを現実に知っている者はわかるんだけれども、そうでもない人は気にもとめないんだわね。

高橋　ああいう物は流してしまえば中が汚れるわけはないもんであんまり考えないんだわね。それが逆にしてみればものすごく考えるよ。

(年)
丹羽　だから、そういう人たちばかりがたくさん増えればなるけれども、現実からいけばだれかが考えてやらないとその人たちも考えられないだろうしね。

山崎　警察のワーストワン返上だとかの宣伝をやってますね。だけど企業を管理する者はだれもいない。交通ルールの違反で罰金を払うのに、企業は魚が浮いて初めてわかる。

埜嵜　だけど、今の川の汚染の問題なんかでも、村山さんが言われたように被害者が加害者でしょ。要するにわれわれの問題の方が大きいような気がするんですよね。

きれいごとではすまされない部分も

宮田　その問題で丹羽名誉会長が言ってたように、われわれが被害者から加害者になったということは事実なんだね。そこで加害者ということを気がついた時に、加害者でなくする方法というのを加害者であるわれわれ市民や、それから市民の中の知らない人たち、つまり知らない間に加害者になっている人たちも含めて、加害者でなくするための今後の運動というか施策というものは必要なわけ。

そういう意味からいくと、さきほどから出ている浄化槽の問題は、浄化槽をきちんと自分の所で管理すればある意味できれいにはできるもんだけれども、それもお金の問題なんかもあるもんだからできない。もうひとつは、庄内川の北と西の方には下水処理場という物が今はなく、山田地区の所で味鋺から西部地域を中心とした下水処理場を作る計画もあるし、いま用地買収に入っているわけです。ところが、現実としてそういう物が必要だと言いながら自分の所の目の前に建設という話がきた時には、作られると困るという意識が非常に出てくるわけです。

川西地区の人たちは、こういった問題に対しては非常に先進的というか、そういう気持ちを発揮してこの川西の中に守山下水処理場を作って、自分たちの問題だけじゃなくて地域全体をきれいにするために一緒にきれいにしていく考え方の中にたってこの守山下水処理場を作ったわけです、それは決して犠牲になるということじゃなかったんです。

だけれども、作ったいきさつには、住民にきれいにしなくてはいけないという気持ちがあって、名古屋市にもそれにある程度むくいなければならないという気持ちがあって、当初予算をはるかに越えたかたちでの大きな規模で作ったわけだね。予算をたくさん使ったからいい、悪いということじゃなくて、住民と行政とがそういう問題に対してひとつのテーブルの中で考えて作った見本になったわけです。

そういう意味では、今の山田の西地区の下水処理場の問題が少しいきづまっているという問題があります。だから、きれいごとで済まされる部分と、きれいごとで済まない部分があるから、そのへんの問題がわれわれの運動を今後展開していく中で今後たくさん出ると思うね。その問題というのは、意識の問題も出てくるだろうし、お金の問題も出てくるだろうし、半面、政治ということにある程度かかわると思うんだね。意識的には非常にわかっていただけたし「きれいにする会」の進め方もある程度は非常に理解していただいたということですが、今後の問題としては、行政と住民と企業の三身一体をもうひとつ庄内川全体をきれいにしていくための問題という意識の中で政治をきりはなせない部分が非常にあると思うんだね。ぼく自身も名古屋市といろいろ話をしたりとかで予算折衝の問題とかが出ると、これは政治ぬきではできないんだわね。そのへんの問題をみなさんがどう考えているのかという論議がしたいし、今後の「きれいにする会」のひとつの大きな方向付けにでもなるのでお話ししていただきたいと思います。

意識はパワーだ

三宅　丹羽名誉会長の話だと「川を汚くしている企業となかよく手をつないで住民運動を進められるか」と。「川を汚くしているような団体と手をつないで川をきれいにすることができるか」と。われわれの目的は、もちろん住民自身の意識を変えて川をきれいにするという目的なんですよね。そういうところからくる運動のいろいろな形態があるわけなんですが、それを一体どうするんだということがいま宮田会長がおっしゃったことだと思うんです。いいものも悪いものも、味噌もくそも一緒くたにしてさあ仲よく手をつなぎましょうというような運動ではなかったわけです。

もともと行政も、昭和四十八年の本山革新市政の中で住民参加をうたって、住民も行政も企業も一緒になって町をきれいにしよう、川をきれいにしようということからひとつの運動が始まったわけです。そこらへんの原則をこのあとどのように生かして発展させていくのかというのが、いま問題として出された内容じゃないでしょうか。

村山　それは今までどうりでいいと思うんだわね。やっぱりわれわれの運動は行政を動かし企業を動かしてきたことは事実だと思うんですよね。それによって成果がぜんぜん出なかったということは言えんと思う。成果は出ているからね。これは今後とも絶対に切りはなせないことで、この運動によって行政も重

い腰を上げなければならないことも出てくるし、企業でも出てくるしね。ここでぜんぜん成果がなかったら運動が続いていかないんだわね。

水野　抽象的になりますが、川のことだけでもきれいにしようという意識をわれわれ一般市民のみんながもってくると、そういう意識のかたまりがパワーとなって行政を動かすという図式が一番望ましいとは思うわけです。そういう図式が一番望ましいという前提で話をすれば、その意識を高めるためにこの「会」があり、そのためにいろんなイベントをしたりするというふうに私はとらえています。処理場を作るなど実際にもっとハードな面で政治的にむつかしいことが出てきますが、われわれがここに処理場を作れと要求するんじゃなくて、もうちょっと意識を高めパワーをもって圧力をかけるというようなスタイルでのもっていき方がいいんじゃないかと思います。

埜寄　市民が今二一〇万人いますが、ひとり一日二〇〇リットルの水を水道から使っています。これが入ってくるときは清水なのが出ていく時は全部汚水になっているわけだからね。だから少しずつ考え方を変えていけば四〇万リットルの汚水ではなくなるかもわからんね。

たとえば洗剤ひとつとってみても、合成でなく動物性の物を使えばバクテリアが食べてくれるからね。だから四〇万が全部処理しなければならない四〇万なのか、それとも処理しなくてもいい水なのかということもあると思います。

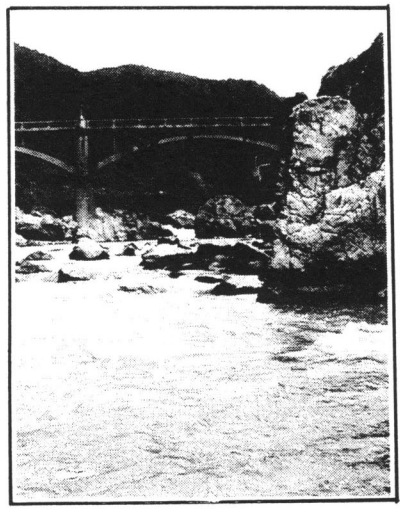
(年)

丹羽　今日でもこちらは雨がよく降っているけれども、水源のダムの方は全然降らなくて渇水状態だということですが、きれいな水を使うという意識は大きくあるんだけれども、使った水について現実でなくても将来のことを考えてみると、水があるとかないとかいう問題じゃなくて、人間が生きるか死ぬかという話につながってくると思うんですよね。だから、ぼくたちの運動は確かに矢田・庄内川をきれいにしようという話なんですが、ずっと考えてみると生きるために、これからの豊かな社会をつくることに結びついているんと思うんです。今では川をきれいにしようという運動になっていたんですが、本来的にはそういうことも考えていかないといけないと思います。やっていることはそうなんだけど、もう少しそのへんのことを表面に出すというのはどうでしょうか。

魚は川の監視員

埜寄　会長にたずねますが、水の汚染度を調べる方法が二つ三つありますね、CODとBODと浮遊物ですが、「会」を始めた頃と現在とではどのくらいどうなってきたのですか。

宮田　数字から見れば役所が調べた数字でいくつからいくつになりましたということになると思うんだけれども、それはそれなりに大切だけど、ただ「一〇PPMが五PPMになって五PPMだけきれいになりました」と言っても一般的には目に見えないので、「きれいにする会」としては数字のことも含めて、コップに入れた時の透明度や生きている水棲生物をひとつの目安としてやってきたわけだね。



生物的に言うと、われわれがやりかけた時は「ふな」「こい」が主流だったわけだね。そういうことでは、今では「あゆ」が棲める。だけど、われわれが根拠地としているこの水分橋を中心とした地域には、まだ「あゆ」は固定してはいない。ただし、下流部と、上流部の松川橋には「あゆ」が棲んでいます。天然も遡上（そじょう）はする。川は全体では一本だから水分橋付近でも「あゆ」は固定して棲める環境にまではしたいというふうに思っています。もうひとつは、石の裏をひっくり返して見る水棲生物ですが、昔は「ヒル」だとか「糸ミミズ」が主流だったのが、今は若干きれいな所にいるような「トビケラ」類だとかが若干いるようになったという点では、年々少しずつきれいな所にいる個体が増えてきている。こういう目で見える状況があります。ただ数値的に見れば最近は横ばい状態です。

埜寄　庄内橋まで潮の満ち引きがあるような地盤が沈下してしまった所で、川の流れというのはないわけだから、なかなか水棲生物をみつけるというのはむつかしい問題でもあるかもしれないけどね。

宮田　だけど、生物指標としては全国的に調べて、「きれいにする会」も庄内川の三か所を受けもって、もう五年目になりますが、水質の簡易調査の一端を担っていますし、名古屋市としてもモニター制度ということで各河川や池なんかも数十か所で設けてやっています。そういうことは一般の人たちに受けとめられる要素としては、虫とか魚がわかりやすい物だから。

すぐ話題になるというのは、たとえばどこかで毒物が流されると魚がパッと浮いて、死んだ魚には非常に気の毒なんだけれども、魚がわれわれの監視員という役目を果たしてくれているものだから、企業もみだりに流せない。だけど毒物を下水処理場の中に捨てると、逆に追跡困難になってしまうんだね。そういう点では非常に困るんだけどね。

三宅　さきほど話された「川をきれいにすることが人間の生きる条件を守ることだ」と、それを見るのに水棲生物で調べたり、いろんな指標で見ていくというお話しだったんですね。

いま具体的な課題でそういう問題が出てきていると思います。企業が汚して捨てればそれを人間は飲みますし、それが海に流れれば伊勢湾の魚介類がみんな死滅して、それが生活のバランスを崩していく。行政がそれを放置すれば住民が離散して地域そのものが衰退していくということもあります。その中で住民自身がいろんな運動をおこし、そこで三身一体で運動をおこすことがいかに重要かということが今後の大きな課題になってきます。

埜寄　ちょっとその前に。木曽川から堀川に水を引いて堀川をきれいにしようという案がたしかありましたね。なぜ庄内川から引けないのかね。わざわざきれいな所から水を引いてこればきれいになることはあたりまえで、もっと地元の庄内川を認識してもらう意味で、きれいにしなくてはいけない庄内川から引いてくるべきなんですよ。味鋺より下で堀川へ流して庄内川の水はこんな物かと認識することが重要で、堀川の水をきれいにしたってあんなところで川遊びができるわけでもないので意味がないんですよ。

堀川浄化は庄内川の水で

宮田　いま言われた堀川導水の問題ですが、基本的な考え方からいけば名古屋市にも今まで申し入れをしているし、いま現在もその考えで名古屋市と折衝をしているんです。それは庄内川をきれいにしてその水を堀川に入れることが最善であると考えているわけです。その問題についてはそういう形でやりなさいということをここ八年くらい終始一貫してやっているわけです。ただし、堀川をきれいにするためにはいろんな問題点があるので、そういった問題についてはわれわれ「きれいにする会」も協力をすることについてはやぶさかではない。そういうことで、名古屋市に対して二年前から堀川を はじめ河川・池など きれいにするための予算として、名古屋市の一般会計の一％をさいて二〇年間に渡ってあてなさいと言っているわけです。約二千億円くらいになります。それも「きれいにする会」として要求しているわけです。

50年12月30日　に一度堀川に庄内川の水を導水したんですね。お年玉として。事実その時は堀川はきれいになったんですが、三重県魚連からその年ののりの養殖が非常に不作で、名古屋市にクレームがついてしまったことがあったんです。そのとき本山さんが堀川導水を言ったわけです。そこで本山さんと唯一対立した問題は、名古屋城のお堀をうめた水も庄内川の水であるし、名古屋港から名古屋城へもって来るための海運の道として作ったのが堀川だと、そういう意味では昔から庄内川の水を使ってやれば、三重県から苦情がこようが歴史的にも「輸血をされた水」じゃないわけだからということが基本ということだっ

たんです。

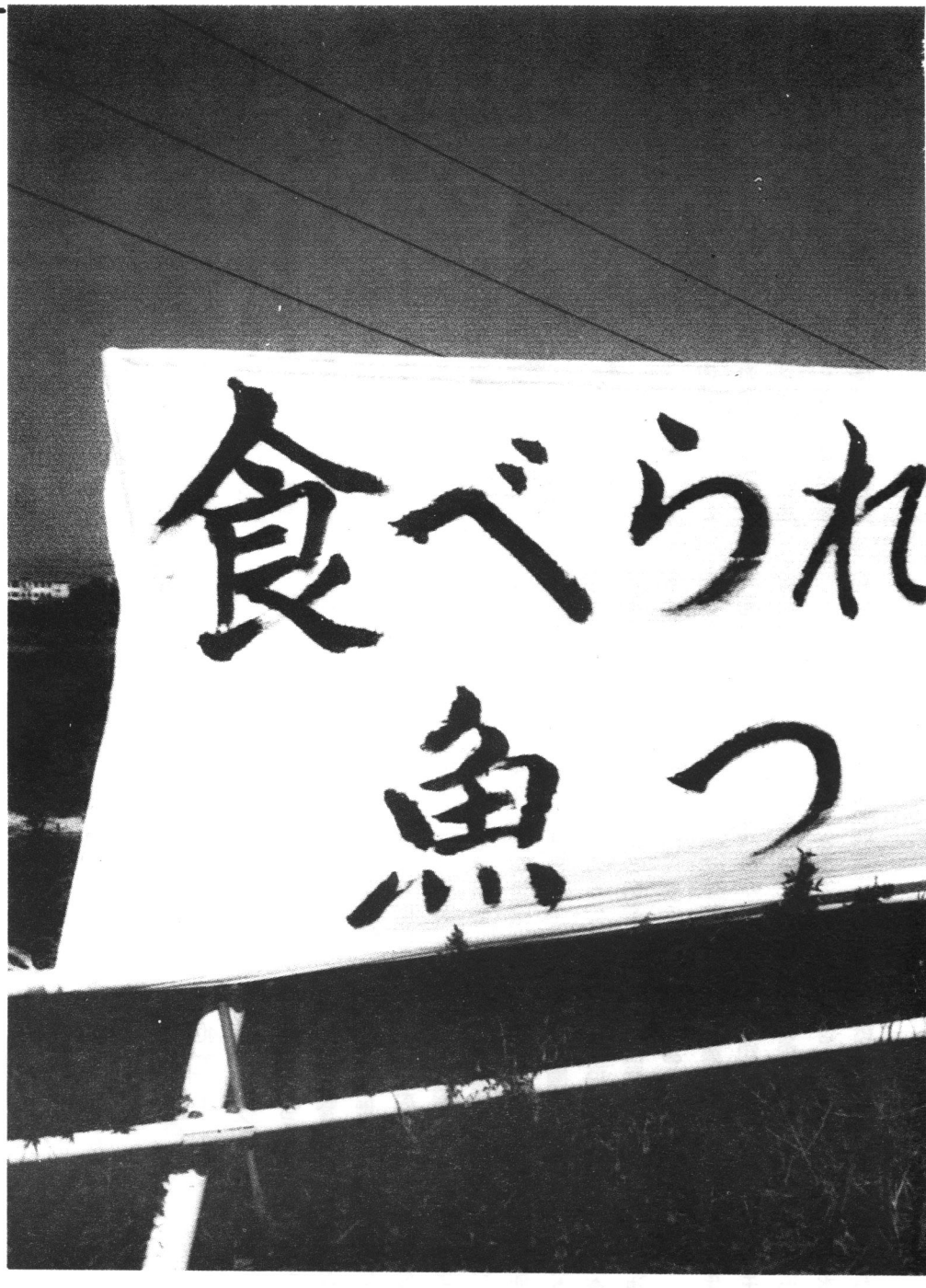
ところが水利権という問題にひっかかるわけです。要するに堀川に終始水を導水しようと思うと、庄内川の水はいま渇水期で水量がたりないんです。農林関係などいろんな複雑な問題が多種多様に複雑にからんでなかなかそれはうまくできない。

堀川導水については、名古屋の中心部を流れている堀川は庄内川の水系であることにはかわりがないわけで、堀川をきれいにするということはわれわれの、いろんな所をみんなきれいにして心を豊かにするということでの基本的な考え方から言えば、やっていかなければならないことなので、今後とも関係各機関を通じながらわれわれの意志も伝えながら、時にはその意志に反する問題も出てくるかもわからないけれども、最終的に堀川をどうきれいにしていくのかということについては最大限の注意を払いながらやっていく。そのことでみなさん方にもいろいろ知恵を借りながらやっていくということです。

今日の話の中で、みなさんのおいたちや「きれいにする会」に関わってきた意識についても話していただいたんですが、いろいろ聞かせていただいた中で私たちが当初思っていた「青少年にきれいな水とあたたかい社会づくりをめざす」という意味のことが、みなさんの中に非常に鮮明にあるということでは意を強くしました。

次代の青少年にきれいな水とあたたかい社会を

今後の問題としては、いろんなことを話されたんですが、ひとつには心の問題をどうしていくかという問題を含めて、心だけではなかなか解決できない現実に汚ないという問題をどう処理するのかということとして、下水処理場や合成洗剤の問題とかに今後どうとりくむのかという点では、心だけでなく行政に



いろんな意味ではたらきかけるということが必要だということが出されました。

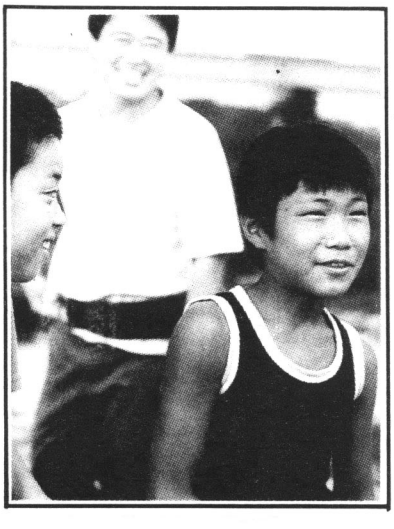
もうひとつは、いま水の問題で上流部から流された水が海までいく過程の問題で、きれいな水がいろんな形でだんだん汚れていって最後には汚い水が海まで到達する。その問題として、どういう形で水をきれいにしてもとにもどすかということは、今後非常に問題になるし論議にもなったと思うんだね。

話には出なかったけれども、今後「きれいにする会」としては上流部のダムでせきとめた水なんかの恩恵を受けて水道で使うとかの問題もあります。しかし、その以前に水量的な問題として、水を上流部の中でリサイクルするのと中流部域から下流部域でのリサイクルという水の有効利用のために、流域全体の水量を豊富にさせなければならなくて、そのために森林などが今後必要になるということへの認識をみなさんの意見の中から思いました。

それから、心の問題と、いま汚れているという現実の問題をどう今後処理していくのかということでは「きれいにする会」のいろんな運動やいろんな活動も必要ですが、それも含め「きれいにする会」と上流部のいろんな人たちとか下流の人たちや行政をどうまきこんで、広い意味で「庄内川流域の住民がどうするのか」ということで話せる「庄内川水系住民サミット」というものが今後必要になるだろうし、それをやっていくことによって行政や政治・企業への庄内川をきれいにするための圧力になっていくんではないかと思います。このことは「きれいにする会」の今後の動きのなかでは大事なことじゃないかと思います。

一方で「きれいにする会」を自分たちで十三年やってきた活動の中で、この活動を広く市民にわかっていただくという点では、今回十三回を迎える釣り大会とかいろいろな問題を通じながらわれわれの原点というか、一番始めの考え方の「次代の青少年にきれいな水とあたたかい社会づくりを」ということを今後どう継続していくのかということが非常に必要ではないかというふうに痛切に感じています。

三宅　今日はみなさん、長い時間ありがとうございます。



名古屋の淡水生物

名古屋公害研究所 水質部
村上 哲生

身近な河川・溜池の水棲生物を一度は捕え、飼育した経験のある人は少なくないであろう。確かに、虫取り、魚取りはいくつになってもおもしろい遊びである。名古屋市の公害対策局も、定期的に「虫取り・魚取り」を実施している。水質汚濁と河川生物の消長との関係が注目され、有力な水質指標としての水棲生物の意味が強調されている昨今では、市民の方が私たちの捕獲の現場を見かけても、容易に公害の調査の一環であると理解していただけるようになったことと思う。名古屋市公害対策局では、前述の定期生物調査で、市内の河川・溜池の生物相を明らかにするとともに、生物指標の制定、市民によるモニタリング事業など各種の生物に関連した事業を行なっている。それらの事業の中で名古屋市内の河川・溜池の生物の世界にどんなことが起こっているのかが少しずつ明らかになりつつある。そのうちのいくつかの話題を報告したい。

一、名古屋の河川・溜池の中にはどのような生物がいるのか

河川・溜池の中には魚、水棲昆虫の幼虫、貝など、肉眼で見ることのできる生物のほかに、原生動物、藻類、細菌類など、顕微鏡的な生物も多数生息している。そのそれぞれの種類数となると途方もない数となる。私たちの仕事は、その多種類の水棲生物の種種、生活を明らかにし、汚染がそれらの生物の個体、群集にいかなる影響をおよぼすかを調査することである。言うまでもなく、水棲生物に現われる汚染の影響は、やがては人間に影響を及ぼすものであるし、生物の生活を知る事が公害の発生、拡散の機構の解明に直接つながる事もある。たとえば、水俣病の公式発見の七年も前に、水棲生物の世界ではすでにアユなどの魚類のへい死事件がおきていた。新潟水俣病裁判では、ウグイが食っているプランクトンの生態が、発生源と患者多発地帯との因果関係を説明する重要な鍵となっている。水棲生物の調査が汚染の摘発、機構解明に不可決の由縁である。

水棲生物の名前を知る、生活全般を知るという仕事は大変手間と根気のかかる仕事である。いったいこれがさしせまった水質汚濁にどう関わってくるのかと詰問されることも多い。しかし、全市民の戸籍調べが、市民サービスの基礎となるように、水棲生物の戸籍調べも、何か自然の改変が予測される場合には必要な仕事である。

そんなわけで、ぽつぽつとではあるが水棲生物のリストができつつある。肉眼で見ることのできる動物に話を限定してみても、市内では、ざっと魚類三〇種、水棲昆虫、貝、いとみみずなどの底生動物一五〇種ほどが生息が確認されている。底生動物に限れば、もちろんこれは種名が確かになった種類だけであり、全生息種類数は優に倍あるに違いない。新しい生物の生息が確認され、リストが長くなる一方で、市内から姿を消していく生物も出てくる。終わりのないリスト作りである。調査から漏れ、記録もなく消えていく生物はこの何倍、何十倍にも達するであろうから、調査はより充実させる

必要がある。ここで、肉眼的に見える生物だけでも二百種を越える水棲生物のそれぞれを紹介することは少ない紙面では無理である。また、おもしろくもない長いリストを読んだとしても水棲生物の生活を知る助けにはあまりならないであろう。市内に生息するいくつかの水棲生物の話題を紹介して、水棲生物の世界の一端を知っていただくとしよう。

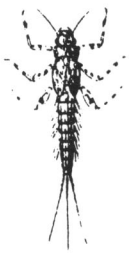
二、河川・溜池の底生生物

河川や溜池の水底で生活している生物のことを底生生物という。たとえば、石礫に付着しているカゲロウの幼虫や、砂地にもぐりこんでいるトンボの幼虫（ヤゴ）はみな、底生動物としてとりあつかわれる。この仲間は、先に述べたように、市内では、約一五〇種の生息が明らかになっている。この底生動物の世界をここでは紹介しよう。

昨年、今年と九月上旬に、庄内川の各地点で、カゲロウが大発生したのはご記憶であろうか。このカゲロウは、どこから飛んできたのでもなく、庄内川の川底に住んでいた幼虫がいっせいに羽化したものである。この例でわかるように、河川の底生生物の群集で、種類数、個体数とも大きな部分を占める水棲昆虫は、幼虫期を水底で、成虫期を水外で過ごす種類が多い。このような生活をする種類としては、前述のカゲロウのほかカワゲラ、トビケラ、ブユ、ユスリカ類などがあげられる。これらの昆虫の幼虫は、えらをもっており、水中に溶けこんだ酸素を取り入れている。水中の酸素は、水が汚れたり、停滞すると減少したり、まったくなくなったりする。そうなるとこれらのえらを持った水棲昆虫の幼虫は生息できなくなる。水棲昆虫の生活を脅かす要因は酸素には限らない。かつて見られた庄内川の陶土の濁りは、川底に沈殿し水棲昆虫の生活場所を奪い、礫に付着する藻類の生育を阻害し、それらを食っている水棲昆虫の生息を間接的に制限する。また、河底の攪乱、護岸改修による水草帯の消滅などによっても水棲昆虫は影響を受ける。これらの例でわかるように、環境の変化は、水棲昆虫を含む底生生物の生活に大きな影響を与える。逆に、水棲生物が貧弱になったり、全く見られなくなった水域では、何らかの環境変化が生じたことを示す。つまり、水棲生物はその生息する水域の環境の良好さの指標となるのである。

庄内川やその他の市内水域の一部は、近年ややきれいになった。水質汚濁の軽減にともないいろいろな水棲生物が市内に復帰しつつあるが、人との関わりあいにおいてあまり歓迎されていないようである。先に述べた庄内川で大発生したアミメカゲロウは、水質的にはかなり良好な水域でしか生息しない。庄内川で以前にこのような「騒動」が起こらなかった原因は、あまりにも川が汚れていたからである。市内のある池から流れ出てくる小川から、これも比較的きれいな水域を好むシマトビゲラの仲間が発生するという同様な苦情が寄せられたこともある。

チスイビル



キイロカワカゲロウ

いずれも水がきれいになったことが原因である。それらの「不快昆虫」の駆除について、虫か人間生活かといった言い古された議論をする気はない。生物の豊富な河川を望むならば、このような不快な生物が付録としてついてくることは当然のこととして考えるべきであると言いたいだけである。有用な生物、きれいな生物だけを残し、不快な生物だけを除くといった都合のよい技術はありえないし、成功したところで出来の悪い箱庭を眺めるような奇妙な違和感が残るだけであろう。ホタルが飛ぶのを見るのが自然の回復の象徴ならば、同じく清流にしか生息しないブユ、アブに噛まれるのもそうである。めだつ特定の生物についてのみ興味を持つのでは

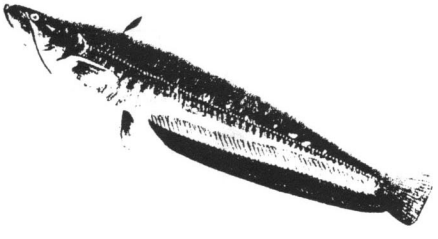
なく、河川の生物全体に目を配ってほしい。特定の種を保護するのではなく、その種が生活し得る環境を保護する運動を展開してほしい。

むつかしい話はさておき、まず網やざるを持って、河川、溜池のれき、水草の間を探ってみていただきたい。都市の中の貧弱な自然とはいえ、いかに多くの生物がいることか。背中に卵をしょって生活している虫、簑虫やヤドカリのように巣をしょって水底を歩いている虫、かまきりそっくりの姿をしたどう猛な捕食虫など観察者を飽きさせない面白い生物がたくさんみつかるはずである。それらの生物と付き合うことにより、都市の中のよりよい自然とは何かが実感できることと思う。

三、魚の世界では何が起こっているか

名古屋市内の淡水域（感潮域を除く河川と溜池）には、三〇種類の魚が生息していることが私たちの調査で明らかになった。都市部の水域であることを割り引いても、もの足らない種類数である。さらに驚くことに、その三〇種のうちのかなりの種類が外国から、また国内でも当地区以外から移り住んできた種類である。タイリクバラタナゴ、カダヤシ（タップミノー）、カムルチー（雷魚）、オオクチバス（ブラックバス）、ブルーギルはいずれも外国から持ち込まれた種類であり、一部の水域では、ピラニア、デラピアの熱帯の魚さえも捕獲されている。おなじみのゲンゴロウブナ（ヘラブナ）も本来は、琵琶湖原産の魚種であり、市内に自然分布するものではない。

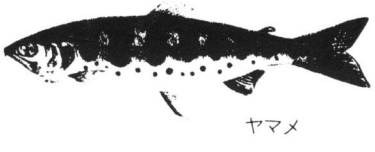
これら帰化魚の侵入については、ブラックバス、ブルーギルのように「害魚」としてその進出が大々的に報道された例もあるが、タイリクバラタナゴのように気がつかないうちに在来種のニッポンバラタナゴと入れ替わってしまった例もある。また、カダヤシのように、蚊退治のために積極的に分布が広げられた魚もいる。一部の地域では、放流が成功しすぎて、近縁のメダカを圧迫し、「蚊絶やし」ではなく、「めだか絶やし」であるとやゆしている研究者もいるほどである。


ナマズ

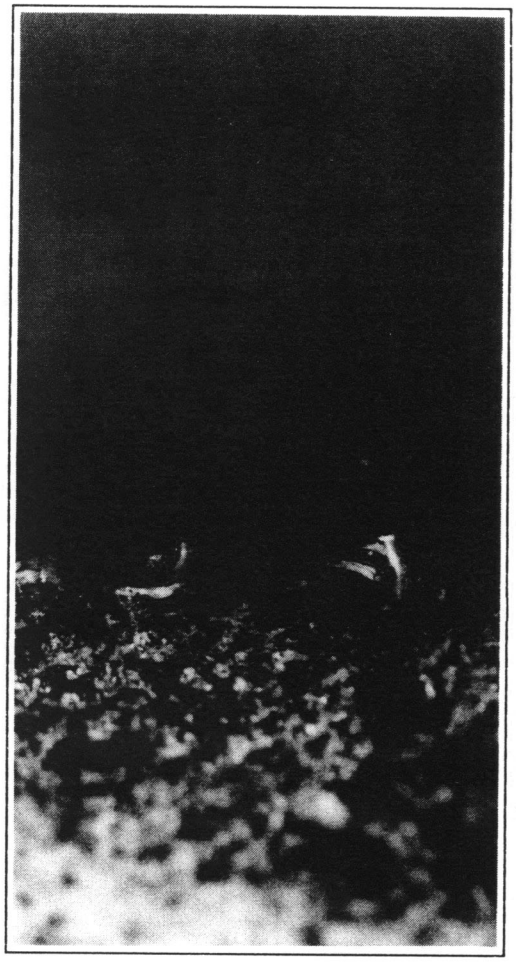
侵入の経緯はさまざまであるが、近年市内に侵入してきたこの四種は分布域も広く、個体数も多いようである。

都市における帰化魚の繁栄の原因は何であろうか。帰化種が移入した水域に定住するためには、生きていくための要求を同じくする在来種との競争が不可欠である。さもなければ競争を避け在来種のいない空間、在来種の利用しない餌の要求など、競争を避け得る種類であることが必要である。ところが一頃の名古屋市内の河川では、水質汚濁、河川改修などで競争者自体がいなくなったのである。自然の改変のはなはだしい都市で、魚類に限らず、帰化種の栄える由縁はここにあると考えられる。在来種がいなくなった汚濁した堀川、新堀川で見ることのできる種類は外来のタップミノーだけになってしまった。堀川の水はきれいになった。水自体を取り出し、その中に魚を放せば市内に生息する大半の魚種が生息可能であろう。しかし、魚の生活全般を考えると生息の条件がきびしくなる。水草もなく、嫌気的なヘドロの堆積している河川では、どんな魚も産卵し、稚魚を育てていくことはむつかしいであろう。魚が住める川とは、一時的に成魚を放流してだいじょうぶというだけでなく、魚が全生涯をまっとうできる川でなくてはならない。この堀川の例では、タップミノーが在来のメダカを駆逐したとは考えられない。タップミノーは在来の魚種が住めなくなった空間をうまく利用したのである。

イワナ


ヤマメ

帰化種により在来の魚類相が撹乱を受けるのを見ることは「あ



るがままの自然」を好む生物観察者にとって愉快なことではない。しかし、「帰化種を入れないようにしよう」「帰化種を撲滅しよう」ではなく、なぜ帰化種が繁栄するような環境になってしまったのか考える視点が現在必要であるように思える。

四、水棲生物から見た庄内川の汚濁

先に水棲生物は河川の水質環境の指標となり得ることを述べたが、では、庄内川を水棲生物の面から評価したら各地点はどのように評価できるであろうか。私たちの調査は、庄内川東谷橋以降、矢田川・大森橋以降しかカバーしていないが、水棲生物を簡単に紹介し、環境との関連を述べよう。

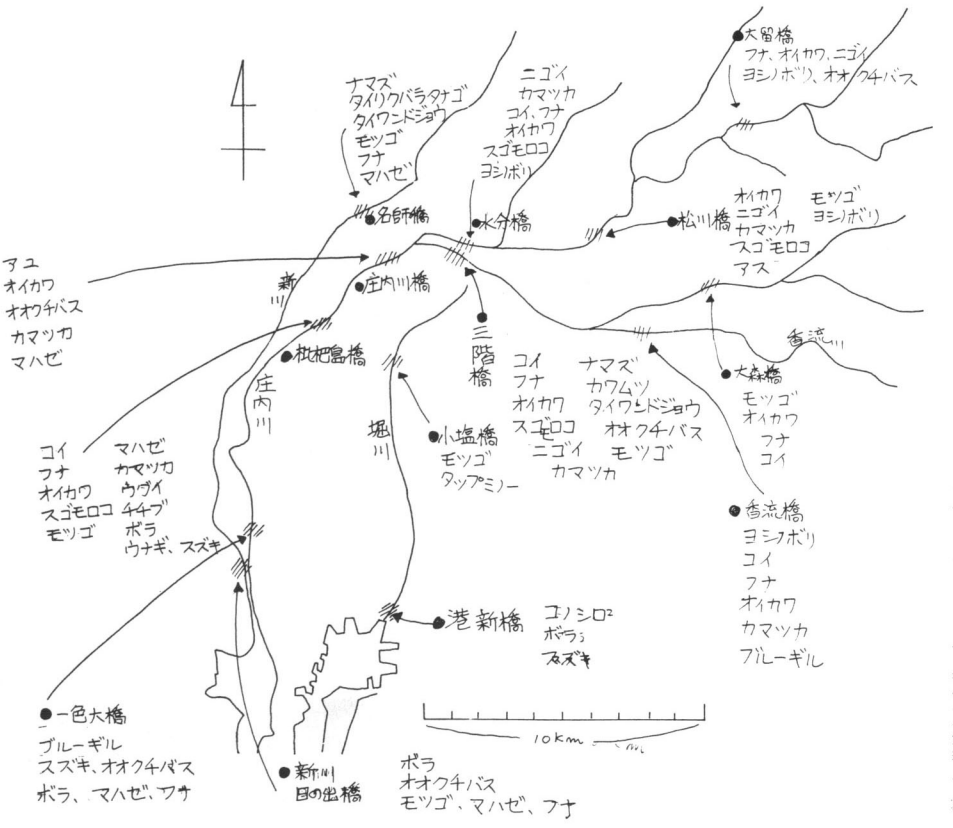
庄内川東谷橋付近から松川橋あたり間では、名古屋市内でもっとも水棲生物が豊富な水域であろう。ニゴイ、スゴモロコなど市内ではもうすっかりみかけなくなった魚もまだ生息しているし、夏になるとアユの食み後もみかける。水棲昆虫も豊富である。河床のれきをひっくり返してみると礫面にカゲロウを見ることができる。互いによく似た格好のカゲロウの幼虫であるが、実は庄内川では一〇種以上いるのである。芋虫のようなトビゲラの幼虫も多いし、うまくいけば、清流にしか生息しないカワゲラ（渓流釣りの餌に使う鬼チョロ）百足のようなヘビトンボ（かんの虫の薬の孫太郎虫）も見つかる。淀みには、これもしないでは少なくなったミズスマシ、ゲンゴロウの仲間が数種類泳いでいるし、水草の根方を網ですくうとエビやハグロトンボ、イトトンボの仲間を捕らえることができる。初夏には、岸辺の植物にサナエトンボの仲間の脱皮殻が多数付着していることもある。河床のれきは褐色の珪藻類の皮膜に覆われている。

もっと下流の水分橋付近では、川と水棲生物の様子は全く変わってくる。れきをひっくり返しても、もはやカゲロウなどの水棲昆虫が見つかることは少なく、ヒル類やミズムシしか見つからなくなる。川床のれきも褐色の珪藻類のほかに緑色の糸状の藻類がめだつようになる。場所によっては、れきの下は黒色の嫌気状態で、硫化水素臭がする。また水温が低い時期には汚灰色の水綿菌がれきを覆っていることもある。これらの現象はすべて有機物による水質汚濁が顕著になってきたことを物語る。

水質汚濁が進むと、水棲生物の中でも汚濁に耐え得ない種類は姿を消し、汚濁耐性の強いものだけが繁殖するようになる。結果として、川の生物の種類の多様化は失われ、寂しい川になってしまう。さびしい川といっても、生物の個体数が少ないわけではない。れきには厚く付着藻類の皮膜が付き、そのうえをたくさんの底生動物がはい回っている。一平方メートルあたりの生物の数は水の汚れにもかかわらず増えているのである。

魚も群れをなして泳いでいる。この「見かけの生物の豊かさ」が、けっして好ましい事ではないことは、種類の多様性という面からも、川に面した「感じ」からも明らかであろう。事実、大留橋と比べて水分橋では、生物で判定した汚濁階級は一ランク下がっているのである。それより下のランクでは、通常の水棲生物の姿をほとんど見ることのできな

名古屋の淡水生物



い状態となる（たとえば、堀川）。水分橋付近の状態は、生物から見て、川らしい川の限度とも言える。

水分橋からさらに下ると庄内川の水棲生物の世界がまた異なった様相を示す。批杷島橋あたりで投網をうってみると上流で見られた魚に混じって、ウグイ、スズキ、マハゼなどの汽水魚が捕獲できる。川につながる海の影響がごくわずかであるが出てきたのである。水分橋付近で最も貧弱であった水棲生物の世界はこの海と関連したメンバーを加えることにより、若干にぎやかになる。市内ではまれになったテナガエビがれるのもこのあたりである。

さらに下るにつれて庄内川は、海の影響を強く受けるようになる。緩くなった流れと海水の塩分により濁りの原因である粘土粒子はより沈殿しやすくなり、川底は砂れき底から泥底に変る。そこはすでに淡水生物の世界ではなくゴカイ、シジミガイなどの汽水生物の世界である。干潟の生物、河口部の広大なヨシ帯の中の生物群集、飛来する水鳥の調査などおもしろいテーマも残っているのであるが、淡水生物の研究者である私たちの庄内川の紹介は、ここで打ち切ることにしよう。

ウグイ

短い区間の例であるが、庄内川の水棲生物群集が河川環境の変化に応じて、その構成が変わっていくことがご理解いただけたであろうか。川の生物群集を論じるには、環境だけでなく、水棲生物自体の相互の影響、また、生物が環境に与える影響を考慮しなければならないのであるが、人為的な干渉によりその姿が変えられつつある庄内川を考える際、人のもたらした環境変化についての考察が、最も重要な問題であると言える。環境改変の影響が複雑な関係をもつ生物群集にどのように現われるかは事例により異なる。じっくりと身の回りの河川の生物を観察することで水棲生物の世界を理解することがまず必要である。将来、庄内川に何らかの変化がおきたら必ずそれは水棲生物の世界にも反映してくるはずである。多くの公害現象の第一発見者は漁師のような自然観察者である。河川に関心を持つだれもが鋭敏な自然観察者の目を持つことにより公害の様相は大きく変わってくると考える。

川をもっときれいに

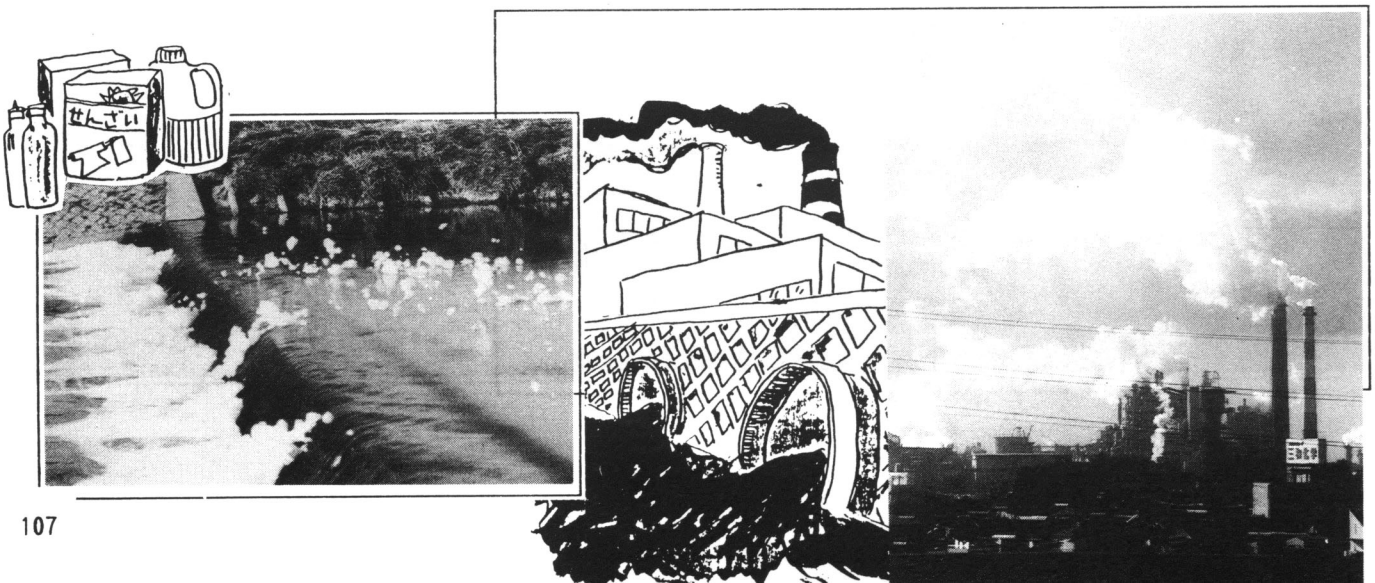
愛知公害調査の会
今井　寿穂

最近の庄内川

私たちは時々、県内水域の水質調査を行ないます。昨年は可児川の生活用水が気になり、木曽川中心に進めてきましたが、一昨年十月は庄内川の十二地点で採水分析しました。

結果（ＢＯＤ）は清流と言える佐々良木で一・〇、瑞浪一・六、多治見二・九、大留四・七、大野木七・二、批杷島六・八でした。河川の汚れは一般にＢＯＤ（生物化学的酸素要求量ＰＰＭ）で示し、その価の小さいほど水はきれいです。目安としては水道源は二以下、鮎の棲息限界が三、モロコが五、鯉が八・一〇では悪臭が発生します。公共下水処理場の排水は一〇～二〇であり、王子製紙の排水は三〇～四〇とみられます。

測定結果は、矢田川などを別にして、庄内川本流に限れば市の言うように環境目標値にはほぼ合格していることを示しています。この点「きれいにする会」の運動は、庄内川汚染の非悪化のために大きな成果をあげました。もし運動がなければ、周辺開発による



人口増加などのため汚染は格段に進行していたでしょう。しかし一方、BODについてみれば庄内川水域の水質はここ十年横ばいであまり変わっていません。

したがって、このままでは水質のいっそうの改善を期待することはできません。庄内川の国の環境基準は水分橋を境に八、一〇以下、市の環境目標値が八以下であり、行政はこれをクリアした現在、次なる目標を持っていないのです。

私は十年近く前「きれいにする会」の最初の本で、まず川をきれいにする目標（汚濁限界）を定め、その受け入れられる汚染物の総量を計算し、現在の汚染量から差し引いて締め出すべき目標を決めるよう提案しました。これを言いかえれば前記環境目標値の一段格上げの要求です。残念ながらこの点まだ運動にはなっていないように思われます。

『環境目標値』とは？

明治十三年、足尾銅山の鉱毒で渡良瀬川の漁業が禁止されて以来、昭和十六年のカドミウム神通川汚染にいたるまで、水質汚濁事件は各地で引き起こされました。その足尾では明治三十三年、農漁民三〇〇〇名がデモに突入し、警察に鎮圧されています。

それが戦後、水俣・阿賀野川の有機水銀汚染をはじめとしてシアン、フェノール、油類、有害重金属、酸類などのあらゆる工業排水、農薬、合成洗剤を含む生活排水などで全国各地の河川湖沼が汚染されました。日本の水の汚濁は戦前の『点』から戦後の『面』に移行したといえるでしょう。

戦後、たび重なる公害事件の発生と汚染の全面化に対し、政府は昭和三十三年に工場排水法、水質保全法を制定しました。しかし、これは排出基準で規制（汚濁排水を薄めれば合格）するザル法だったため効果はありませんでした。世論と住民運動が強まった昭和四十二年、公害防止費用と産業「経済との調和」という過去の関係法規の弱点とされた条項を削除した公害対策基本法がやっと成立しま

した。そして昭和四十五年以降、この基本法に基づく水質汚濁防止法と環境基準の制定、自治体による環境目標値の設定により、各地の河川でかなりの成果をあげるにいたりました。

庄内川も環境目標値を達成しました。しかし市民の期待する水はまだもどってきません。つまり庄内川の環境目標値とは、魚が棲み水遊びができる自然をとりもどす目標値ではなく、臭気、見た目などで市民にがまんしてもらう、当面の限界値だったと言えるでしょう。

水と人と光と風と

地球上で誕生した生命が海から上陸しはじめたのは、古生代中期、約四億年前といわれます。それが中生代の終わりに哺乳動物となり、七千万年前の新生代から多様な分化をとげ、約二百万年前、人類の最初の段階、オーストラロピテクス（アフリカ猿人）が出現して旧石器時代がはじまりました。海で生れた確かな証拠は、人間の血液と海水の成分がよく似ていることだそうです。人体の約七〇％もまた水分です。

地球の表面の三分の二を占める水面は、陸地との水の循環で地球の生命を支えます。水は蒸発して雨となり、風をともなって気象を形づくり植物を育てます。水中に運ばれた有機物から植物プランクトンが発生し、それを小生物や動物プランクトンが食べ、さらにそれを大きな生物が喰い、やがて鳥や人類が摂取して食物連鎖の輪が形成されます。往古より、人類は水のあらゆる恩恵と脅威のもとに暮してきました。その水がたかだかここ三〜四〇年の間に深刻な危機をむかえています。

最近、公害健康被害補償法改正案が国会で可決とか、県都計審高架式高速道路再変更案可決とか、ゴリ押し行政のニュースが続きましたが、一方これとはうらはらにNO_2汚染悪化のきざし、伊勢湾汚染広域化と赤潮の増加、クロールエタン系溶剤の地下水汚染アスベストによる健康被害の怖れ、オゾン層破壊と炭酸ガス増大による異常気象の予測、など見逃せない報道もめだちます。これらのことは一部マスコミの論評に反し、公害が決して終っていないどころか、ものによってはかえって深刻化していることの一端を示しています。

環境行政が後退しつつある現在こそ、みなさんの「会」のユニークな活動、市民参加の環境づくりのいっそうの強化が求められます。息長い粘り強い運動を期待します。

十三年の実績をふまえて

「矢田・庄内川をきれいにする会」会長　宮田　照由

各界、各階層のみなさま方より会への提言、励ましなど「十三年のあゆみ」にお寄せいただきありがとうございました。十三年の実践の実績とみなさまの提言を今後の活動の指針としていきたいと思います。

庄内川は岐阜県恵那郡夕立山から流れ出す延長九六キロの一級河川です。東京の多摩川、大阪の淀川と並ぶ代表的な都市河川、矢田川は、長さ五六キロ。いずれの上流にも全国有数の窯業地帯があります。一日五〇トン以上を排水する陶器工場は約一四〇ヶ所、庄内川の中流の王子製紙春日井工場は一日、一七万トンの汚水を流し続けています。

『川の汚れは心の汚れ』の看板の設置、「食えない魚釣り大会」など川に目を向けてもらうためにはじまった素朴な運動が、「白濁の川」庄内川・矢田川を魚の住める川に、鮎の生息できるまでにもどすことができました。昭和四十九年、「会」を発足させた頃の夢が実現できたことは、うれしいと

水は汚した者がきれいに

同時に、この現状を守り、さらによりよい環境をつくりださなければ『次代の青少年にきれいな水と暖かい社会』を引き継ぐことができません。

そのためには昭和四十六年五月二十五日閣議決定された、庄内川など水域の環境基準のランクの引き上げです。今の現状に合わない、遅れた基準を見直さなければ、庄内川・矢田川を、伊勢湾をきれいにすることはできません。国内でも基準の引き上げのできる数少ない河川です。その意味では政治的問題をも含め、避けて通ることはできないと思います。

このことをぬきに庄内川のこれ以上の浄化はないと思います。そのための運動の進め方は厳しくとも、乗り越えなければ新たな展望は望めません。都市河川の代表でもある庄内川、矢田川を汚す汚染源は、工場廃液と家庭排水とがあります。汚した水をきれいにするには莫大なお金がかかります。

私たち住民と企業は汚さない工夫と努力を社会の一員としてはたさなければなりません。

「水は汚した者がきれいにするのが原則」です。しかし力のない企業には、補助金制度などを充分にし、現状に合った浄化対策をしなければ行政の役割を果たしたとは言えません。企業、県、市などにより、浄化対策施設の建設費の相互出費など新しい考え方も必要です。住民、企業、行政が三者一体となれば必ず実現できます。

庄内川を含め、市内中・小河川は、家庭排水、合成洗剤が工場廃液と並び汚す原因となっています。無リン洗剤なら安全と本当に言えるのでしょうか。合成洗剤を使用することによって知らない間に加害

台所のむこうにふる里の川があり海がある

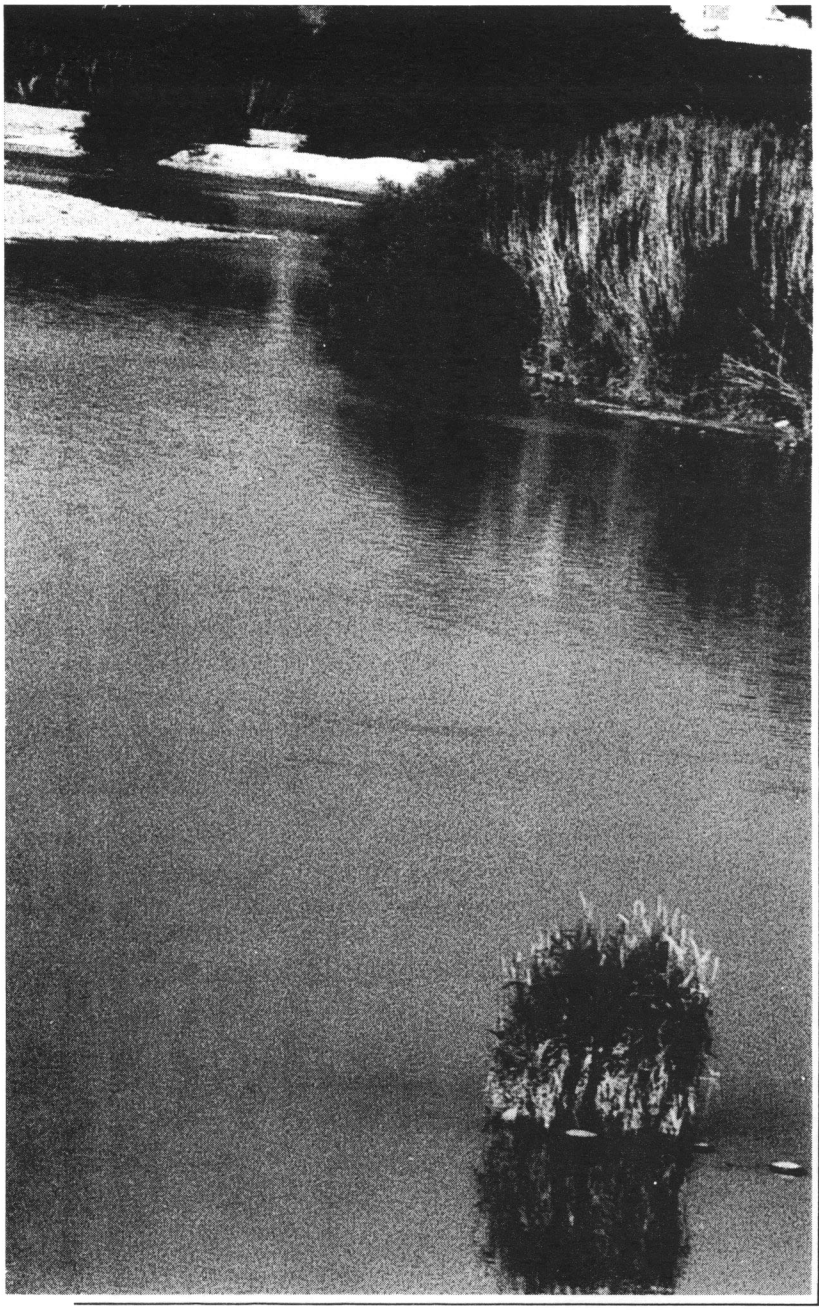
者にされている住民を、そして知りながら合成洗剤しか手に入りにくい現在のシステムを変えていかねばなりません。自動車でも排ガス規制を行ない発生源対策を進めてきました。合成洗剤でも同様のことがいえると思います。

多くの人を加害者にしてはなりません。行政も企業も真剣にとりくまねば、次代によりよい環境をつくりだすことはできません。汚した水を浄化するには下水処理場の建設が不可欠です。立地条件と基準にあった高次処理のできる下水処理場でなければ本当に浄化できません。現に、堀川中流、山崎川下流などに疑わしい下水処理場があります。下水処理場があれば絶対だと考えるのは危険です。また現状の基準が守られていればよいとの考えは、日一日とめまぐるしく進歩する世の中に逆行するものです。

行政は努力をおこたってはなりません。汚した水をきれいにすることとあわせて、自然のきれいな水を作りだすことも大切です。川の上流、水源地の自然林の保護と森林の整備育成など国家的規模で過疎対策とあわせ森林の「保水力」を強化させることにより、ダムに頼らない水資源対策と、中下流部の汚された水を浄化し工場などで再利用させることです。

水のリサイクル

私はこのようなことを「水のリサイクル」と考えています。これを実現させるには、国民、住民一人ひとりの勇気と決断、気持ちがあれば、きれいな水をつくりだすことは必ずできます。



水辺再生は肌身で

現に庄内川で鮎が住めるまでになりました。「水は私たちみんなのもの」です。その意味で私たち『きれいにする会』は六十一年から名古屋市に対し、一般会計の一パーセント＝約七十億円を二十年間堀川をはじめとして市内各河川、池などの浄化対策費として予算化するよう要求しています。これは「汚した者がきれいに」の原則だからです。また、市内外の河川浄化にも時と場合によっては思い切った対策と、新しい浄化施設づくりも今後は必要です。「会」としても研究、努力をしなければと思っています。

水質の浄化にともない、水辺再生の関心の高まりによって、五十九年八月建設省によって水棲生物による水質の簡易調査がはじめられ、私たち「きれいにする会」も準会員とともに積極的に参加しました。調査地点は、庄内川で比較的きれいな松川橋、最も汚れている水分橋、汚れている庄内橋と行ない、結果は予想通りでした。名古屋市も一昨年から水辺モニター制度として市内各河川、池の調査が多くの市民の参加で楽しく行なわれています。

自然を、水辺を、大切にする心が芽ばえ、よい結果が出るものと期待しています。

科学的数字データと合わせて目安となる魚種、水棲生物の調査を結びつけることにより現実的かつ正確に現状を知ることができると、実践の中で肌身で感じています。このように、だれにでもわかる調査法をも含め、行政のデータとして取り入れさせる運動も合わせて進めなくてはなりません。猪高緑地を含め現在残されている数少ない貴重な自然とため池や緑地と、そこに生息する野鳥、昆虫、植物

川の息づかいと共に

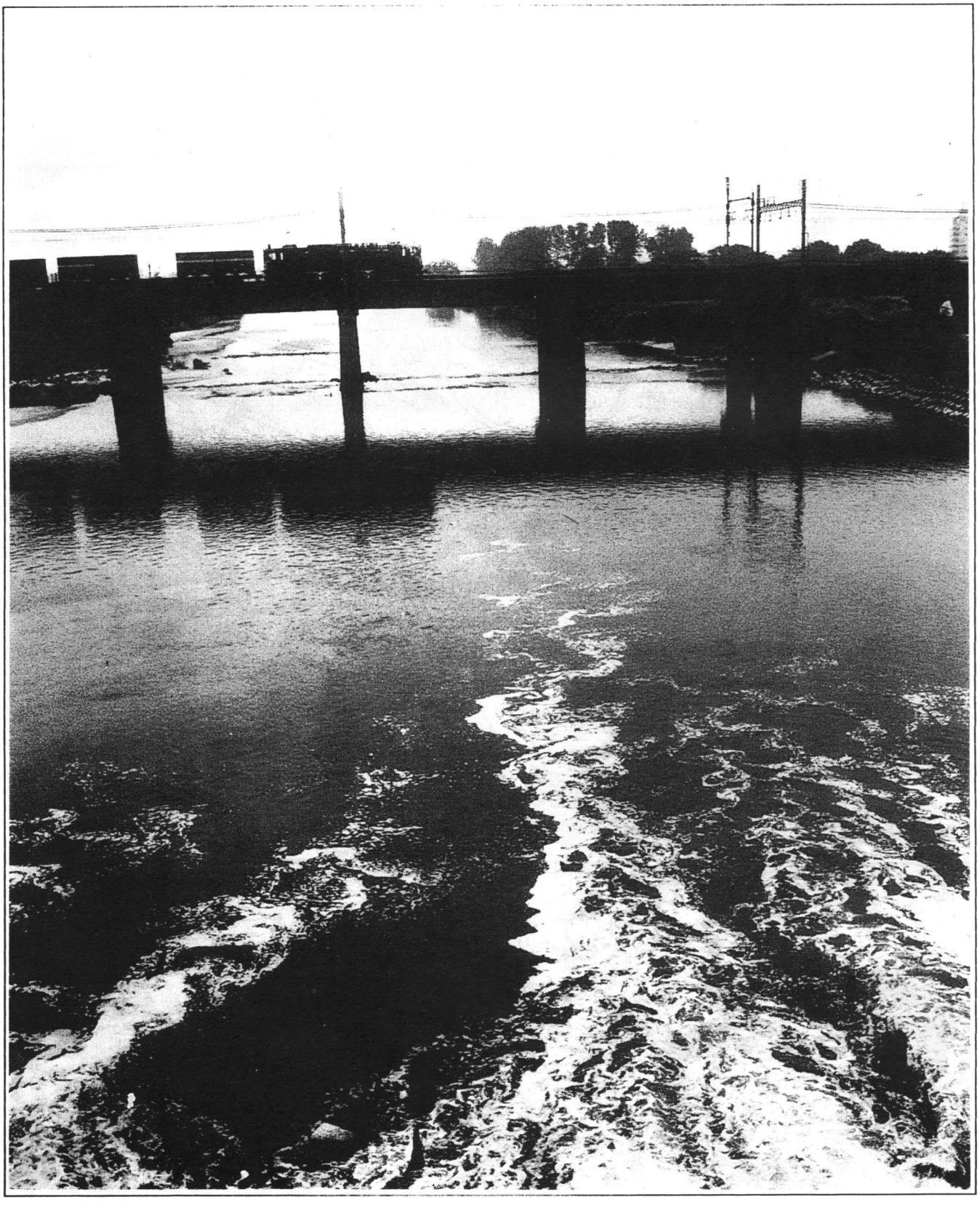
など守り続けなければいけないと、保護面での対策作りも進めています。

このように、多くの課題、問題があります。川の上流から受け皿の港、海まで、その土地、その土地の考え方、進め方があります。それらの住民の手による、肌で感じられる「住民サミット」の実現によって解決できると確信しております。そのための努力を、今後もねばり強く続けていかねばなりません。

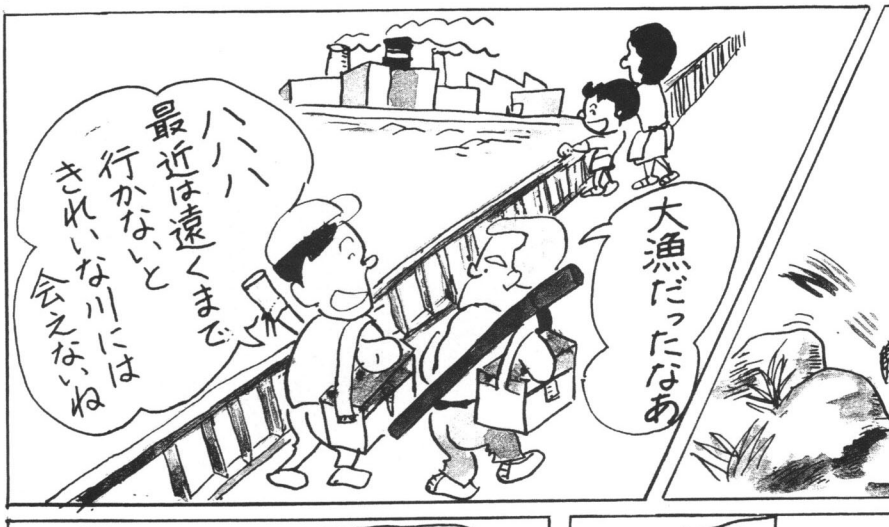
川を知ってもらうためにはじまった運動も、被害者的運動から加害者的運動、そして加害者にならない、させてはならない運動へとその時どきの状況によって進めてきた運動は、十三年の実績となり日本全国にもない新しい住民運動の一ページとなったと自負しています。

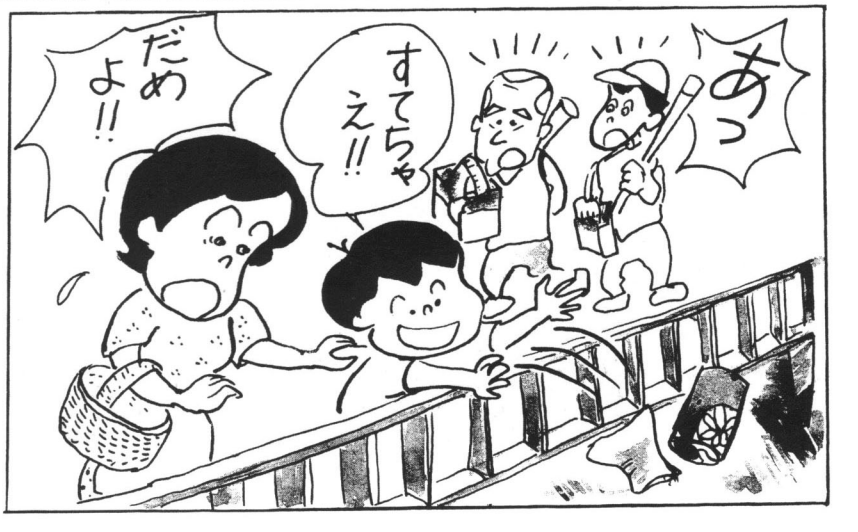
「どこにも拘束されず、自由に真の住民運動を、明るく、楽しく、美しく」を合言葉として活動ができたことは、何の保証もとめず、川の汚れを見すごしてきた反省と、次代にきれいにして残したいとの素朴な願を柱に運動を進めてきたからではないかと思います。「科学と自然」「住民、企業、行政」が真に一体とならなければ、多くの問題を解決できません。

きれいな水、ふる里づくりを、十三年の貴重な実績の上に新しい第一歩を若い役員と、そして今まで私たちきれいにする会を支えてくださった地域のみなさんとともに「鮎の楽園」「ほたるの里」づくりを新たな目標としていきます。



矢田・庄内川を きれいにする会 あゆみ13年



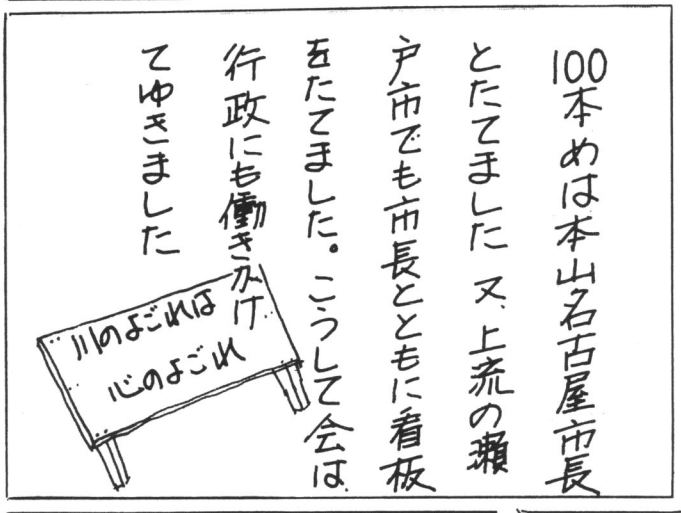


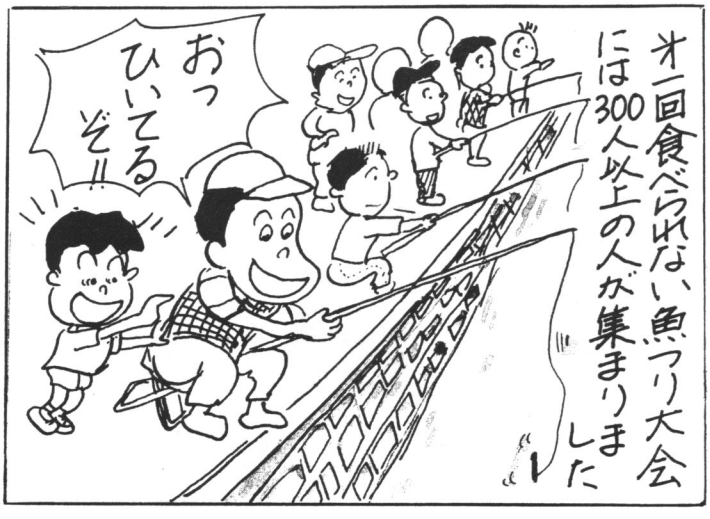
このお!!
まあまあ
昭和30年代後半より高度成長で日本には、大きな工場ができ、産業の発展、企業利益が優先して、公害が日本中に広がってゆきました
ゴボッ
矢田・庄内川の上流では瀬戸・土岐・多治見のとうじ器の大量生産による洗い水が白くにごり、中流では春日井の大工場王子製紙があり、一日20万トンの多量の水を工場で使ってその廃液を流し、川はヘドロ化していました
又下流では、住宅がたちならび、市民生活変化にともない、台所、ふろ、せんたくで使う水は増え、汚れ、その生活排水を流し、川は汚れるばかりでした
一方、川も堤防やせきがつくられ、土や石、草でできていた川は、コンクリートでかためられ、もともと川がもっていたきれいにする力をなくし魚は、すめなくなっていました
とても魚つりなんて
これでは死の川寸前だ
わしらの若いころはこの川もきれいだったよ

子どもたちは川でおよぎ、あそんだものだよ
ゆりかもめがとんでいたし……
特にこの川のアユは水質がよくて最高に味がよかったよ
こんなことではいけない!!
ドン ドン
よし!! やってやるぞ みんなできれいにしよう!!
ギュー
この川を昔のようにきれいな川にしよう
次の時代の若ものにきれいな水とあたたかい社会を残そう
宮田さん
丹羽さん
丹羽さんを始め、賛同した人たちが集まり、会は49年に発足しました
矢田・庄内川をきれいに
『矢田・庄内川をきれいにする会』は、楽しみながら、遊びながら、そしてみんなで力を合わせてやってゆくというユニークな活動がはじまりました

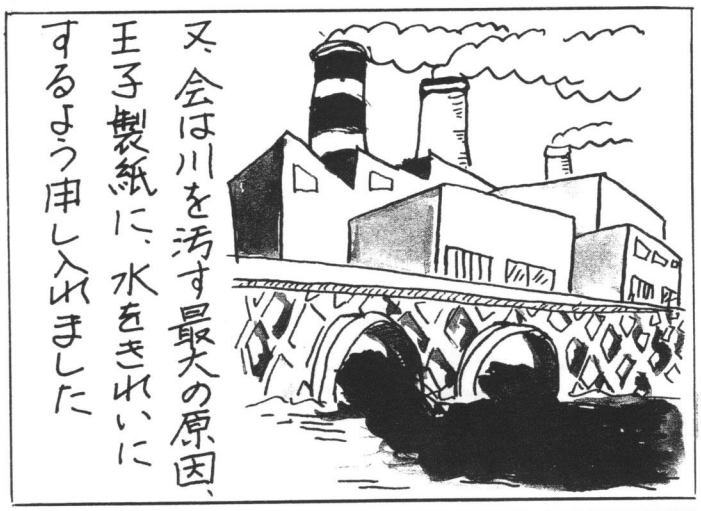
まず才一にみんなに
川のよごれの状態を
知ってもらおうと
看板をたてて、みんなの
注意を川に向け
ました

100本めは本山名古屋市長
とたてました 又、上流の瀬
戸市でも市長とともに看板
をたてました。こうして会は
行政にも働きかけ
てゆきました





この魚つり大会はその後何回もおこなわれ、会の活動がすすむとともに魚つり大会の名前も「食べられるかもしれない魚つり大会」に、57年には「あゆかえれ庄内川」、61年には「あゆのすむ庄内川」とかわってゆきました



会のシンボルマークバッチが作られ、バッチを胸に、テーマソング「川の歌」の発表会が盛大におこなわれました

又、会は川を汚す最大の原因、王子製紙に、水をきれいにするよう申し入れました

ふろやさんでの展示は町の人々の話題になりました

いろんな行事をはじめたけどみんなおうえんしてくれるので……
名古屋市の婦人活動実践集で紹介されたわ
新聞にのってるよ
みんなが少しずつ川に関心をもってきているナ
県や市にも訴えつづけ、公害対策もとられるようになった。川をきれいにすること は、住民、行政、企業が力を合わせないとできないんだよ
住民
行政
企業
そして、県はアユを9年ぶりに庄内川に放流したのです
やった〜
アユのついせき調査も頼まれていまス
ところがついせき調査をすると、吉根橋付近ではアユがなかなかとれなかった
放流したアユはどこにいったのかなあー
天然か放流かわからないよ
そんな時、準会員より庄内橋でアユを見つけたという連絡がありました
これはたしかに天然のアユです
教授
よくやった
エヘヘ
アユが生息しているのはたしかになり、会員はカゾケられました
さて、準会員のことを紹介しましょう
準会員とは子どもの会員のことです
準会員
次の時代を作る子どもたちに、この会をつたえてゆくためにも、準会員として入会し、会の行事に参加してます
アハハハ

そのころメッキ工場よりおびにとコイ一万匹の放流がありました
魚道がないのでアユがそ上できないんだよ
53年には上流の土岐魚協の協力でアユ救出作戦をおこないました
又、町にみどりをと桜の銀行を作りました
川西地区に住民の意見が取り入れられた近代的な処理場があります
そのあき地にみんなで市長と桜をうえました
結婚記念、出産祝親と子の思い出づくりにと、記念植樹は大好評でした
58年には川のほとりで観桜会が楽しくひらかれました
釣池として、市内の猫ヶ洞池など4か所開放されました
会の成果です
水辺モニターにもなり水生昆虫や鳥、水草など観察しています
名古屋港を考える会
合成洗剤問題の会にも参加
上流から海まできれいにすることを願い考えています
せんざい
昭61年ボート下りを最後に丹羽会長から宮田さんに引き継がれました
サバイバル庚川86ボート下り

みんなの力で13年間やってこれたなあー
ようやくアユがすめれるようになったね
でもまだまだきたないよ
工場廃液もあるし、生活排水が増えている
これからの大きな問題だね
62年に堀川浄化対策費として予算運動した。市民が汚した川をみんなで責任とるべきだ
やむをえないけど護岸工事で魚がすみにくくなー
自然の川がなくなってゆく……
川にすむすべての生きものの命は、水じゃからの
人間の歴史は川とともに作られてきた この川を守るのはわしらのつとめだ
よみがえれ庄内川!!

矢田川庄内川をきれいにする会
（テーマソング）川の歌 ―魚にきいてみようよ

門倉 詩
林 彰雄 曲

さわやかに

かわーは ーどこから くるんだろう

かわーは ーどこーへ いくんだろう

さかなにきいてみ よう さかなはないている

きれいなみずー と ー あたたかいまちを

川の歌
魚にきいてみようよ

門倉 詩
林 彰雄 曲

川はどこからくるんだろう
川はどこへいくんだろう
魚にきいてみよう
魚は泣いている
（きれいな水とあたたかい街を）

風はどこからくるんだろう
風はどこへ行くんだろう
魚にきいてみよう
魚は話してる
（きれいな水とあたたかい風を）

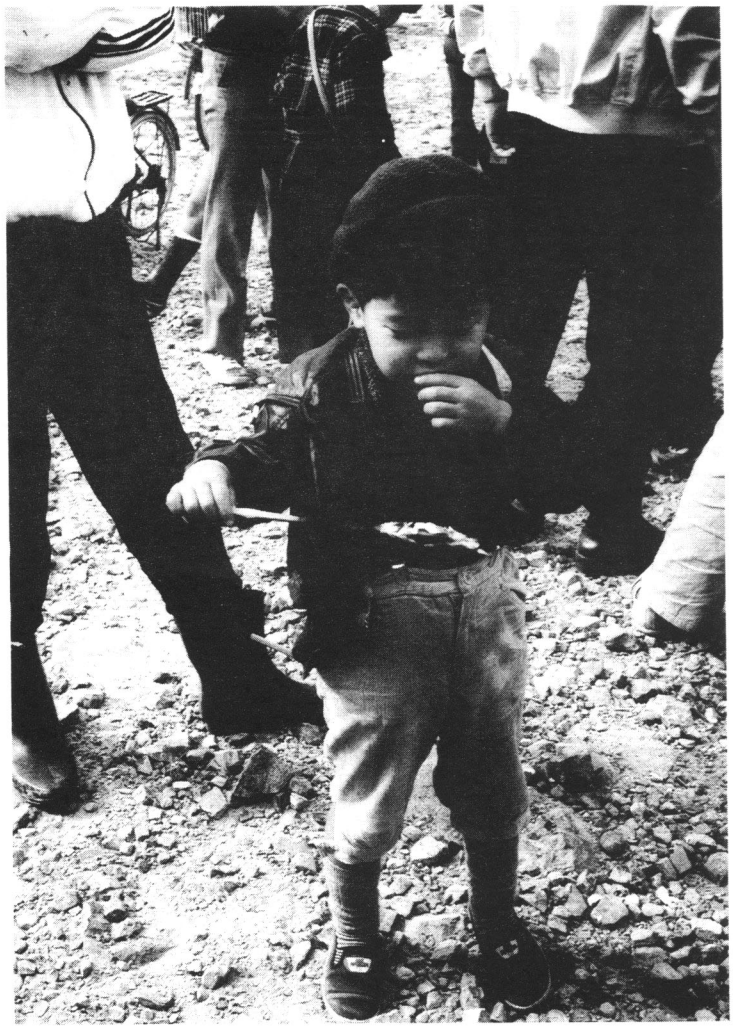
川はどこからくるんだろう
川はどこへいくんだろう
魚にきいてみよう
魚はうたってる
（きれいな水とあたたかい夢を）

五つのとりくみ —その④—

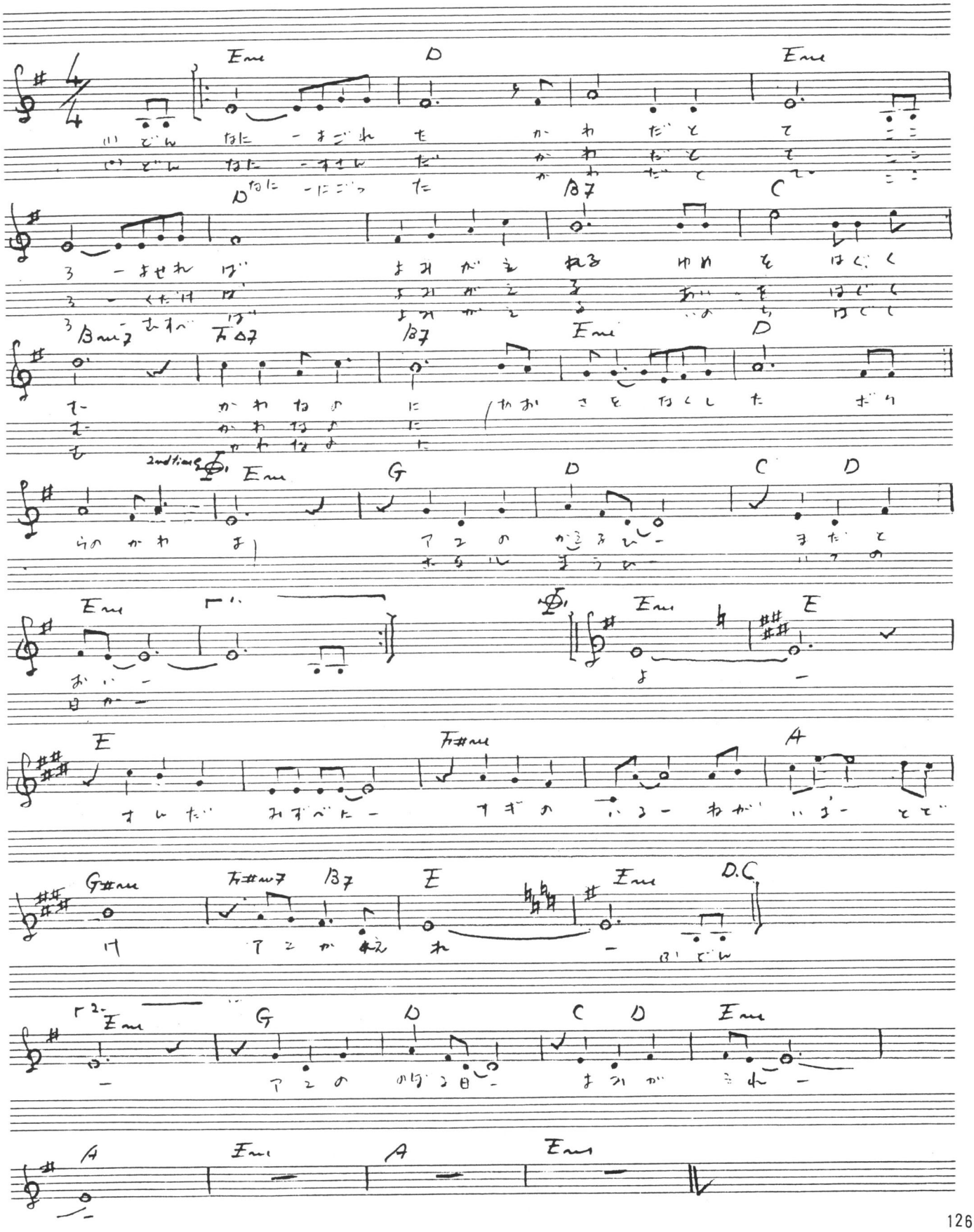
「ホタルの里づくり」

「あっちの水は苦いぞ」「こっちの水は甘いぞ」と手にうちわを持ちホタルを追って歩いた経験のある人は今どれほどいるでしょう。「名古屋の町にホタルが飛んだ」という話題はときどきあります。それはいずれもヒメボタル（水質に関係なく平地から高知にかけて草むらに棲息し、陸棲のカタツムリ類などを餌としています）です。一昨年、昭和61年水分橋付近でも大量に発生し河川敷は宝石をちりばめたごとくみごとでした。しかし新聞で報道されるやいなや一夜にしてホタルは消えてしまいました。「一度も見たことのない我が子に」一目見せてやりたい親心がホタルを持ち帰ってしまったのでしょう。名古屋市の中心鶴舞公園には、近年、ゲンジボタル（人里近い清流に生息し、水棲、カワニナ類を餌としております）が飛んでいます。

ふるさとづくりの一環として名古屋市が幼虫を飼育放流したものです。それでも、憩いの場として親子で見物に来る人が後をたちません。現在「会」でも試験的にゲンジボタルの幼虫を飼育しています。この夏には試験放流をしたいと思っております。矢田川、庄内川、香流川、堀川にもゲンジボタルかヘイケボタル（水田・池・沼・小川・用水路に生息し、水棲。モノアラガイ類を餌としています）が棲息できる環境にすることが目標です、それにはカワニナ類やモノアラガイなどの棲息できる水質を保証しなければなりません。市内河川は工場排液より生活排水の汚す割合が増えています。この問題を解決しなければ「ホタルの里」作りは出来ません。そのために市に対し予算1パーセントを要求しています。合わせてホタル募金の準備も進めています。



ぼくらの庄内川よ


Emi D Emi
いどん なに ーまごれも かわだとて ここ
いどん なに ーすれも だ かわだとて ここ
なに ーにごった かわだ ここ
D B7 C
ろ ーまれば よみがえる ゆめを はぐく
ろ ーくれば よみがえる おい ーを はぐく
ろ ーれば よみがえる いの ちはぐく
Bmi7 F△7 B7 Emi D
た かわねぶに わおさをなくした ぶり
た かわねぶに
も かわねぶに
2nd time Φ1 Emi G D C D
らのかわよ アこのかぶるし ーまだと
ちいさいうし ーいこの
Emi
おい ー
日が ー
Φ1 Emi E
よ ー
E F#mi A
すいだ みずべた ー すぎの ふる ーわが いえ ーとど
G#mi F#mi7 B7 E Emi D.C
け アこが ゆえ れ ー いどん
2. Emi G D C D Emi
ー アこの のぼる日 ー まれが きん ー
A Emi A Emi

庄内川よ（ぼくらの）

作　詩／宮田　照由
作詩補／小原　政春
作　曲／小寺富士雄

一、どんなに汚れた　川だとて
心よせれば　よみがえる
夢をはぐくむ　川なのに
青さをなくした　ぼくらの川よ
アユのかえる日　まだ遠い

二、どんなにすさんだ　川だとて
心くだけば　よみがえる
愛をはぐくむ　川なのに
青さをなくした　ぼくらの川よ
澄んだ水辺に　鷺がいる
願いよとどけ　アユかえれ

三、どんなに濁った　川だとて
心むすべば　よみがえる
生命はぐくむ　川なのに
青さをなくした　ぼくらの川よ
蛍舞う日は　いつの日か
アユののぼる日　よみがえれ

川の汚れは
心の汚れ
矢田 庄内川をきれいにする会
川の汚れは
心の汚れ
庄内川をきれいにする会
川の汚れは
心の汚れ
庄内川をきれいにする会
川の汚れは
心の汚れ
庄内川をきれいにする会
川の汚れは
心の汚れ
矢田 庄内川をきれいにする会
川の汚れは
心の汚れ
矢田 庄内川をきれいにする会

矢田・庄内川をきれいにする会の歴史

四十九年三月　丹羽・宮田、庄内川、矢田川について話し合う

九月　王子公害をなくす住民の会に参加するようになる。
渡辺さんから参加の申し出があり、三人できれいにする会をつくる事を話し合う。

九月～十二月　三人による運動の呼びかけがはじまる。

十二月九日　朝日新聞ではじめて「きれいにする会」が紹介される。

十二月十一日　第一回目の世話人会が開かれる（参加申し込み二九名）
〔川の汚れは心の汚れ〕の看板の話が出る。

十二月二十五日　第二回世話人会（参加二〇名）
運動の方針など話し合う。〔王子の廃液問題など〕
三階橋温泉に掲示板を出すことを決める。

十二月二十七日　王子製紙に工場廃液について口頭で申し入れる。（丹羽）

十二月二十八日　毎日新聞で「きれいにする会」の結成が紹介される。
（矢田川で大量の魚が浮く）

五十年　一月十四日　第三回世話人会（参加一五名）
三階橋温泉に王子製紙の工場廃液の写真を展示する。
愛知県知事候補者に対し公開質問状を出す。

一月二十日　第四回世話人会（参加一〇名）

一月二十九日　第五回世話人会（参加九名）
文化的活動始まる。福祉大学との話し合い始まる。

二月二十日　三階橋温泉にて〔川と政治とくらし〕について訴える。
〔川の汚れは心の汚れ〕看板完成（一五枚）

三月三十一日　第六回世話人会
代表世話人に丹羽さんが選ばれる。
常任世話人、渡辺さん、宮崎さん（会計を兼任）
事務局長　宮田

五月二十二日　看板を庄内川、矢田川堤防に立てる。

五月二十四日　「きれいにする会」「市民の会」「郷土を守る会」、で本山名古屋市長あてに公開質問状を出す。（木曽川右岸流域下

六月一日

六月五日

釣り大会

六月七日　水道問題）

六月二十七日　第七回世話人会（六名）

六月二十九日　食えない魚釣り大会の件について話し合う。

七月五日　市役所で木曽川右岸流域下水道問題について話し合い。

八月十四日　庄内川で「食えない魚釣り大会」を開く、三五〇参加（大盛況）

九月二十八日　木曽側右岸流域下水道に関する解答が市からある。

十月二十五日　「川の汚れは心の汚れ」の看板を十五本立てる

十月二十六日　この頃より、庄内川、矢田川に釣りブーム起きる。

十二月九日　第二回、「食べられない魚」親子釣り大会を開く。（矢田・香流川合流点付近）　合成洗剤の害を訴える。

十二月二十八日　土方康夫　日本福祉大学教授による当会のシンボルバッジのデザインが決まる。

十二月三十日　第三回「食べられない魚」、母子釣り大会を開く。（松川橋付近）国際婦人年にちなんで釣り女子選手権争奪戦、宝探しなど楽しく行なう。合成洗剤の害を訴える。

五十一年一月四日　庄内川六価クロム検出量日本一……新聞に発表される。水分橋上流、八田川より流出したもよう。

一月十二日　シンボルバッジでき上がる

一月二十一日　堀川に庄内川の水が導入される。（三六〇年ぶり）

一月二十二日　堀川導入終る

一月二十八日　「きれいにする会」、堀川浄化作戦実施。看板を二枚立てる。

三月七日　堀川と庄内川は兄弟川であることを沿岸住民に訴える。

三月十三日　五十一年度第一回世話人会開く。

バッジ作戦大当り。二週間で四〇〇個さばく。

中部善意銀行、環境美化奉仕協力懇談会に出席。丹羽

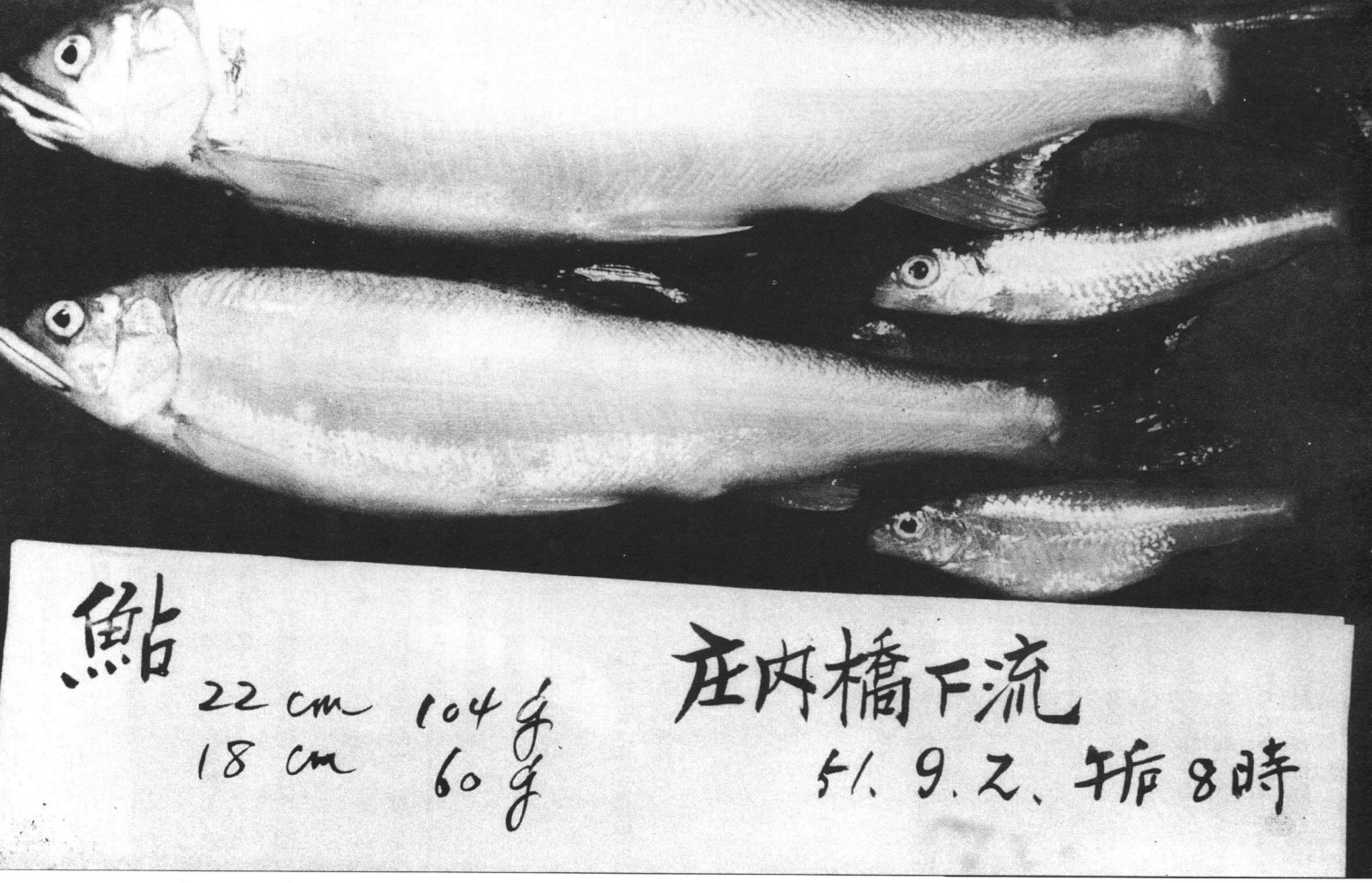
「矢田・庄内川をきれいにする会」がＮＨＫのテレビリポートで紹介される。

愛知県の依頼により、庄内川の魚種の採取。

枇杷島橋、水分橋・志段味橋

ＣＢＣテレビの「市政ニュース」で丹羽さんが市長と対談

住民運動と行政の一致が早く川をきれいにすると訴える。



三月十五日　ひまわり幼稚園の園児卒業記念に「川の汚れは心の汚れ」の看板を五本矢田川に立てる。これで看板は五二本になる

三月二十八日　準会員が自主的に水分橋、松川橋間の清掃をする。

五月一日　堀川導入の市側の回答が新聞紙上に発表される。

五月九日　庄内川↓堀川浄化作戦難問の記事（王子製紙の廃液など）

第一回庄内川まつり、バッジで大行進。

「きれいにする会」のテーマソング、川の歌発表会

食えない魚釣り大会

六月十四日　川のごみ清掃などの行事。参加四〇〇名。

九年ぶりに愛知県によって鮎が庄内川へ放流される。一万七千匹。場所は吉根橋。体長平均六～七センチのもの。

六月三十日　「きれいにする会」の運動の成果大いに上がる。追跡調査行なう。

八月七日　庄内川漁業協同組合、吉根橋で鮎採取。半月で体長十一センチ、体重十二グラム

八月八日　瀬戸市長に「川の汚れは心の汚れ」の看板を瀬戸市に立てていただくよう、申し入れをする。

八月九日　全国放送協会主催の環境美化キャンペーンに参加。

八月三十一日　三階橋上流の川岸の清掃。

九月二十八日　世話人会で「きれいにする会」の中に釣りクラブ（山彦会）をつくることを決定する。

十月六日　瀬戸市役所にて市長と対談し、市長の手により、看板を立てる。

十月十八日　釣りクラブ「山彦会」発足

十二月二十日　庄内川で採取された鮎は天然鮎、名古屋女子大学廣教授発表

五十二年一月二十六日　食べられるかもしれない魚釣り大会試食会

一月三十日　「川の汚れは心の汚れ」看板百本記念、本山市長によって立てられる。黒川をきれいにする会とともに堀川清掃。

二月十日　矢田川にシアン流出。

二月十九日　庄内川上流、土岐川支流、肥田川にあまご放流

大和メッキ、矢田川にコイ放流（シアン流出のおわび）

王子製紙工場増設に下流住民として申し入れ。

二月二十一日　「さくらの銀行」開設。
五月一日　三県一市会議で市内河川問題の発言あり。
五月十五日　鮎救出作戦決行、鮎土岐川に送る。
五月二十三日　ＮＨＫテレビリポートで「会」が紹介される。
五月三十日　庄内川でブラックバス捕まる。
六月四日　第一回「健康と環境を守れ愛知の住民一斉行動デー」に参加、知事に要望書提出
六月二十九日　「行動デー」の回答来る。
十月九日　「食べられるかもしれない魚釣り大会」、試食会、釣具バザー・庄内川にコイ放流。五万匹。名古屋釣具商組合。
十月二十五日　鮎救出作戦のため県に特別採取願提出
五十三年三月二十四日　鮎の遡上が悪く、救出作戦絶望的。
四月十一日　「さくらの銀行」植樹祭に本山市長参加。
五月十四日　土岐川にあまご放流。
五月二十五日　第二回「一斉行動デー」参加。知事に要望書提出。
五月二十七日　「水分橋緑地公園愛護会」づくりに参加。
五月三十一日　庄内川で重金属調査のため魚採取。
六月三日　「一斉行動デー」の回答来る
七月二十七日　名古屋市職員労働組合と懇談会。
八月三日　庄内川で魚が大量死。
八月十四日　魚に大量の寄生虫。食べない。
九月八日　重金属汚染山崎川。庄内川、変わらず。
十月二十二日　「食べられるかもしれない魚釣り大会」（市長杯）。
十月二十四日　庄内川にコイ放流。名古屋釣具商組合。
十一月二十一日　名港に釣り公園、名港管理組合発表。
五十四年三月十八日　「一斉行動デー」　実行委員会。
猫ヶ洞釣りとして一般に開放。
三月二十四日　「きれいにする会」十五年のあゆみ。
「川の汚れは心の汚れ」発刊。一冊千円。
フィッシングショー参加。会の主旨訴える。
四月二十二日　釣具商組合主催
六月四日　鮎救出作戦、土岐川漁協・釣りクラブ「山彦会」協力。
「環境と健康を守れ愛知の住民一斉行動デー」
愛知県知事と交渉。
七月十日　・庄内川の河川ランク上げ、Ｄ級→Ｃ級。
七月三十日　・魚道の見直しなど。
十月二十一日　庄内川にシラス（うなぎの稚魚）登ってくる。
洋上会談、名港を考える会準備会。
十月二十三日　名港を考える会結成
十一月四日　会長、中田名大教授
十一月十八日　副会長、きれいにする会会長
五十五年一月十二日　庄内川親子釣り大会西枇杷島町主催
一月十三日　矢田川浄化作戦庄内川のシラハエを矢田川に放流
一月二十四日　第五回庄内川祭り　試食会
一月二十五日　「連絡会議」本山名古屋市長に予算要望
一月三十日　「海の博物館」見学。合成洗剤による伊勢湾の汚染調査。
一月三十一日　名港を考える会（海と川の専門委員会）出席
二月四日　公害連（愛知連絡会議）出席
二月十三日　釣り池開放問題で名古屋市農政局と対談。
二月十四日　東谷山フルーツパーク内、お神池。
二月二十三日　名港を考える会船にて名港を見学
三月二日　名港を考える会　洗剤の害について。
三月四日　きれいにする会世話人会。
名港を考える会委員会。
三月八日　一斉行動デー実行委員会。
三月二十九日　合成洗剤追放策、三川連絡会支援。
四月四日　名古屋港に新名所
緑地や釣り公園　六十五年完成へ新聞など発表。
四月十六日　名港を考える会「合成洗剤シンポ」実行委員会。
四月二十六日　一斉行動デー実行委員会。
四月二十九日　「六価クロムたれ流し」
五月七日　春日井市　池上化研工業摘発。
五月十日　愛知県水質審「伊勢湾総量規制」七月スタート。
東谷山フルーツパーク開園。（釣り池の開放は七月予定）
庄内川で鮎採取、十二・五センチに成長
名港を考える会事務局会議に出席。鮎放流
合成洗剤問題を考える会に出席。

釣り大会

五月十一日　一斉行動デー実行委員会（県への要請書）
五月十三日　きれいにする会世話人会
五月二十四日　一斉行動デー実行委員会
五月三十一日　合成洗剤を考える会。
六月一日　一斉行動デー事務局会議。
六月五日　一斉行動デー「記念講演交流会決起集会」
六月七日　一斉行動デーおよび部局交渉。
六月八日　合成洗剤を考える市民の集い
バクテリアのプール装置　ＢＯＤぐんと改善。滋賀県が実験（中日新聞）
六月十三日　名港を考える会。
六月二十四日　名古屋市の魚体採集（天白橋）
六月二十八日　合成洗剤問題を考える実行委員会。
七月一日　一斉行動デー県知事交渉。
七月二十二日　伊勢湾浄化総量規制スタート。
七月二十九日　土岐川漁協との対談
七月三十一日　きれいにする会世話人会。
八月九日　東谷山フルーツパークお神池を釣り場として開放
八月十一日　合成洗剤問題を考える名古屋市民連絡会を発足させる。
八月十九日　名港を考える会。
八月三十一日　映写会　守山下水処理場内集会場。
九月二日　守山区懇談会予算問題
九月五日　フルーツパークの石拾池の開放
九月六日　猫ヶ洞池釣り大会準備会出席。（千種区役所）
九月七日　市政懇話会
九月九日　合成洗剤を考える名古屋市民連絡会
九月十五日　猫ヶ洞池釣り大会。
十月四日　天白区、新海池、まむし池、その他視察。
十月八日　名港を考える会　名古屋釣具商　ハゼ釣り大会。
十月十四日　合成洗剤連絡会
きれいにする会世話人会。
名古屋釣具商協会、庄内川などにコイ放流。
名港を考える会。

十月十五日　市政懇話会
十月二十三日　市政懇話会　予算要請行動。
十月二十六日　合成洗剤連絡会発足集会（五七四団体）
会長　神岡浪子　日本福祉大教授
事務局　名水労
十月三十一日　十月三十一日集会（市政懇談会）
十一月七日　市政懇談会
十一月十二日　きれいにする会世話人会
十一月二十四日　名港を考える会
十一月十六日　庄内川まつり「いつかは食べられる魚釣り大会」六百名参加　名港を考える会
十二月五日　千種社協センターにて丹羽代表矢田・庄内川の実情を報告する。
十二月十五日　名港を考える会
十二月十六日　市政懇話会
十二月十九日　庄内川の水質向上と建設省中部地建発表
十二月二十四日　名古屋市が公害白書、伊勢湾は富栄養化。
十二月二十五日　愛知公害連　幹事会

五十六年一月九日
一月十三日　「きれいにする会」世話人会
一月十四日　年間行事計画　人形劇公演計画
一月十七日　県民デー、アセスメント問題を県に提出
一月二十一日　名港を考える会（博物館問題）
二月六日　市政懇話会　市長に要請書の提出
二月十一日　名港を考える会
二月十六日　「きれいにする会」世話人会
三月二十八日　人形劇公演　公園愛護会　四〇〇名参加
四月十一日　名港考える会
四月十五日　一斉行動デー
四月十七日　一斉行動デー
四月二十四日　一斉行動デー、交渉日程市県申し入れ
庄内橋にて鮎調査。採取できず。
きれいにする会世話人会
県市要請書、会計報告

四月二十七日　水分橋上流八田川より廃棄物流される。
五月八日　一斉行動デー
五月十二日　一斉行動デー
五月十八日　庄内橋にて鮎調査。採取できず。
五月二十八日　「一斉行動デー」　実行委員会
五月三十日　「一斉行動デー」　発言者打ち合わせ
六月二日　一斉行動デー　報告会　名城チオンホテル
庄内橋にて鮎調査。採取する。宮田、野崎
大十五センチ、中十三センチ、小十二センチ
先に投網で二十五～三十匹採取した人あり。
六月五日　「一斉行動デー」　知事交渉
六月十六日　名港を考える会　市民のつどい打ち合わせ
七月六日　せっけん使用を推進する消費者の集い
滋賀県大津市にて　小川さん参加。
七月七日　「きれいにする会」世話人会
七月九日　庄内橋にて鮎調査。採取する。
ためしに友釣りするも釣れず
七月十二日　名港を考える会　市民の集い　港湾会館
七月十七日　庄内橋、鮎、なぎ調査。
鮎、うなぎ、なまず、ライギョ採取。
七月十七日　自治体学校にて丹羽さん講演。和歌山県
十八日
七月十八日　一斉行動デー」
七月二十三日　名古屋市公害局と
七月二十四日　市内河川魚類調査　宮田
二十五日
七月二十六日　簡素で民主的なオリンピックを実行する会に参加
七月二十八日（　名古屋市公害局と
二十九日　市内河川魚類調査　宮田
三十日
八月八日　「きれいにする会」世話人会
八月二十三日　公園愛護会　ソフトボール大会
九月十七日　市長交渉　オリンピック問題

九月二十四日　革新市政の会
九月二十七日　「きれいにする会」世話人会
　　合成洗剤を考える市民連絡会
十月二十日　名港、伊勢湾視察　小川さん
十月二十一日　「きれいにする会」世話人会
　　庄内川などに魚放流。名古屋釣具商組合
十月二十九日　名港を考える会
　　建設省申し入れ
　　吉根エン堤問題、玉野エン堤改修
十一月十三日　庄内橋下流地下鉄工事
十一月十五日　「きれいにする会」世話人会
　　鮎帰れ庄内川魚釣り大会
五十七年一月二十日　市長交渉　革新市政の会
一月二十二日　「きれいにする会」世話人会
一月三十日　土岐川漁協と懇談　丹羽、小川
　　最近の土岐川の状況　六月頃シンポ
一月三十一日　一斉行動デー　実行委員会
二月三日　矢作川漁協と懇談。
　　矢作川の現状とあまご釣り大会
二月十三日　一斉行動デー　実行委員会
二月十五日　名港を考える会
二月二十一日　第一回矢作川漁協あまご釣り大会　参加山彦会
二月二十六日　名港を考える会
三月五日　一斉行動デー　実行委員会
三月十四日　一斉行動デー　実行委員会
三月十九日　「きれいにする会」世話人会
三月三十一日　一斉行動デー　実行委員会
四月四日　一斉行動デー　実行委員会
四月五日　名港を考える会
四月十四日　名港を考える会
四月十六日　一斉行動デー　実行委員会
四月二十一日　「きれいにする会」世話人会
四月二十五日　名港を考える会　釣り大会（枇杷島橋）
五月六日　一斉行動デー　県庁記者クラブ
五月八日　名港を考える会　博物館問題
五月九日　一斉行動デー　実行委員会
五月十日　市長対談　下水道問題
五月十二日　名港を考える会
五月十六日　名港を考える会　河川調査（天白川）
五月十八日　一斉行動デー　実行委員会
五月二十三日　一斉行動デー　決起と交流の集会
五月三十日　名港を考える会　総行動　洋上見学
六月四日　一斉行動デー　県市交渉
六月八日　河川調査　まむし池釣り場開放される。
六月十日　河川調査
六月十五日　河川調査　水質保全課
六月十七日　河川調査
六月三十日　河川調査
七月四日　名港を考える会
七月十日　一斉行動デー　実行委員会
七月十五日　中部の環境を考える会参加
八月十九日　河川調査　庄内用水調査公害局
九月十六日　名港を考える会
九月二十八日　一斉行動デー　実行委員会
十月十八日　「きれいにする会」世話人会
十月二十六日　「きれいにする会」世話人会
　　名港を考える会　総会
十一月七日　一斉行動デー　実行委員会
十一月十九日　「きれいにする会」世話人会
十一月二十一日　鮎かえれ庄内川魚釣り大会
十二月十一日　一斉行動デー　実行委員会
十二月二十六日　名東区池の保護運動参加
五十八年一月十七日　「きれいにする会」世話人会
一月二十一日　名港を考える会　釣場問題
一月二十八日　愛知の環境を守る県民決起集会
二月十四日　名港を考える会
二月二十一日　観桜会打合せ

植樹祭

二月二十八日	名港を考える会
三月六日	一斉行動デー　実行委員会
三月七日	「観桜会」打合せ
三月十八日	名港を考える会
三月二十二日	名港を考える会
三月二十七日	一斉行動デー　実行委員会
三月二十八日	「観桜会」打合せ
四月四日	「観桜会」　ホークグンス練習会
四月八日	名港を考える会
四月十六日	「きれいにする会」世話人会
四月十八日	「観桜会」打合せ
四月二十三日	「観桜会」　リハーサル
四月二十四日	「観桜会」
五月八日	一斉行動デー　実行委員会
五月十四日	鮎採取　水分橋右岸　九・五センチ
五月十五日	名港を考える会　南五区現地調査
五月二十二日	一斉行動デー　実行委員会
六月一日	一斉行動デー　決起と交流の集会
六月二日	一斉行動デー　実行委員会
六月四日	一斉行動デー　実行委員会
六月十一日	矢田川千代田橋上流シアン流入
六月十四日	中部の環境を考える会
六月十八日	「きれいにする会」世話人会
七月六日	名東区、名徳池、釣池に開放
七月十日	一斉行動デー　実行委員会
七月二十日	名港を考える会　市民のつどい
七月二十日	名港を考える会
七月二十七日	名古屋市河川調査
七月二十八日	名古屋市河川調査
七月二十九日	名古屋市河川調査
八月二日	名古屋市河川調査
八月三日	名古屋市河川調査
八月四日	名古屋市河川調査　公害局と水のシンポジウム打合せ

植樹祭

八月五日　名古屋市河川調査
八月十日　一斉行動デー　実行委員会
九月五日　名港を考える会
九月六日　「きれいにする会」世話人会　釣り大会打合せ
九月十日　合成洗剤問題を考える会
九月二十五日　一斉行動デー　実行委員会
十月二日　名港を考える会　市民のつどい
十月十一日　「きれいにする会」世話人会
十月十四日　水分橋上流にて鮎採取　二十五センチ
十月十六日　一斉行動デー　実行委員会
十月十九日　釣具商組合、コイ・フナ放流。
十一月四日　「きれいにする会」世話人会
十一月六日　鮎かえれ庄内川魚釣り大会

五十九年一月十八日　「きれいにする会」世話人会
一月十九日　名港を考える会　丹羽、公害局長打合せ
二月六日　名港を考える会　釣場問題
二月十五日　名港を考える会　博物館問題
二月二十五日　一斉行動デー　実行委員会
三月十七日　一斉行動デー　実行委員会
四月四日　一斉行動デー　実行委員会
四月八日　香流川調査
四月二十一日　一斉行動デー　実行委員会
四月二十三日　「きれいにする会」世話人会
七月二十一日　名港を考える会
七月二十二日　名港魚類調査　公害局
七月三十日　名港を考える会
八月二十五日　庄内川水生昆虫調査
九月十日　名港を考える会
九月十二日　「きれいにする会」世話人会
十月七日　名港を考える会
十月二十六日　「きれいにする会」世話人会
十月二十八日　「きれいにする会」釣り大会
十一月二十五日　名港を考える会

植樹記念
さくらの会

十二月二十三日　ため池の自然を考える会

六十年

一月十八日　一斉行動デー　実行委員会

一月三十一日　市長交渉　親水護岸問題

二月二十三日　一斉行動デー　実行委員会

三月十日　一斉行動デー　実行委員会

三月二十五日　王子公害、公害対策局と交渉

四月二十七日　一斉行動デー　実行委員会

五月三日　志段味の歴史を語る会

五月十九日　一斉行動デー　宣伝行動

五月二十六日　一斉行動デー　決起と交流の集会

五月三十一日　一斉行動デー　県市交渉

六月八日　中部の環境を考える会

七月二十四日　一斉行動デー　実行委員会

八月二十二日　水生昆虫庄内川調査

十月十六日　「きれいにする会」世話人会

十月二十五日　「きれいにする会」世話人会

十月二十七日　「きれいにする会」釣り大会

十一月三日　東谷山自然観察会

六十一年一月十日　「きれいにする会」世話人会

三月一日　「サバイバル庄内川八六」実行委員会

三月三十日　庄内川ボート下り調査

四月十二日　「サバイバル庄内川八六」実行委員会

四月二十七日　「サバイバル庄内川八六」（ボート下り）

五月十二日　一斉行動デー　実行委員会

五月十三日　名古屋市水質調査　新島田橋

五月十五日　名古屋市水質調査　三階橋

五月十七日　名古屋市水辺モニター参加

五月二十四日　「きれいにする会」世話人会

五月二十七日　名古屋市水質調査　名師橋

五月二十九日　名古屋市水質調査　新西福橋

五月三十日　マイリバー堀川　オブザーバー参加

七月十二日　匠生協シンポ丹羽講演

七月二十四日　魚取り（建設省魚展示用）

庄内川まつり

八月二十四日　天白川に親しむ市民の会
九月六日　愛護会映写会
九月八日　一斉行動デー　実行委員会
九月十一日　名港を考える会
九月十三日　「きれいにする会」世話人会
九月二十一日　名港フェスティバル魚展示
九月二十八日　志段味を考える会　宮田講演
九月二十九日　一斉行動デー　実行委員会
十月五日　名古屋平和まつり
十月七日　「きれいにする会」世話人会
十月九日　一斉行動デー　実行委員会
十月十四日　名港を考える会
十月十九日　一斉行動デー　決起と交流の集会
十月二十三日　一斉行動デー　県市交渉
十月二十四日　きれいにする会世話人会
十月二十六日　第十二回庄内川まつり
十一月六日　鮎の住む庄内川魚釣り大会
十一月十六日　堀川と私たち　丹羽会長講演
十一月二十七日　設楽ダム建設用地視察　宮田
十二月十六日　「きれいにする会」世話人会

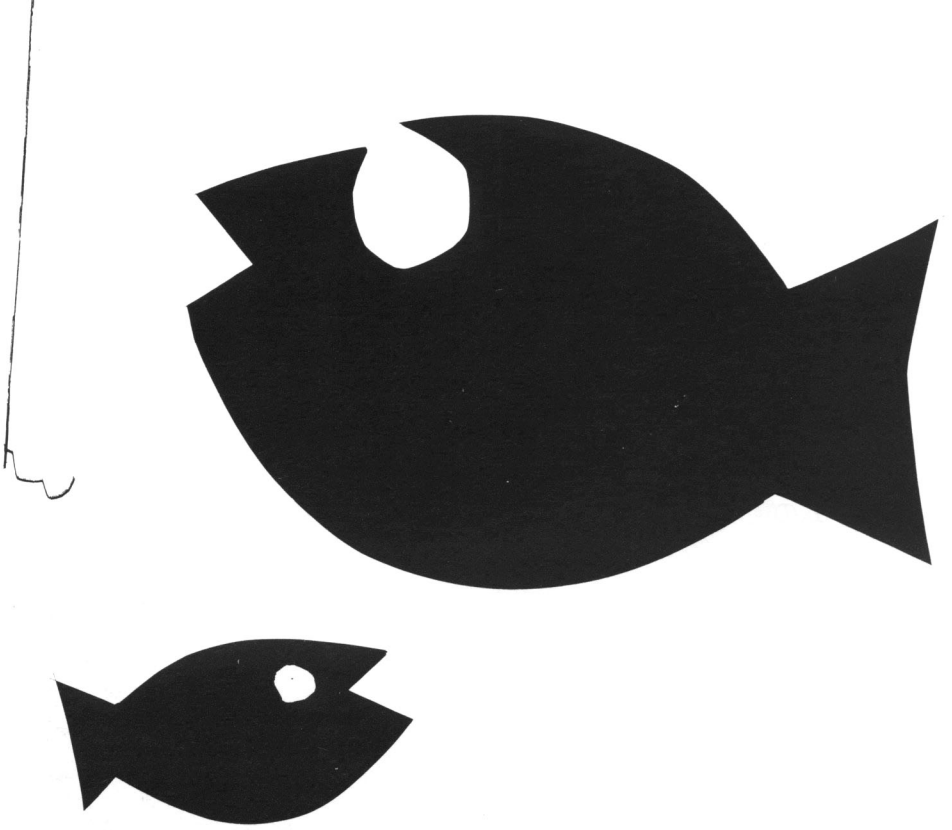
六十二年二月十四日　名港を考える会
二月二十一日　「きれいにする会」世話人会
三月十六日　合成洗剤問題を考える市民連絡会
三月二十九日　一斉行動デー　名港を考える会
四月十四日　一斉行動デー　実行委員会
四月十八日　「十五の森」コンサート
四月二十日　一斉行動デー　実行委員会
五月六日　一斉行動デー　実行委員会
五月十七日　町づくりシンポ実行委員会
五月二十四日　一斉行動デー　実行委員会
五月二十八日　名古屋の水源を見る会
一斉行動デー　決起と交流の集会
一斉行動デー　実行委員会

堀川の魚類調査

釣り大会

五月二十九日　一斉行動デー　県市交渉
六月三日　町づくりシンポ実行委員会
六月二十一日　大山川釣り大会参加
六月二十三日　「きれいにする会」世話人会
七月二十一日　水生生物調査　名古屋市
七月二十二日　水生生物調査　名古屋市
七月二十四日　水生生物調査　名古屋市
八月二日　あじま夏まつり　参加
八月三日
八月四日　建設省水生生物調査
八月二十九日　SOS伊勢湾会議参加
八月三十日
九月八日　「きれいにする会」世話人会
十月十五日　名港を考える会
十一月五日　「きれいにする会」世話人会
十一月八日　第十三回庄内川まつり
鮎の住む庄内川魚釣り大会
十一月十二日　名港を考える会
十一月二十八日　伊勢湾・なごや港の環境を考える市民の集い　参加・報告
十一月二十九日
十二月十一日　名港を考える会　総会
六十三年二月二日　「きれいにする会」世話人会
二月六日　合成洗剤問題を考える市民連絡会総会
二月二十日　一斉行動デー実行委員会
二月二十二日　名港考える会
三月十六日　一斉行動デー実行委員会
三月一九日　柳川堀割物語上演会
三月二十六日　公害局水辺モニター
三月二十九日　「きれいにする会」世話人会
四月一日　一斉行動デー実行委員会
四月二日　一斉行動デー実行委員会
四月十八日　名港考える会
四月二十三日　十三年のあゆみ出版記念パーティー

釣り大会の歴史



四十九年十二月十一日　きれいにする会発足
五十年　六月二十九日　第一回　食べられない魚釣り大会　水分橋
九月二十八日　第二回　食べられない親子魚釣り大会　矢田川、香流川合流点
十月二十六日　第三回　食べられない母子魚釣り大会　松川橋
五十一年五月九日　第一回　庄内川まつり　食べられない魚釣り大会新川中橋
六月十四日　九年ぶり、県によって鮎放流　吉根橋
九月二十八日　「山彦会」発足
十月六日　名古屋女子大学廣教授により庄内川の鮎、天然と発表
十月二十四日　第二回庄内川まつり　食べられるかもしれない魚釣り大会
五十二年一月三十日　水分橋　魚の試食会
五月十五日　土岐川支流肥田川にあまご放流
十月九日　鮎救出作戦　庄内橋
五十三年四月十一日　第三回庄内川まつり　食べられるかもしれない魚釣り大会
十月二十二日　水分橋
五十四年四月二十二日　鮎救出作戦中止
十一月十八日　第四回庄内川まつり　食べられるかもしれない魚釣り大会
五十五年七月三十一日　水分橋　第一回市長杯
十一月十六日　鮎救出作戦　庄内橋
五十六年十一月十五日　第五回庄内川まつり　食べられるかもしれない魚釣り大会
五十七年四月二十五日　水分橋
十一月二十一日　フルーツパーク　釣り池開放
五十八年十一月六日　第六回庄内川まつり　いつかは食べられる魚釣り大会
五十九年十月二十八日　水分橋
六十年　十月二十七日　第七回庄内川まつり　鮎かえれ庄内川魚釣り大会　水分橋
六十一年十月二十六日　名港考える会協力釣り大会　枇杷島橋
六十二年十一月八日　第八回庄内川まつり　鮎かえれ庄内川魚釣り大会　水分橋
魚拓、指導　市長杯、西尾市長に変わる
第九回庄内川まつり　鮎かえれ庄内川魚釣り大会　水分橋
第十回庄内川まつり　鮎かえれ庄内川魚釣り大会　水分橋
第十一回庄内川まつり　鮎かえれ庄内川魚釣り大会　水分橋
第十二回庄内川まつり　鮎の住む庄内川魚釣り大会　水分橋
第十三回庄内川まつり　鮎の住む庄内川魚釣り大会　水分橋

五つのとりくみ　—その⑤—

水のリサイクル

上流部のリサイクル

私たち人類にとって水はかけがえのない「生命の水」です。「水をつくる」「水をつくり出す」とはいっても自然の恵みの雨がなければ科学の進んだ今日でさえどうしようもありません。私たちは巨大なコンクリートダムを建設し、水を利用することによって発展をなしとげてきましたが、巨大ダムも渇水にはなすすべはありません。しかし、森林は森林の持つ「保水力」によって新たな水源を作り出すことが可能です。広葉樹などの原生林は特に「保水力」が高く、ダムの何倍もの能力を持っています。今、この水源地の原生林は、乱開発と過疎化によって破壊され続けています。一度なくした森林を作るには、長い年月を要します。森林を守り育てる営林署の労働者が国策の行政改革の名のもとに、森林を守る労働者の削減と独立採算による帳尻合わせの伐採は水資源をつくり出す時代に逆行するものだと言わざるをえません。水資源確保のため巨大コンクリートダムの建設には莫大な資金と大きな犠牲を必要とします。「森林もダム」と考えるなら水資源対策費としての森林育成費も必要です。「森林保水力ダム」の建設には恩恵を受ける都市住民もその一部を負担すべきだと思います。水源地の森林を守り　育てることは家的規模と視野で過疎対策と森林を守る労働者の問題の解決なくして「新たな水」をつくり出し次代に残すことはできません。「新たな水」をつくり出すことは川の自浄力を高め、河川浄化には不可欠です。

中下流部のリサイクル

汚した水を再生し再利用することによって新たな水をつくり出すことです。たとえば庄内川の中流部にある王子製紙春日井工場は庄内川の伏流水（地上の流水が地下に一時潜入して流れるもの）などを１日17万トン利用し、汚水として流し出しています。この17万トンの汚水を再生し再利用すれば汚れを今の半分にすることができます。近代技術をもってすれば可能であります。汚した企業がきれいにする努力をするのは当然のことですが、新たな浄化施設の建設には企業努力だけでは解決できない問題があります。誘致した市はむろん関係する県などにより浄化対策施設の建設費の相互出費などの新しいとりくみも必要です。新たにつくり出された水を堀川浄化に役立てることもできます。また、生活排水、合成洗剤の問題も高次処理のできる下水処理場の建設によって解決できます。

※「汚した水は汚した者がきれいにする」「住民と行政と企業」が一体となったときにこそ新しい水が生まれます。河川を原点から受皿まで一本のものとして考え行政のカベを取り除かなければ、川本来の姿にはなりません。

編集後記

「矢田・庄内川をきれいにする会」については、いろいろ新聞や集会で知っていたが、この会に参加して活動することになろうとは考えてもいませんでした。

よくよく考えてみれば、職場や他地域の活動が主なため、自分の地域に根を張っていないことを反省させられ、一年なんとか丹羽、宮田両氏について活動してきた小生でした。

さて今回、会の「十三年史」をとなり、いろいろ考えましたが、とにかく高名な方々の御支援が多いのには驚きました。

今回「十三年史」を編集するのに、次の事にポイントを置いて作成しました。

第一に、「会」の過去と現在、特に会長として指導された丹羽秀義氏のおいたちと、七十六年間の人生哲学というか、これをそろえてみたいと思いました。明治、大正、昭和を生き続け、その中でつちかわれた住民運動の理念とその実践を文字にしたつもりです。

第二は、「会」の表舞台で活躍する男子諸氏を支えてきた御婦人方の苦労とその人生観を探ってみたいと思いました。

毎日、外で活動する男子を支え、家庭での諸問題を処理しぬいた御婦人方の努力なしには住民運動は成立しません。それを成立させ得た努力にスポットをあててみました。

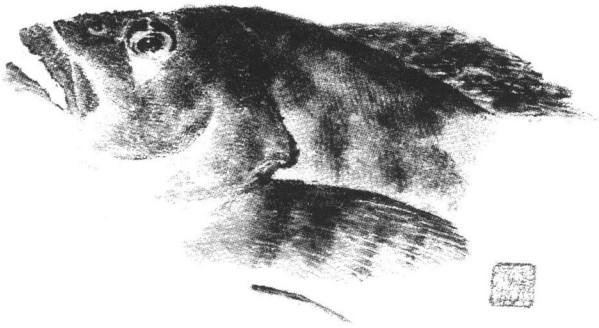
第三に、われわれ「会」の原則である「企業、行政、住民、三位一体」がはたして「次代の青少年にきれいな水とあたたかい社会」を残すだけの実践をしたのか、また、それが今後どのように発展していくのかという「会」の展望について、「会」の役員座談会と宮田会長の発言でしめくくりました。

以上三点からいろいろな方々の御意見を入れ編集してみました。

歌人、田中収氏には一日中矢田・庄内川を廻り、歌を作ってもらい、マンガの三宅みき子氏も、雨の中、矢田・庄内川を廻ってもらいました。写真家、山本光春氏には氏の仕事を少しのばしてもらい、矢田・庄内川の源流から川の源流へと走りまわってもらいました。

そのほか、多くの方々に協力してもらい、誌上をかり、深く感謝したいと思います。また、若き企画家、早川氏には深く感謝しております。

矢田・庄内川をきれいにする会
事務局長　三宅　隆夫



十三年のあゆみ

矢田・庄内川をきれいにする会

発行　昭和63年４月

連絡先・宮田　照由
住　所・名古屋市守山区大字瀬古字河西254
TEL ０５２（７９４）３８７６

印　刷・もんもん企画
愛知県西春日井郡師勝町鹿田大門 70-1
TEL ０５６８（２１）２３１０